

J EARN 設立 20 周年 記念



国際協働学習

iEARN レポート

2022 年度

特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構 (J EARN)

2023 年 6 月 1 日 発行 ISSN 2434-0049 (オンライン)

設立20周年を迎えて

今から20年前の2003年、NPO法人ジェイアーン（正式名:特定非営利活動法人 グローバルプロジェクト推進機構 JEARN）が設立され、同年夏、日本の兵庫県で、日本初となるアイアーン（iEARN）国際会議&ユースサミット（5日間）を主催しました。世界の教員や子供たちが一堂に会し、お互いの実践や教育問題などを直接に情報交流することによって、国際理解を深める国際会議です。

2003年当時、日本では、まだICT（Information Communication Technology）もPBL（Project Based Learning）も一般的ではなく、ICTを使って海外の学校とプロジェクトを通して共に学ぶ学習を、日本語で「国際協働学習」と呼ぶようになりました。それから20年、ジェイアーンは、アイアーンの日本センターとして、「国際協働学習」という新しい未来の教育の形を日本の教育現場で推進・普及していこうという目標のもと活動を続けてまいりました。その後、日本発のグローバルプロジェクトが次々と誕生し、国際協働学習の実践報告が少しずつ行われるようになり、2018年に、日本初の「国際協働学習」研究の逐次刊行物として、このオンラインジャーナル「国際協働学習—iEARNレポート」をスタートさせました。毎年6月1日に発行しています。

2023年現在、国際協働学習を通して、グローバル・シティズンシップ教育（デジタル・シティズンシップ教育を含む）を推進するジェイアーンでは、様々な分野の方が会員となり活動しています。外国語教育、異文化コミュニケーション教育、SDGs教育、デジタル・シティズンシップ教育、平和教育など、様々な分野において、国際協働学習の実践と研究が行われています。20周年を迎え、このオンラインジャーナルを始めとして、ジェイアーンが、包括的な国際協働学習を軸とした（デジタル・シティズンシップ教育や外国語教育などを含む）研究・提案・発信を行い、国内外の多様な人々と連携し、次世代を担う地球市民の育成に貢献できるよう努力したいと思っています。

末筆となりますが、これまでの皆さまからの温かいご支援とお力添えに感謝申し上げますとともに、引き続き、ご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2023年6月1日

特定非営利活動法人 グローバルプロジェクト推進機構（JEARN）
理事長 栗田 智子

国際協働学習 iEARN レポート (2022) 目次

番	題 名	所 属	報告者代表氏名	頁
	設立20周年を迎えて	JEARN	理事長 栗田智子	
	論文編			1
1	オンライン国際協働学習における生徒エンゲージメント	麻里英語教育 ポート	中村 麻里	2
2	大学生のファシリテーション能力とグローバルリーダーの育成 ーJEARN Youth Projectでの国際協働学習におけるファシリテーションを通してー	青山学院大学	岡田 麻唯	10
	プロジェクト実践編			19
3	Machinto - Hiroshima/Nagasaki for Peace ー今、この時代に広島・長崎が語り継ぐことは何かー	iEARN/JEARN	高木 洋子	20
4	Machinto プロジェクト デジタル・コミュニティにおける平和の学び ーPray for Peace Together with Ukrainian Refugeesの取り組みー	青山学院大学	栗田 智子	22
5	GOMI on EARTH ーごみの長い旅ー	iEARN/JEARN	高木 洋子	24
6	The Olympics & Paralympics in Action (TOPA) Project ー北京2022から、パリ2024へ向けてー	iEARN/JEARN	滝沢 麻由美	25
7	GIGAスクール時代のデジタル・シティズンシップ教育 ー防災世界子ども会議NDYSプロジェクトの挑戦ー	防災世界子ども 会議	納谷 淑恵 岡本 和子	27
8	THE TEDDY BEAR PROJECT REPORT-2022	iEARN/JEARN	Puppala Rasagnya	31
9	Folk and Culture Project 実践報告	神戸市立すずら んだい児童館	福井 良子	34
	小学校・中学校実践編			36
10	Teddy Bear Projectにおける個別最適化な学び ー教師間の打ち合わせと親和な関係と共にー	金沢市立 大野町小学校	角納 裕信	37
11	アンネ・フランクから学ぶ人権	仙台市立 上杉山中学校	若生 深雪	39
12	オンライン国際共修のからの学び	仙台市立 上杉山中学校	若生 深雪	41
13	ウクライナのリュウボブ先生とのオンライン授業	仙台市立 上杉山中学校	若生 深雪	43

14	知力と行動力を育む探究的な英語の授業	仙台市立 上杉山中学校	若生 深雪	45
	高校実践編			47
15	Girl Rising Project ―「女性の人権」と「質の高い教育」を守るために―	啓明学園中学校高等学校・	関根 真理	48
16	2022年 Machintoのプロジェクトに参加して ―異なる文化に暮らす人々と平和への願いを共有する―	山口県立 高森高等学校	赤松 敦子	51
	大学実践編（含Youth Project）			54
17	Holiday Card Exchange プロジェクト ―ジェイアーンYouthプロジェクトにおける学生の学び―	実践女子大学 短期大学	栗田 智子	55
18	GOMI on EARTH Project Youth Facilitator実践 ―Mottainai Contestの経験を通して―	青山学院大学	岡田 麻唯	57
19	Machinto Hiroshima/Nagasaki for Peace Project ―平和教育の実践「What is HEIWA?」ワークショップ―	青山学院大学	勝又 恵理子	59
20	Future Teachers プロジェクトKOSKO ―未来の教員たちによる国際チームの挑戦と課題―	明治学院大学	長谷川 早百合	61
21	大学におけるテディベアプロジェクトの支援	金沢星稜大学	清水 和久	63

<https://jearn.jp/iearn-report/index.html>

ISSN 2434-0049

論文編

オンライン国際協働学習における生徒エンゲージメント

～民間英語教室におけるケース・スタディ～

MELEP（麻里英語教育ポート）、神戸松蔭女子学院大学・非常勤講師 中村 麻里

学びの実現には生徒のエンゲージメント（積極的関与）が重要であることから、近年、外国語教育研究の分野でも生徒エンゲージメントに関する研究が注目を集めている。このケース・スタディでは筆者の主宰する英語教室で実施したモルドバの国立高校の生徒と日本人中高生とのオンライン国際協働学習プロジェクトにおける日本人生徒のエンゲージメントについて、授業観察記録、学習成果物、生徒アンケート、インタビューなどをもとに考察した。その結果、このプロジェクトは学習者エンゲージメントの喚起に有効であったことが認められたと同時に、課題も明らかとなった。

国際協働学習 プロジェクト学習 オンライン 生徒エンゲージメント 自己効力感

1. はじめに

生徒エンゲージメント（student engagement）が学習において果たす役割は、2,000年代より教育心理、学習理論の分野で議論されてきた（Fredricks et al., 2004 他）。近年では多くの研究がエンゲージメントは学びの実現のための必須条件であると示唆しており（Mercer, 2019）、生徒エンゲージメントを Sinatora 他（2015, p.1）は“the holy grail of learning”（学びの聖杯）、Ellis（2019, p.48）は“the major force of learning”（学びの主要な力）と形容している。

言語学習におけるモチベーションの研究者である Mercer と Dörnyei は生徒エンゲージメントを「学校に関する活動や学業的な課題に対する積極的な参加と特定の行動への関与」“active participation and involvement in certain behaviors...in school-related activities and academic tasks”（Mercer & Dörnyei, 2020, p.2）と定義し、現代の第二言語学習において生徒エンゲージメントに注目する利点として2つの要素を挙げている。

第一要素は急速な技術的發展と社会的変革にともなう社会環境の変化に起因する。現代の生徒は急速な SNS の広がりの中で日常生活を送り、膨大な情報やコミュニケーションの機会にさらされている。両者はそのような環境にある生徒の学習へのエンゲージメントを高め維持することは容易ではなく、教育者は生徒のエンゲージメントについて注意深く考察すべきであると主張している。

第二要素は語学学習という領域の特性による

ものである。とくに近年重要視されているコミュニケーション・コンピテンシーの養成においては言語使用の自動化と言葉のやり取りへの積極的参加が重要であり、その実現には生徒自身の学習への長期的かつ意欲的な関与が必要となることから、エンゲージメントを長期的に高く保つことが必須であると述べている。

一方、2020年より小学校から中学校、高等学校へと順次適応された学習指導要領（文部科学省, 2017a, 2017b, 2018）は、急速に変化しつつある社会に適応出来る生徒を養成するために主体的、対話的で深い学びに取り組むアクティブ・ラーニングを提唱している。この観点からも、日本において教育者が生徒エンゲージメントについて理解を深め、それを高める学習環境やタスクを提供することは重要である。

生徒エンゲージメントにはお互いに有機的に作用しあう行動、認知、社会、情動の4つの中心的要素によって構成されている（Sang & Hiver, 2021; Philip & Duchesne, 2016）。行動的エンゲージメントはタスクに取り組む時間と参加の度合いを指し、第二言語学習においては発話への自主的な関与や言葉のやり取りでのイニシアティブなどとして観察される。認知的エンゲージメントは学びに対する生徒のメンタルエフォートを意味し、言葉のやり取りにおいては提案、論理的思考、ためらい、繰り返しの現象として現れる（Reschly & Christenson, 2012）。また、認知的な関わりは協働学習では意見交換、説明、意見や作品についての評価や詳しい情報の提供などに見られる（Helme & Clarke, 2001）。社会的エンゲージメントは、学習コンテキストでの他者との関わりを指し、

言語学習においては言葉のやり取りやお互いの支え合いが必要であることからエンゲージメントの鍵となる要素である (Svalberg, 2009)。情動的エンゲージメントは生徒の楽しみや熱意、期待という形で表出し、教師や仲間との肯定的な関係や生徒間の肯定的なやり取りによって強化される。この情動的側面は行動的、認知的、社会的エンゲージメントを高めると報告されている (Baralt et al. 2016)。以上の4要素のうち、社会的、情動的側面は、特にコミュニティへの帰属意識が強く仲間との関わりが学びに大きく影響する児童や若年層にとって重要である (Philip and Duchesne, 2016)。

「海外の多様な他者との対話・協働を通し、グローバルとローカルの両面で課題を考察し、成果物を作成する」(栗田 2019, p.5) iEARN の国際協働学習 Global Project Based Learning では長期的に各生徒が論理的に思考しながら独自の観点から調べ学習をし、異なる文化的背景を持つ相手国の生徒やクラスメートとコミュニケーションをはかる。さらには、地理的、物理的制限からくる数々の問題を肯定的な話し合いを通して解決する場面に直面する。これらの要素から、国際協働学習は多面的に生徒エンゲージメントを喚起するアプローチとして有効と考えられる。

2. 研究目的

このケース・スタディでは、筆者が主宰する民間英語教室で実施した日本人中高校生8名とモルドバ共和国ニスボレニ市の国立高校の生徒9名とのオンライン国際協働学習プロジェクト “One Day in the Life” における日本人生徒のエンゲージメントの度合いとその起因、および今後に向けての課題を考察することを目的とした。

3. 研究方法

プロジェクトを実施したクラスでの日本人中高生の行動観察とその記録、オンライン・サイト上の交流記録、リアル・タイムのミーティングのビデオ記録、プロジェクト終了時の日本人生徒8名の振り返りアンケート、4名の生徒とのインタビューをデータとし、質的アプローチにより分析した。

生徒アンケート(付録1)は、無記名式で五肢択一方式の12項目、それぞれの項目についての自由記述と1項目の独立した自由記述で構成されている。五肢択一の項目(問1-12)は生徒エンゲージメントの喚起と維持に作用する要素 (Mercer & Dörnyei, 2020) であるタス

クレベル(問1)、興味(問2)、退屈(問3)、驚き(問4)、価値(問5)、認知負荷(問6)、協働(問7:クラス内、問8:両国間)、積極的関与の機会(問9)、成長マインドセット(問10)、振り返りの機会(問11)、教師の介入(問12)について問うた。さらに問13で生徒はプロジェクトに関連することがらについて自由に記す機会が与えられ、アンケートを基にしたインタビューへの協力の可否を選ぶ項目も提示された。このため、インタビューへの協力を可とした生徒6人についてはアンケートでの匿名性が失われた。

なお、本論文での写真、アンケート等のデータの使用については、相手国の責任者および本校の生徒、保護者より許可を得て実施され、アンケート、インタビューにおいては無回答とする選択肢も与えられた。

4 研究対象プロジェクト概要

研究対象とした国際協働学習プロジェクトは iEARN が提供する One Day in the Life である。対象生徒は、日本側は英語学習歴10年から11年の中学2年生から高校2年生8名、交流相手はモルドバの国立校に通う高校2年生の9名、交流期間は2021年10月から2022年2月の5か月間であった。生徒は iEARN が示すプロジェクト概要 a project in which students exchange photographs/images describing days in their lives, and then make cross-cultural comparisons (生徒は日々の生活の写真や画像をやり取りし異文化比較をする) にそった活動を中心にオンライン掲示板サイト Padlet を通して実施し、Zoom での2回のリアル・タイムでのミーティング・アップの機会を持った。

プロジェクトの概要については、2021年9月にモルドバの国立高校の英語教師と筆者がメールで打ち合わせをし、相手校にとっては学校教育の一環ということを経験し、約1か月ごとにモルドバの英語科カリキュラムに沿う1つのテーマ(愛、家族、学校、自由)について学び合うことを合意した。また、2か月半に1回、協働の仕上げとしてリアル・タイムのミーティング・アップを実施し、各ミーティング・アップでのプレゼンテーションとディスカッションを成果物と位置づけた。テーマは定められたカリキュラムの制約を受けるものの、プロジェクト実施段階においてはテーマの切り口やミーティング・アップの内容など、生徒が協働しながら意思決定する機会を可能な限り多く提供するという方針を確認した。

両校の生徒がエッセイやビデオを投稿しコメ

ントし合う交流用 Padlet ページでは、生徒の自己紹介ビデオとそれに対するテキストでのコメントにはじまり、各テーマに関連する両校のクラス内での話し合いをもとにしたエッセイの投稿と投稿へのテキスト・コメントで知の構築を図った。5カ月間に日本から49件、モルドバから33件の投稿があった。この期間、日本の生徒はテーマに沿って月に2回のオンライン授業（計8回）でのディスカッションとクラス用 Padlet ページ上での調べ学習の共有、クラスメートとのテキストによる意見交換、単元ごとの振り返りなどの自宅学習に取り組んだ。

Zoom でのミーティング・アップは11月末と2月末の2回、1時間ずつ実施した。1回目はモルドバの生徒が企画と進行を務めて両校が「愛」と「家族」をテーマに発表をし、それに基づく話し合いをした。2回目は日本の生徒が企画と進行を担当し同様に「学校」と「自由と秩序」について発表とディスカッションをした。

5. 研究結果と考察

プロジェクトを通して、おおむね積極的にタスクに取り組む生徒の様子がみられ、アンケート結果からタスクレベル（問1）、興味（問2）、価値（問5）、認知負荷（問6）、協働（問7、8）、積極的関与の機会（問9）、振り返りの機会（問11）、教師の介入（問12）について生徒自身が高く評価していることが明らかになった。他方、驚き（問4）、成長マインドセット（問10）については生徒によって受け止めに違いがみられた。以下、成果物、観察記録、アンケート、インタビューの分析から明らかになった特筆すべき4点を記す。

5-1 適切なテーマ選択

前述のとおりこのプロジェクトでは相手国の英語科カリキュラムに沿ったテーマについて協働学習を進めたが、調査を通して単元によって日本人生徒のエンゲージメントの度合いに差があることが明らかになった。Padlet 上のやりとりでは「学校」の単元で日本人生徒は具体的に強い感情や深い思考をうかがわせる表現（例：I hate …, … so Japanese schools should…）を最も多く使用し、学校教育から考えた日本の文化についてのリサーチを行い独自の解釈を投稿する生徒もみられた。モルドバの生徒の投稿に対しても情動的関わりを示す表現（例：I'm surprised that…, I'm very jealous.）や理由付けの表現（例：because, so）を使ったコメントや国の学校文化を比較した詳しいコメントを数多く残し質問もするなど強い興味を示していた。また、ミーティング・アップではモルドバの生徒

の発表を身を乗り出して傾聴し挙手して質問する姿も見られた。プロジェクト後アンケートでは興味を持ったトピック（問2）として7名の生徒が学校の単元を挙げており、生徒Aは両国の学校制度比較した経験をもとに日本の学校文化についての見解を記していた。アンケートでの自己主張は生徒のこのテーマへの強い関心の表れであろう。

一方「愛」の単元では愛についての曲の歌詞の解釈を話し合ったが、クラス内の話し合いでは「考えたことがないからわからない」「想像つかない」という発言があり Padlet においても投稿は短く、モルドバの生徒の投稿へのコメントも少なく、ミーティング・アップ時には相手国の発表に対する感想や質問が出ることはなかった。アンケートでは2名がこのトピックでの活動は退屈・やや退屈（問3）、1名が戸惑った（問4）と回答している。

インタビューでトピックの選択について尋ねたところ、「愛のトピックは退屈だった」と答えた生徒Bは「自分の興味のあるテーマを自分で考え意見を言う形だとより積極的な意見交換が出来たと思う」、「戸惑った」と答えた生徒Cは「自発的ではなくてカリキュラムのきまりに乗っかって進んでいた感じがした」と述べていた。

Mercer と Dörnyei (2020)は学習者エンゲージメント維持には学習内容の実生活との関連性(real world relevance)が重要であり、学習者はある程度の知識があるものに対しては好奇心を持つことは出来るが、知識がなければ興味を持つことは出来ないと述べている。学校は生徒にとって身近であるが愛は実生活との関連性が感じられなかったことからこのようにエンゲージメントの違いが生じたものと思われる。

5-2 立場の近いロールモデル(near peer role-model)

このプロジェクトの2回のミーティング・アップのうち、1回目はモルドバの生徒、2回目は日本の生徒が企画と進行を担当した。日本の生徒は1回目のミーティング・アップでのモルドバの生徒の積極的態度とコミュニケーション力に驚き、ミーティング・アップ後の振り返りエッセイでは6名の生徒が自分も見習いたいと表現した。日本の生徒は2回目のミーティング・アップの準備と本番の進行を筆者の助けなくクラス内の協働で進めたが、その際、全員が進んで提案や質問をし、通常よりも高いエンゲージメントを示した。1回目のミーティング・アップ後の振り返りエッセイで下のよ

うに記していた生徒 A は2回目のミート・アップの司会役に立候補し熱心に務めた。

モルドバの生徒は僕たちよりも相手をよく理解しようとしてコミュニケーションに熱心だっただけでなく念入りに準備をしていた。次のミート・アップでは僕は学校についてもっとディスカッション出来るように準備して、自分の意見をリラックスして話せるようにしたい。振り返ってそこから学ぶことがあるから間違えてもいい。(原文英語)

このプロジェクト後のウクライナ人学生とのオンライン交流(2022年8月)で司会を立候補した生徒Dは、インタビューでその理由について、当プロジェクトで生徒Aが司会を成功させたので自分もやってみようと思ったと述べた。また、生徒Cはウクライナ人学生との交流ではモルドバの生徒がしてくれたような盛り上げる立場になりたいと思い努力したと話していた。生徒Eはこのプロジェクトでモルドバの生徒が批判的思考を持って英語を使っている姿に触れたことは、その後の彼女自身の国語の作文学習にも良い影響を与えていると語った。

Murphey (1998) は文化的背景や歳が近く尊敬できる「立場の近いロールモデル」(near peer role model) が学習において成功体験をしている姿を見ると生徒のやる気を促進させると述べており、第二言語習得の分野では立場の近いロールモデルが生徒のモチベーションを高めることが実証されている。(Dörnyei & Murphey, 2003; Murphey & Arao, 2001) さらに Mercer と Dörnyei (2020) はこの立場の近いロールモデルを通しての代理学習は生徒の自己効力感(ある状況である特定の課題をやり遂げられるという信念)に有利に働きエンゲージメントを高めると主張している。このプロジェクトでは、相手国の模範的生徒のみならずクラス内の立場の近いロールモデルがプロジェクト期間中の学習者エンゲージメントの高まりに大きな影響を与えただけではなくその後の学習にも肯定的な影響を及ぼした可能性が示唆された。

5-3 「任せる」という介入と集団凝集性

アンケートでは教師の介入(問12)について全員が肯定的評価をしているが、振り返りやアンケートの記述回答、インタビューから、生徒たちは特に教師が2回目のミート・アップの企画や本番での進行を彼らに任せたことを有効と捉えていたことが浮かび上がった。例えばアンケートで生徒Fは「(教師が)あえて質問や発言を促さないことでより積極的に生徒が発言

の機会を自分で作ることが出来た」、生徒Gは「自分たちにMCやタイムキーパーを任せてくれることでより主体的に活動出来た」と表現している。また、生徒Eはインタビューで、計画を立てる授業で司会をしたことにより普段使わない思考をしたと語っている。実際、5-1(2)で述べた通り、この2回目のミート・アップの準備と本番では全生徒が積極的かつ表情豊かに提案や質問、建設的批判をし、全面的なエンゲージメントの高さを示していた。

生徒は特に企画において、1時間という限られた授業時間の中で自分たちや相手国の生徒の英語スキルと興味、実現したい学びや技術的な制約を考えながらミート・アップの内容を決めるという責任を負うこととなった。この主体的行動が求められるタスクが彼らの積極的活動意志(willingness to engage)を喚起したと考えられる。ミート・アップ後の振り返りエッセイでは、司会を務めた生徒Aは次のように述べていた。

なんて素晴らしい時間を過ごせたのだろう！僕たちは準備からディスカッションまですべてをうまくできた。教室のみんなが初めから最後までアクティブだった！みんながいなければこんな特別な経験は出来なかった。またモルドバのみんなに会えると思って英語だけではなくて社会のことも学んでいこう！(原文英語)

他の7名も振り返りエッセイで生徒Aと同様に「We」という表現を使いクラスメートに向けて感謝を述べているが、同様の表現はモルドバの生徒が準備と進行をした第1回目のミート・アップ後の振り返りでは見られなかった。このことから、この2回目のミート・アップの準備と進行という挑戦しがいのあるタスクへの取り組みが社会的エンゲージメント向上に重要な役割を果たすクラスの集団凝集性(Fredericks, 2014; Mercer & Dörnyei, 2020)を高める役割を果たしたと考えられる。

5-4 自己効力感と価値

このプロジェクトを通して日本の生徒はおおむね高いエンゲージメントを示していることが観察された。しかしプロジェクト後の振り返りやアンケートを通して、個々人の自己効力感と価値観が、このプロジェクトへの関わりについての自己評価に影響していることが明らかになった。

生徒Hはディスカッションの場で意見を聞かれた際に「わからない」ということが数回あり、

司会進行やプレゼンテーションの立候補をすることもなかった。また、アンケートの問9（積極的関与）について「あまり当てはまらない」と回答し、「自分に自信が出ず、他人が何か発言した方がより良い意見が出て、周りの人にとっては深い学びになると思った」と記述している。また、問1（タスクレベル）、問5（価値）、問10（成長マインドセット）で選択肢「わからない」を選んでいく。また「聞き取れることばと聞き取れないことばがあったので自分のレベルにあっているかわからない」（問1）「ネイティブの人と話す機会がある仕事に就こうとは思っていない」（問5）と記述し、プロジェクト後の振り返りでは「僕は英語にもっと自信を持たなければいけないと思うが、英語が得意ではない。」（原文英語）と記していた。

学習者エンゲージメントは学習コンテキストのみならず個人の自己効力感や個人が学習課題に見出す価値に影響を受けるといわれている（Bandura, 1984; Schunk and Mullen, 2012; Wang and Mercer, 2021 他）。生徒Hとはアンケートの機会を持つことが出来なかったため詳細を知ることは出来なかったが、自己効力感と英語学習に見出す価値の低さが彼のエンゲージメントに影響したと推測される。

6. 結論

このケース・スタディではオンライン国際協働学習プロジェクトが日本人中高生の生徒エンゲージメントに与えた影響を考察した。その結果、生徒にとって身近なテーマの選択と、協働相手国の生徒の優れた言語能力や自律学習スキルに触れる機会が生徒エンゲージメントに好ましい影響を与えたことが明らかとなった。しかし、国際協働学習においてこれらの実現を可能にする相手と巡り合うことが可能とは限らない。また、生徒にタスク・デザインや進行の責任を持たせることにより生徒エンゲージメントを高めたことが認められた。このためには生徒側に必要なコミュニケーション・コンピテンシーや自律学習スキルが備わっていることと、教師が生徒の能力を把握し適切な足場架けをすることが求められる。さらに、エンゲージメントは生徒個人の自己肯定感や価値観に影響を受けたことも示唆された。これは、国際協働学習プロジェクトを通して全生徒のエンゲージメントを高め維持するには、その基盤としてプロジェクト外の学びの場においても教師が常に各生徒の自己効力感と英語学習についての価値観を高めるよう努めることが重要性であることを示唆する。

なお、以上はひとつのオンライン国際協働学

習プロジェクトについての当事者である筆者による考察であり主観の存在を認めず、異なる学習コンテキストにおいて本レポートでの議論が当てはまるとは限らない。

生徒エンゲージメントに関連して Sang & Hiver (2021, p.17)は「言語学習はその過程において献身的な努力が求められる時に困難な旅である」“Language learning is a long sometimes arduous journey that requires devoted effort to the process of learning.”と述べている。2020年に始まったパンデミックによりオンライン学習が促進され文部科学省がデジタル・ツールを活用した探求学習を推進する中、オンライン国際協働学習が学習者エンゲージメントに与える影響について今後研究が進められることを期待したい。

参考文献

栗田智子. (2019). 「アイアーンの国際協働学習」とは何か - 国際協働、プロジェクト学習、主体的・対話的で深い学び、グローバル・コンピテンスの視点から - 」特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構ジェイアーン国際協働学習 iEARN レポート 2019年度 2-7.

文部科学省. (2017a). 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編 https://www.mext.go.jp/content/20220614-mxt_kyoiku02-100002607_11.pdf

文部科学省. (2017b). 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編 https://www.mext.go.jp/content/20210531-mxt_kyoiku01-100002608_010.pdf

文部科学省. (2018). 高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編 英語編 https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf

Bandura, A. (1984). Recycling misconceptions of perceived self-efficacy. *Cognitive therapy and research* 8, 231-255. <https://doi.org/10.1007/BF01172995>

Baralt, M., Gurzynski-Weiss, L. & Kim, Y. (2016) Engagement with language: How examining learners' affective and social engagement explains successful learner-generated attention to form. In M. Sato and

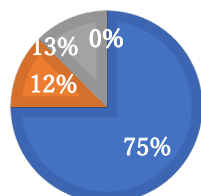
- S. Ballinger (Eds.), *Peer Interaction and Second Language Learning: Pedagogical Potential and Research Agenda* (pp. 209–240). John Benjamins.
<https://doi.org/10.1075/111t.45.09bar>
- Dörnyei, Z. & Murphey, T. (2003). Group dynamics in the language classroom. Cambridge University Press.
- Ellis, N. C. (2019). Essentials of a theory of language cognition. *The Modern Language Journal* 103 (S1), 39–60
<https://doi.org/10.1111/modl.12532>
- Fredericks, J. A. (2014). *Eight myths of student disengagement: Creating classrooms of deep learning*. (2nd ed.) Corwin Press.
- Fredricks, J. A., Blumenfeld, P.C. & Paris, A. H. (2004). School engagement: Potential of the concept, state of the evidence. *Review of Educational Research*, 74(1), 59–109. doi.org/10.3102/00346543074001059
- Helme, S., & Clarke, D. (2001). Identifying cognitive engagement in the mathematics classroom. *Mathematical Education Research Journal*, 13, 133–153.
<https://doi.org/10.1007/BF03217103>
- Mercer, S. (2019). Language learner engagement: Setting the scene. In X. Gao (Ed.), *Second Handbook of English Language Teaching* (pp.1–19). Springer.
https://doi.org/10.1007/978-3-030-02899-2_40
- Mercer, S., & Dörnyei, Z. (2020). Engaging language learners in contemporary classrooms. Cambridge University Press.
<https://doi.org/10.1017/9781009024563>
- Murphey, T. (1998). Motivating with near peer role models. In B. Visgatis (Ed.), *JALT 97 Conference Proceedings: Trends and Transitions*, 201–205
- Murphey, T., & Arao, H. (2001). Reported belief changes through near peer role modeling. *Tesl-Ej*, 5(3), 1–15.
- Philip, J. & Duchesne, S. (2016). Exploring engagement in tasks in the language classroom. *Annual Review of Applied Linguistics* 36, 50–72.
<https://doi.org/10.1017/s0267190515000094>
- Reschly, A. L. & Christenson, S.L. (2012). Jingle, jangle, and conceptual haziness: evolution and future directions of the engagement construct. In S. L. Christenson, Al. L. Reschly, & C. Wylie (Eds.), *Handbook of research on student engagement* (pp. 3–20). Springer. https://doi.org/10.1007/978-1-4614-2018-7_1
- Sang, Y., & Hiver, P. (2020). Engagement and companion constructs in language learning: Conceptualizing learners’ involvement in the L2 classroom. In P. Hiver, A. H. Al-Hoorie & S. Mercer. (Eds.), *Student engagement in the language classroom*, (pp. 17–37).
<https://doi.org/10.21832/9781788923613>
- Schunk, D. H., & Mullen, C. A. (2012). Self-efficacy as an engaged learner. In S. L. Christenson, A. L. Reschly & C. Wylie. (Eds.), *Handbook of research on student engagement* (pp. 219–235).
https://doi.org/10.1007/978-1-4614-2018-7_10
- Sinatra, G.M., Heddy, B.C. & Lombardi, D. (2015). The challenges of defining and measuring student engagement in science. *Educational Psychology* 50, 1–13.
<https://doi.org/10.1080/00461520.2014.1002924>
- Svalberg, A. (2009). Engagement with language: Interrogating a construct. *Language Awareness*, 18(3–4), 242–258.
<https://doi.org/10.1080/09658410903197264>
- Wang, I. K. H., & Mercer, S. (2020). Conceptualizing willingness to engage in L2 learning beyond the classroom. In P. Hiver, A. H. Al-Hoorie & S. Mercer. (Eds.), *Student engagement in the language classroom* (pp. 260–279). Multilingual Matters.
<https://doi.org/10.21832/9781788923613>

付録 1 プロジェクト後 生徒アンケート （無記名・五肢択一箇所の抜粋）

1. あてはまる 2. ややあてはまる 3. あまりあてはまらない 4. あてはまらない 5. わからない

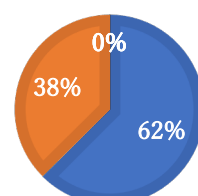
質問 1：この活動は自分の学力・知識に合っていた

■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5



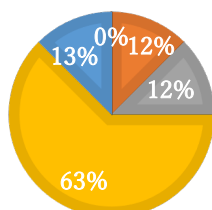
質問 2：この活動でのトピックは自分の興味に沿っていた

■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5



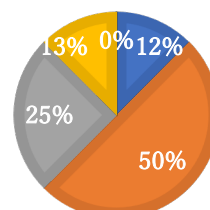
質問 3：この活動では退屈に感じるものがあつた

■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5



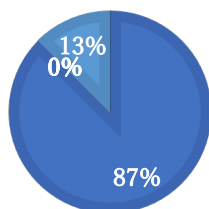
質問 4：この活動では想定外なことや戸惑うことがあつた

■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5



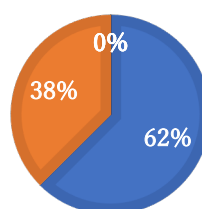
質問 5：この活動での経験は自分にとって有益だと思う

■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5



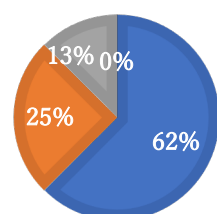
質問 6：この活動では比較・問題解決など深く思考する場面があつた

■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5



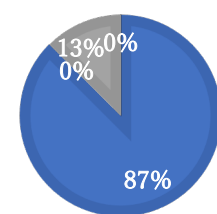
質問 7：この活動ではクラスメート
と学び合う機会があった

■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5



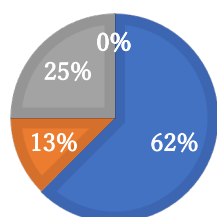
質問 8：この活動では相手国の学生
と学び合う機会があった

■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5



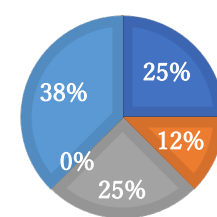
質問 9：この活動では自分で積極的
にチャレンジした場面があった

■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5



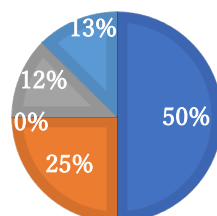
質問 10：この活動で「努力すれば
できるようになる」と感じた

■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5



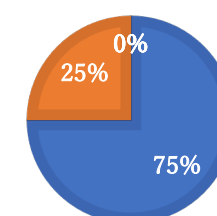
質問 11：この活動中、自分の目標達
成度について振り返りをした

■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5



質問 12：この活動での教師の介
入・助言は有効だった

■ 1 ■ 2 ■ 3 ■ 4 ■ 5



大学生のファシリテーション能力とグローバルリーダーの育成 —JEARN Youth Project での国際協働学習におけるファシリテーションを通して—

青山学院大学 岡田麻唯

本研究は、iEARN に属する小学生～高校生を対象に、国際協働学習を促進するファシリテーターを担う大学生のファシリテーション能力とグローバルリーダー育成について、検討するものである。大学生ファシリテーターは、実践経験を通して、企画力・ICT スキル・言語コミュニケーション能力を高めていた。また、異なる国の子どもたちへのファシリテーション経験が、異文化理解を深め、グローバルリーダーの育成へと繋がっていた。

ファシリテーター グローバルリーダー 国際協働学習 ユースプロジェクト

1. はじめに

グローバル化が進む社会においては、日本においても、価値観や文化背景の異なる多様な人たちと共に生活し、共に働くことが、日常的になっている。奈良岡（2020）は、多様性への対応として、ファシリテーションが必要な場面が増えてくると述べ、社会人になる前の大学生に、ファシリテーション教育が必要となることを主張している。

ファシリテーション研究では、さまざまな分野で議論がなされてきたが、社会学からみたファシリテーションについて、奥本・前田他（2021）は、関連する先行研究をまとめ、ファシリテーションが参加者間で、時間や空間を共有し、他者と協働することを前提とし、社会的合理性を求めるプロセスに役割を見出せるとした。予測がつかない問題を公正に判断しなければならない場面では、個々の体験を多面的に理解しながら、その背景や意味を明らかにし、整理する役割が必要で（奥本・前田他,2021）、それを担うのがファシリテーターである。

しかし、ファシリテーターの育成が必要とされながらも、この領域でのファシリテーション研究はまだ浅く、研究の余地がある。本研究では、前述した社会学でのファシリテーションの考え方を元に、その能力について調査を行う。

本研究の調査先である A 大学の学生が所属する iEARN では、小学生・中学生・高校生の国際協働学習を推進するために、大学生がファシリテーターを行う機会を得られる。グローバルな環境において、時には、子どもたちの見本となって導いたり、子どもたちの主体性をサポートしたりする役割である。大学生のうちに、国内外の子どもたちと関わり、ファシリテーターとなる機会は、大変貴重であり、社会人になった際には、その実践経験が生かせるであろう。

さらに、iEARN でファシリテーターとして活躍するには、グローバルな場面でのリーダーシ

ップスキルも必要になると考えられる。ファシリテーターになることが同時に、グローバルリーダーになることと位置づけると、実践を通して学びを深められることで、世界で活躍するグローバルリーダーの育成にも繋がる。自ら考え、行動し、複雑な環境下にも柔軟に対応できる人材は不可欠であり、世界規模で、文化間の違いや普遍性を理解し、人々の力を引き出せるリーダーシップ（平井・鈴木,2016）を発揮できるグローバルリーダーが求められている。このことを踏まえると、大学生のうちに実践を積んでおくことが望まれ、ファシリテーターの役割が、参加者の主体性の促進や能動的な学習を促す（樋口・日下・勝又,2019）ものだと考えると、前述した求められるグローバルリーダーとも一致する。

しかし、大学生のうちに、グローバルリーダーの実践経験を積むことは現実的に難しく、実践を元にした大学生のリーダーシップ研究も希少である。そのため、iEARN での大学生ファシリテーター経験の研究は意義がある。

本研究では、グローバルな環境下で、子どもたちのファシリテーターとなる大学生を対象に、ファシリテーション能力とグローバルリーダーの育成について、調査を行う。ここで得られた知見は、大学生におけるグローバルリーダーシップ育成の一助となりうると考える。

2. 先行研究

グローバルリーダーシップの研究については、これまで、ビジネスにおけるグローバルリーダーを対象にしたものが中心であった。海外を中心に 1990 年代頃から盛んになったが、その要因としてビジネスにおけるグローバル化に伴い、異文化に対応できるマネージャーの育成が必要になったことが挙げられる（永井・キャロライン・椿・木野,2016）。その傾向は、日本も例外ではなく、国内における研究も、ビジネス場面

におけるリーダーを対象に議論がなされてきた。例えば、世界で活躍してきた日本人グローバルリーダーを対象にインタビュー調査を行い、日本人の文化的特徴からリーダーシップを検討したもの（平井・鈴木, 2016）や社会人になってから国際業務に携わり、活躍している日本人を対象に、駐在経験の有無が、グローバル人材として活躍する要因として影響するのかに着目した研究（船越, 2019）などがある。

大学生を対象にした研究は、海外でのフィールドワークやインターンシップ経験が、グローバルリーダーシップのトレーニングとして価値あるものになるかを検討するもの（米谷, 2017）や授業のTAを担う学生が、ファシリテーター研修を受け、学生、教員、授業の参加学生が評価した結果から、ファシリテーター育成プログラムのスキル評価開発を検討したもの（武田, 2017）がある。これらの研究では、トレーニングやプログラムの評価の位置づけに着目したもので、学生のリーダーシップ能力については明らかにされていない。また、大学生が、グローバルリーダーとしての実践を通した研究は、筆者が知る限り、見当たらない。この点においては、研究が進む日本のビジネスにおけるグローバルリーダーシップ研究の中でも、実証研究の少なさが指摘されている（平井・鈴木, 2016）。さらには、大学生がグローバルリーダーとして、実際に経験できる機会が少ないことも、研究が進んでいない理由の一つであると考ええる。

永井・キャロライン・椿・木野（2016）は、これまでのグローバルリーダーシップ研究で得られた知見から、今後の課題として、グローバルリーダーシップ能力の育成には、初中等の学校教育から計画的に取り組むべきであると述べており、社会人になる前段階から、異文化に対する受容や課題解決能力、日々変わりゆく環境に対応する能力などの習得が求められている。また、米谷（2017）は、グローバルリーダーシップトレーニングについて、大学卒業後企業に入ってから身につけるものとは別に、学生が在学中に習得すべき能力や経験を、研究データに基づき明らかにするべきだと述べている。さらに、グローバルリーダーとして活躍するには、トレーニングで得た知識だけでは十分でなく、実践が必要であり、経験を通しての学習には、協調学習や共同学習が望ましい（米谷, 2017）とされている。

これからの社会において、グローバルな環境でリーダーシップを発揮できることが、重要な能力の一つであると考え、大学卒業までに効果的なトレーニングを行い、グローバルリーダーとしての実践経験を積むことは必須になるであろう。また、グローバルリーダーシップが、

異文化を理解しながら、異なる背景の人々の能力を引き出す（平井・鈴木, 2016）スキルであると踏まえると、本研究の調査先である iEARN の活動は、ファシリテーターの経験を通して、グローバルリーダーシップ能力を高め、グローバルリーダーとして活躍できる場であると考えられる。

そこで本研究は、大学生のファシリテーション能力とグローバルリーダーの育成について調査する。今後の大学生のファシリテーター育成に活かすためにも、本研究のデータの公開には意義があると考ええる。

3. 研究目的と分析方法

3-1 研究目的

国内外の小学生から高校生に対して、ファシリテーターを担う大学生が、どのようにファシリテーション能力とグローバルリーダーシップを学び、その能力を成長させていくのかを明らかにする。

研究設問は、以下の2つである。

- ①実践経験を通して、どのように、ファシリテーション能力を成長させるのか
- ②グローバルリーダーシップ能力の向上に必要な経験は何か

3-2 分析方法

1) アンケート調査

2021年に行われたZOOMでのワークショップ①（台湾の中学生と2回、インドの中高生と1回、エジプトの小中学生と2回）、2022年に行われたZOOMワークショップ②（台湾の中学生・エジプトの小中学生・パキスタンの高校生と合同で1回）にて、それぞれのワークショップ終了後、大学生ファシリテーターと参加国の先生に対して、アンケート調査を行った。アンケートはGoogle formにて作成し、回収した。

2) 参与観察

大学生ファシリテーターの企画運営ミーティングの様子、2021年のワークショップ①と2022年のワークショップ②での大学生ファシリテーターの様子を観察し、できるだけ研究者の主観を加えずに、分析した。

3-3 調査先と調査対象者

JEARNのYouth Projectに参加し、iEARNのプロジェクトにて、ファシリテーターを担ったA大学の大学生3名とワークショップに参加した海外の学校の先生4名である。

iEARNとは、International Education and Resource Networkの略で、1988年に設立された世界的な非営利組織である。世界140カ国以上、30,000を超える教育機関や組織と連携し、

オンラインネットワークを通じて、SDGs をテーマに、小学生～高校生の国際協働学習を促進している。JEARN は、その日本支部で、大学生がiEARNの子どもたちのファシリテーターとなる Youth Project を独自に展開している。

本研究の調査対象者である大学生ファシリテーター3名は、A 大学の課外活動の一つとしてiEARN の活動を行っている。大学生ファシリテーター3名の学年と活動歴、ワークショップ参加数については、図1を参照されたい。

調査対象者となった大学生は、iEARN の GOMI on EARTH プロジェクトに参加し、プラスチックごみ問題をテーマに、国際協働学習の機会を作る企画に取り組んでいる。企画から、参加校の募集、実施に至るまで、大学生ファシリテーターたちが主体となっていく。企画から準備、本番に至るまで、週1回2時間～3時間程度、ZOOMによる話し合いを重ねている。

2021年のワークショップ①は、台湾、インド、エジプトの学校に向けて、実施した。内容は、プラスチックごみ問題の現状を学び、ごみ削減のアイデアとして、新聞紙を使ったエコボックスを提案し、エコボックスの作り方を伝えた。2日間のワークショップを設定し、1日目はお互いの自己紹介とクイズで楽しみながら、ごみ問題について学びを深めた。2日目には、参加者に新聞紙を準備してもらい、ファシリテーターが折り方を説明しながら、参加者全員でエコボックス作りを行った。

2022年のワークショップ②では、参加国の子どもたちが一同に集まり、ごみ問題解決策のアイデアについて、プレゼンテーションを行う企画を立案した。当初は2日間のワークショップとして、1日目に自己紹介をしながらファシリテーターと交流を行い、2日目に各国合同で、プレゼンテーションを実施する予定であったが、参加国とのスケジュール調整の関係で、1日のみでの実施となった。参加国は、台湾・エジプト・パキスタンであった。台湾とエジプトは、2021年のワークショップ①に参加した学校と再び交流した。台湾は、先生のみが参加し、子どもたちのプレゼンテーションは、録画したものを流した。

		活動歴	ワークショップ参加数	交流したことがある国
A	大学3年生	2年	3回	台湾、エジプト、パキスタン
B	大学2年生	1年	4回	インド、エジプト、パキスタン
C	大学2年生	7ヶ月	1回	エジプト、パキスタン、台湾

図1：調査対象者3名の属性とワークショップ参加状況

4. 結果と分析

はじめに、2021年のワークショップ①終了後のアンケート調査と参与観察の結果について説明する。このワークショップには、学生Aと学

生Bがファシリテーターとして参加した。調査結果は以下の通りである。

4-1 学生Aの調査結果

調査時は大学3年生で、活動歴は、2年である。現在は、A大学のiEARN活動団体の代表を務めている。Aが活動を始めて10ヶ月の頃、台湾の学校とのワークショップを経験した。また、その1ヶ月後には、エジプトの学校とのワークショップに参加した。

<アンケート>

JEARNのユースファシリテーターの役割は何だと思うかの質問に対して、「そのワークショップの目的を生徒たちが達成できるようにサポートすること。」と回答した。

台湾とエジプトの学校との交流後、ユースファシリテーターとしての自己評価は、5段階中3と評価し、その理由は、「今までのワークショップでは、こちらからの一方的な発信が多かったのでファシリテーターとしてはもう少し生徒の主体性などを引き出せたり、そのサポートができればよいと思ったから。」であった。ファシリテーターは、情報提供をするだけでなく、子どもたちが主体的に行動できるような支援をする役割があると考えていたことがわかった。

ユースファシリテーターとしての課題や改善点は、「zoom上で上手く生徒たちとコミュニケーションを取っていくこと、どのような流れになっても臨機応変に対応できるようにすること。」と回答した。また、ユースファシリテーターに必要なこととして、「参加する生徒たちが何を求めているのか考え、さらにこちらが伝えたいことを分かりやすく伝えていくこと。」と答え、参加校の子どもたちのニーズを考えた上で、ワークショップの目的を決め、それを伝えていくことが大切だと考えていた。

海外校とのワークショップで学んだことは、「海外校それぞれで生徒たちの特色があることが分かった。それぞれの生徒によってこちらもどのように進めていけばよいのか、生徒たちは何を望んでいるのか考えるきっかけとなった。どの国の生徒も共通していたのは、日本に対して憧れがあったり、日本に興味を持ってくれていることだった。こんなにも海外の子供たちは日本に対して興味があるのかと驚いた。」と答えていた。

台湾とのワークショップの評価は、5段階中4と答え、その理由として、「台湾では1人1人と自己紹介をしっかりとすることができ次の日のワークショップ前にお互いを知り、緊張なども解けたかと思う。」であった。次に行ったエジプトとのワークショップでは、評価は3に下がっていた。理由は、「何人かの生徒はとても

積極的に多くの質問や話をしてくれたが全員と自己紹介をしたり交わる機会が少なくなってしまうため」と答えており、参加した子どもたち全員と、平等な関わりができることを望んでいた。

< 参与観察 >

活動を始めた頃は、話し合いにおいて、積極的に発言するタイプではなく、グループの先頭に立って仕切る先輩に従い、ついていくような存在であった。台湾とのワークショップでは、自己紹介の時間に、ユースファシリテーターと子どもたち数名がグループに割り振られ、少人数での交流を行った。A は、先輩と一緒に、一つのグループを担当し、控えめながらも楽しそうに交流している様子があった。インドでのワークショップでは、進めている先輩の仕切りを見ていることが多く、みんなの前で発言することはほとんどなかった。交流が3カ国目となったエジプトとのワークショップでも、見守ることが多かったが、ワークショップ終了後に行った大学生ファシリテーターのみの話し合いでは、課題に対する提案を、積極的に話している姿が印象的であった。

4-2 学生 B の調査結果

調査時は大学2年生で、活動歴は、約1年である。B は、大学1年生から活動を始め、活動歴4ヶ月の時に、初めてインドとエジプトとのワークショップそれぞれに参加した。

< アンケート >

JEARN のユースファシリテーターの役割は何かと思うかの質問に対して、「私たちが仲介として、さまざまな国や地域の人たちを結びつけること」と答えていた。

2カ国とのワークショップを経験した後のユースファシリテーターとしての自己評価は、5段階中2と評価し、その理由として、「まだまだ一対一の企画をこなすだけで精一杯で、他の国と国を繋ぐことができていないから。」と答えていた。ユースファシリテーターの役割が、国同士の子どもたちをつなげることにあると考えていることが伺える。

ユースファシリテーターとしての課題や改善点については、「できることは限られているかもしれないが、なるべく自分から行動し、もっと日本の人にも iEARN という組織を知ってもらうことができるようにする」と答えた。海外校との交流を経験したことで、日本国内のことにも関心を持ち、活動を広めたい思いがあった。

ユースファシリテーターに必要なこととして、「多くのコネクションを持つこと」と書いており、それは日本国内海外問わず、さまざまな人

とつながりを持つことで、ユースファシリテーターの役割である国同士の交流の実現ができると考えていた可能性がある。

海外校とのワークショップの経験を通して、学んだことには、以下のように答えていた。

「国ごとに特徴が様々あり、それによって、内容や時間配分などを変えなければいけないから、自己紹介 WS (ワークショップ) は大事だと思った。しかし、どの国であっても地球に住む人として環境について考えようとする意気込みは一緒だった。」

子供たちの様子が、国によって異なることに着目しながらも、環境については世界共通の問題であり、地球に住む一人として問題意識を持つべき部分に、国は関係ないと感じていた。

ワークショップの評価は、5段階評価で、インドとのワークショップは4、エジプトとのワークショップは5であった。その理由として、「回を重ねるごとにどんどん良いものになって行ったと思うし、特にエジプト WS (ワークショップ) では臨機応変な行動が上手く行った。」と回答し、経験を積むにつれて、満足度が高まっていた。

< 参与観察 >

B は、2021 年のワークショップの企画が進み、交流が始まっている途中の段階でメンバーとして入ってきた。そんな中、学生グループのミーティングでは、自分の意見を伝えたり、わからないことを質問したり、積極的に発言をしていた。インドのワークショップでは、先輩がメインで進行している様子を見守っていることが多かったが、次に行われたエジプトとのワークショップでは、先輩たちと共に、子どもたちの前で説明を行うなど、ワークショップを引っ張る存在であった。エジプトとの2回目のワークショップでは、参加したファシリテーターがこれまで進行を務めた先輩2名とBだけであった。しかし、エジプトの子どもたちの参加人数が多く、エコボックス作りでは、時間内に完成できない子どもたちが多数出たため、大学生たちに質問が集中した。その状況に対応すべく、急遽Bを含め、学生3名がそれぞれのグループに分かれて、子どもたちの対応にあたった。状況的に、一人で一つのグループを担当し、子どもたちにエコボックス作りを指導することになった。B は、すべての子どもたちが完成するまで、何度も折り方の説明を繰り返し、根気強く向き合っていた。

学生Aと学生Bは、このワークショップの経験から約10ヶ月後、台湾・エジプト・パキスタンの3カ国をつなげての合同ワークショップを

実施した。この10ヶ月の間には、学生グループにも変化があった。前回のワークショップが終了してからすぐに、学生グループは、次の企画を練りはじめ、目標は、複数の国と学校をつなげるワークショップを行うことであった。ワークショップの企画から参加者募集、当日の運営まで、学生グループ主体で行った。

しかし、この企画を進めている途中で、学生グループのメンバーの入れ替えがあった。前回のワークショップでは、AもBも、先に活動が始めていた先輩たちに引っ張られる形で参加していた。ワークショップの企画をする話しあいや当日の運営をメインで仕切っていた先輩たちが、4年生になり、定期的に関わることが難しくなったため、役割の引き継ぎが行われた。そして、学生Aが学生グループの代表となり、学生Bはそのサポート役をすることになった。これまでの企画と役割を引き継ぎ、実現に向けて進めることになった。また、学生Cが新しいメンバーとして、グループに加わった。

3カ国合同のワークショップは、学生A・B・Cの3名で実施するに至った。

2022年のワークショップ②終了後のアンケート結果は、以下に記述する。

4-3 学生Aの調査結果

<アンケート>

ユースファシリテーターの役割は、「子どもたちの交流やゴミ問題について考えるきっかけを与え、促すこと。」と答え、実際にユースファシリテーターをしての感想は、「事前に伝えていなかったことや、環境的な問題もあり顔出しで参加できる生徒がいなかったこと。顔出しができる前提でアイスブレイクを考えてしていました。様々な場合について考えることや事前に先生たちとコミュニケーションをとっておくことの大切さを学びました。」であった。

良いファシリテーターになるために大切なことは、「ワークショップ本番が円滑に進むように事前の準備や情報を伝達しておくこと、ワークショップ本番はどのような状況においても臨機応変に対応することが大切だと思います。そうすることでワークショップを子どもたちが楽しんで学ぶ場にできると思います。」と回答した。

ワークショップの体験で学んだことは、「複数の国の生徒が参加する際の事前のコミュニケーションの大切さ、臨機応変な対応を学びました。」と述べ、企画準備から本番終了までを通して直面した課題については、「コンテスト発表の前に説明をするワークショップを開くか、それぞれの国ごとに開くかという問題。事前の説明が少なかった結果本番では予測できなかった自体が起きたり、先生との認識の不一致など

がありました。」と述べた。

リーダーシップについて、必要だと思うことは、「周りの状況などを常に見ながら、目標を達成するためにみんなをまとめていくことが必要だと思います。ただ突き進むだけではなく、周りの意見をしっかり聞き状況に応じてみんなが進んでいくことが大切だと考えるからです。」であった。

グローバルリーダーシップに必要なことについては、「分かりやすい英語や時にはジェスチャーなどを用いながらコミュニケーションを図り、国や民族、宗教による違いも受け入れることです。グローバルとなるとよりコミュニケーションを取ることは難しくなり、お互いが違うことも受け入れながらリーダーシップを取ることが必要になってくると思います。」と回答した。

<参与観察>

Aが学生グループの代表になったのは、グループ内の学年が理由であったが、先輩から次の代表になってくれないかと話しがあった際、その場ですぐに、やってみると答えていた。それから、次のワークショップの企画を引き継ぎ、話しあいのセッティングや他メンバーへの連絡など、自ら行うようになった。学生グループの中では、AとBが唯一、海外とのワークショップを経験していたため、Bと協力しながら、話しあいを進めていた。本番のワークショップでは、進行の途中で、エジプトの参加者が時間の関係で、今すぐ発表したいと発表を始めてしまった場面があった。それでもAは驚いた様子を見せることもなく、笑顔で対応していた。子どもたちの発表後には、参加者へ向けて感想をチャットしてほしいと積極的に声かけをしていた。

4-4 学生Bの調査結果

<アンケート>

ユースファシリテーターの役割は、「大人より子どもたちの目線と同じになって問題解決を進めること。」と答え、ユースファシリテーターを担った感想は、「むこうがどのようなことをしてくるのか把握できていなかったため、こちらの対応ができなかった。」であった。

良いファシリテーターになるために大切なことは、「自分の気持ちを伝えようとする意志、また、プロジェクトの進行をするうえで適切な時間管理や対応能力」と答えた。

ワークショップで学んだことは、「事前の情報共有がプロジェクトを進めるうえでとても大切なこと」であった。企画準備から本番終了までに直面した課題については、「相手から連絡が来ないこと」であった。今回のワークショップを通して、自分自身への成長につながったと

思う部分は、「相手がいるプロジェクトの難しさを知った」ことと述べた。

リーダーシップについて必要なことは、「みんながある程度納得する進行をすること」で、グローバルリーダーシップで必要なことは、「いろんな考え方があっていうことを理解すること」と回答した。

<参与観察>

学生グループのミーティングでは、A からの投げかけに積極的に意見を出していた。ワークショップの企画を実行に移すため、スケジュール工程表も、B がみんなに聞きながら完成させていた。ワークショップに使用する資料も、役割分担してそれぞれが作成していたが、それを B がまとめていた。海外の子どもたちに向けたプレゼンテーションの見本動画を作った際も、率先して動画作成をしていた。全体で作業しなければならないようなことは、B が最終的に情報を整理し、まとめる役割を担うことが多かった。ワークショップでは、発表をすぐに始めたいというエジプトに対して、最初に自己紹介と交流ゲームを考えているためそれが終わってからでもいいかと確認したり、パキスタンの学校に対してカメラ ON は可能かどうか尋ねたり、冷静にこちらの希望を伝えていた。また、子どもたちがチャットに流してくれた言葉に対して、反応し、楽しい雰囲気が作れるよう盛り上げていた。

4-5 学生 C の調査結果

調査時は、大学 2 年生で活動歴は 7 ヶ月であった。学生 C が入った頃には、すでにワークショップ②の企画が始まっている段階であったため、途中から話しあいに加わり、準備を行った。学生 C にとって、初めての海外校とのワークショップ体験であった。

<アンケート>

ユースファシリテーターの役割は、「大人ではなく学生という立場であるからこそ参加者との距離も近く活発に議論でき、参加者同士の交流も促進できるという点で、それを継続していくこと。」と答えた。実際にやってみての感想は、「海外の生徒、先生たちと意思疎通をとること、またオンライン環境など現地の状況を踏まえた計画を立てることに苦戦しました。」であった。

良いファシリテーターになるために大切なことは、「今回のプログラムのように生徒同士の交流も重要であると思うので、生徒が一方的な享受とならぬよう議論を支えていくこと。」と回答した。

ワークショップを経験して学んだことは、「企画から運営まで自分達の手で行う計画性を

養うことができたと思います。」とし、企画準備から本番終了までで直面した課題については、「国際的に時差や休業期間の差がありワークショップの予定を立てることに難儀したように思います。」と述べた。

リーダーシップに必要なと思うことは、「事業に携わっている人の信頼関係を築く必要があるので、彼らに対して一方的な指示をするだけでなく、自らそれに関わったり助言できること、またその人たちとのコミュニケーションを図ること。」であった。

グローバルリーダーシップに必要なことは、「国際的な関係となるので、現地の人や地域の環境や文化を熟知しておくことが最も重要である気がします。」と答えた。

<参与観察>

学生グループのミーティングでは、記録を担っていた。ワークショップを体験したことがないためになかなか想像がつかないようであったが、意見を求められた際には発言をする様子があった。ワークショップでは、冒頭でのアイスブレイキングを担当し、ゲームやクイズの進行を仕切って行った。ジェスチャーを使ったゲームでは、パキスタンの参加者全員がカメラ OFF の参加のため、反応が見られず、緊張感のある雰囲気が続いたが、C は想定外のできごとに戸惑う様子を見せずに、最後までゲームをやり遂げた。また、子どもたちの発表のタイムキーパーをした際には、時間をオーバーしている発表をどこまで見届けるか、終わらせてもらうかなど、判断に迫られる場面が多かった。他の大学生ファシリテーターに状況を伝え、相談しながら、柔軟に対応にあたっていた。

4-6 参加国の先生の調査結果

ワークショップを行った交流国の先生のアンケート結果は以下の通りである。各回 2 名の先生から回答を得た。

<2021 年のワークショップ①アンケート>

改善点について以下の回答を得た。

“Maybe slow the process of making a newspaper box a little bit. Sometimes it is not easy to see clearly through the webcam. If you explain with PPT first and then demonstrate how to make it, maybe it is clearer.” (教師 A)

“Considering the workshop time, the content is enough.” (教師 B)

<2022 年のワークショップ②アンケート>

大学生ファシリテーターの評価について、教師 C は、5 段階中 5 と評価し、その理由は、

“They have prepared everything in a proper

way.”であった。

教師 D は、4 と評価し、

“The youth facilitators collaborated and tried their best to make the contest go smoothly.” と回答した。

大学生ファシリテーターが、子どもたちの協働学習をサポートすることについては、

“Yes, very well.” (教師 C)

“This time only I join the Zoom meeting. My students didn't join together, but I found that the youth facilitator encouraged and supported the students in the online meeting.” (教師 D)

であった。

ワークショップの評価について、教師 C は、5 段階中 5 の評価をし、以下のコメントがあった。

“It was very meaningful and engaging.”

教師 D は、5 段階中 4 の評価で、理由は以下の通りであった。

“The topic is one of the most important global issues that we should learn and do something together. The contest provides a proper opportunity for teachers and students to learn from each other, especially across the world.”

ワークショップが、生徒たちにとって良いものであったかについて、教師 A 教師 B どちらも Yes と回答し、その理由はそれぞれ以下の通りであった。

“My students really enjoyed and learned something good.” (教師 C)

“To do the presentation, students need to do some research and analysis. That can help students learn about the issues more deeply.” (教師 D)

改善点については、

“arrange some more activity.” (教師 C)

“Thanks for your passion and efforts. Though the youth facilitators seem a little shy, that is just like a new teacher having the first class. I believe they will learn from the experience and be more confident in the future.” (教師 B)

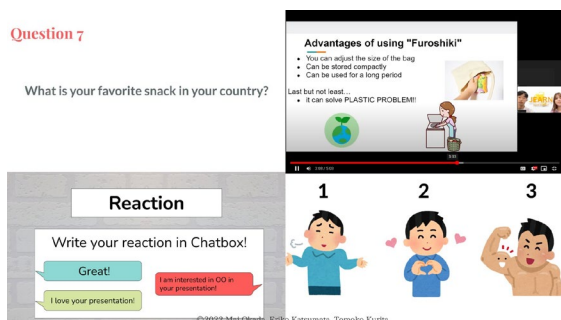


図 1 資料を使ったワークショップの様子

5. 結論

5-1 実践経験を通して、どのように、ファシリテーション能力を成長させるのか

大学生ファシリテーターたちは、実践経験を通して、企画力・ICT スキル・言語コミュニケーション力を高めながら、ファシリテーション能力を伸ばしていることがわかった。これら 3 つの能力が高まった背景には、子どもたちの主体性を促進したいという思いがあったことが伺えた。

初めてのワークショップで、台湾・インド・エジプトの学校それぞれと交流を行ったときには、大学生ファシリテーターが発信側となり、子どもたちは受信側であった。その時のことについて、学生 A は、一方的な発信にならないよう、子どもたちの主体性を引き出せるようにサポートしたいと述べ、学生 B は、ファシリテーターとしての評価について、国と国同士をつなげられていない点を指摘していた。

また、学生 A は、台湾とのワークショップで、子どもたち全員に自己紹介をしてもらう機会があったことを評価しており、インドとのワークショップでは、特定の子どもたちのみしか発言できる機会を準備できなかったことを反省点としてあげていた。このことから、A が参加している子どもたち全員が、自ら発言できる機会を持つことを望んでいたことがわかった。台湾の学校は、参加人数が 15 名程度で、少人数のグループに分かれて大学生ファシリテーターの進行のもと、自己紹介をする機会が持てた。一人一人に丁寧に時間をかけて向き合い、交流できたことも、ファシリテーターとしての満足度を高めたと考えられる。

主役はあくまでも、子どもたちであり、子どもたち全員が発言できること、自ら発信できる場を提供することがファシリテーターに相応しいと思っていることがわかった。ワークショップの経験を重ねるごとに、どのようにしたら、子どもたちの主体的な関わりをサポートできるのかを意識するようになっていた。

このワークショップ後に行ったアンケートでは、ファシリテーターの役割について、学生 A は、「そのワークショップの目的を生徒たちが達成できるようにサポートすること」、学生 B は、「私たちを仲介として、さまざまな国や地域の人たちを結びつけること」と回答していた。

その後、新たなワークショップを企画する話し合いでは、自分たちが何を発信したいかといった視点から変化し、他国間での子どもたち同士の協働学習を実現するためには、どのような内容にすべきかといった視点で企画がたてられるようになった。その結果、3 カ国同時開催のワークショップを企画し、実施するに至った。

ICT スキルに関しては、大学生ファシリテーターにとって、オンラインをうまく利用しての協働学習が課題となっていた。2021 年のワーク

ショップ①終了後のアンケートでは、課題や改善点として、学生 A は、ZOOM 上でうまくコミュニケーションを取ることと述べており、2022 年のワークショップ②のアンケートでは、学生 C が相手校のオンライン環境を踏まえた計画を立てることに苦戦したと述べていた。2021 年の初めてのワークショップでは、ZOOM でも交流を深められるための案を考え、Kahoot! の導入やスライドを使ったクイズで、子どもたちが楽しく参加できるよう工夫していた。しかし、Kahoot! は、携帯を持っていなかったり、Wi-Fi 環境が悪かったりする場合には、使用が難しいことを学び、代替案としてチャットを使ったコミュニケーションに変更したこともあった。

新聞紙エコボックスの作り方を伝える方法では、初めは、web カメラを設置し、ライブで折り方を見せながら行ったが、さらにわかりやすくするために、作っている様子の動画を見てもらったり、スライドで写真を見せたり、新聞紙の代わりに見やすい色紙を使ったりと、毎回試行錯誤しながら、折り方の見せ方を変えていった。

先生からのアンケートで、進みが早くて難しい部分があったため、資料でも説明してもらえるといいと意見をもらった際には、すぐに対応を行った。後からでも自分で見直してできるように、折り方の手順と説明文を書いた資料を作り、配布した。その際には、なるべく短文でわかりやすい単語を使って説明することを意識していた。

2022 年のワークショップ②では、言語コミュニケーションの部分で、各国の子どもたち同士の交流を考えた時に、英語レベルが異なる可能性を懸念した。ワークショップで見せるスライドは、なるべく簡単な単語で書き、補足の絵を入れて英語がわからない子どもたちでも理解してもらえるよう意識していた。発表後にコメントをチャットしてもらいたいと考えた際には、例文を提示することで、子どもたちがすぐにコメントできるよう対策を考えていた。

5.2 グローバルリーダーシップ能力の向上に必要な経験は何か

アンケート調査と参与観察より、①世界共通の話題で協働学習を行う経験、②様々な国の子どもたちへのファシリテーター体験、③想定外の状況への対応、これら 3 点の経験が、グローバルリーダーシップ能力の向上に影響していたと考えられる。

プラスチックごみ問題は、世界的な課題であり、ファシリテーターとして子どもたちに考えてもらうために、まず自分たちが知識を深めなければならず、自国の現状と世界的な状況と、ローカルとグローバル両方の視点で、調べ考え

るようになっていた。台湾・エジプト・パキスタンとの合同ワークショップ終了後の先生のアンケートからも、ワークショップが、子どもたちだけでなく、そこに関わるファシリテーター、先生、すべての人にとって学びを深められる場であったことがわかった。

また、学生 B はアンケートで、国ごとに特徴があったが、どの国にも共通していたことは、環境について考える意気込みが同じであったことと感じていた。国によって異なる部分を感じながらも、テーマであるごみ問題に関しては、地球規模で取り組んでいるという意識につながっていた。

2021 年のワークショップ①では、台湾・インド・エジプトに向けて、同じ内容で実施したが、子どもたちの様子や反応は、大きく異なるものであった。台湾の子どもたちは、ファシリテーターの進行に忠実に従い、先生の誘導もありながら、参加しており、予定通りの計画でスムーズに進められた。インドの子どもたちは、チャットを使って積極的にコメントを残してくれたり、日本についてのクイズにも興味を持って反応してくれたり、ファシリテーターの盛り上げを、後押ししてくれていた。ファシリテーターの説明でわからない部分は、積極的に質問をしたり、意思表示をしたりしており、ファシリテーターはそれに合わせて、進行を中断し、予定の時間を延長して、対応を行った。エジプトの子どもたちは、1 回目のワークショップからとても積極的で、複数の子どもたちが自由に発言をしていた。これまで行ったワークショップでの子どもたちの様子とは異なり、大学生ファシリテーターが子どもたちの勢いに圧倒されてしまう場面もあり、スムーズな進行を行うための対策を考えるきっかけとなった。

1 カ国目、2 カ国目、3 カ国目と、異なる国の子どもたちへのファシリテーションを経験するほど、その違いに着目し、異文化への理解を深めていた。学生 A は、各国の生徒たちが異なることがわかったことで、どのように進めるべきか、何を望んでいるのか考えるきっかけになったと述べ、学生 B も、国ごとに特徴があったため、それを理解するために自己紹介で交流をする時間が大切だと思ったと述べた。

どのワークショップにおいても、大学生ファシリテーターは、自分たちが計画した予定を、一方的に進めるのではなく、子どもたちの反応を見ながら進める必要に迫られることがあった。2021 年のワークショップ①では、進行途中にくる子どもたちからの質問やコメントも、見過ごすことなく反応し、それぞれの判断で、臨機応変に対応していた。特に、エジプトとの 1 回目のワークショップでは、子どもたちの自己主張

が強く、大学生ファシリテーターたちは、自分たちのファシリテーションがうまく機能しなかったと感じていた。そのため、翌日に予定していた 2 回目のワークショップに向けて、急遽、子どもたちへの案内の仕方や質問の受付、発言したい場合のルールなど、進行のやり方について改善策を話し合い、柔軟に内容を変更した。学生 B は、その時のことについて、回を重ねるごとにどんどん良いものになり、臨機応変な行動がうまくいったと満足度を高めていた。

また、各国 Wi-Fi の環境によって、うまく意思疎通が図れないときがあった。2022 年のワークショップ②では、パキスタンからの参加者が終始カメラを OFF のまま参加していたり、エジプトが、ファシリテーターの進行を遮り、突然プレゼンテーションを始めたりと、それぞれのような状況で参加しているのかの想像を超え、事前に考えることができなかった出来事も多くあった。学生 B は、相手の状況を把握しきれず、対応ができなかったと述べ、事前の情報共有の重要性を感じていた。学生 C は、グローバルリーダーシップには、相手国の環境や文化を熟知しておくことが重要と述べていた。

2021 年のワークショップ①の経験から、常に臨機応変な対応が求められることを学んだため、2022 年のワークショップ②では、ワークショップ中でもファシリテーター全員が連絡を取り合うことができるよう、グループ LINE を使った。判断に困ることや予定を変更しなければならない時には、この LINE で相談しあいながら、突然に起きた出来事に対しても、冷静に対応にあたっていた。

ワークショップを経験する度に、さまざまな課題に直面することとなったが、実践経験があって初めて、知ることができた学びであり、アンケートからも、学び多い異文化体験となったことが伺えた。学びのあるワークショップになったのは、参加国側も同様だったことが、先生からの評価で示され、子どもたちの学びを促す役割をファシリテーターが担っていることがわかった。

国際協働学習を推進するファシリテーターとなることで、グローバルな視点でごみ問題の知識を深めたこと、また、異なる国の子どもたちとの交流で、異文化理解力や臨機応変な対応力を高めていたことが示唆された。これらの経験は、世界規模で、文化間の差異性と普遍性を理解しながら、異なる背景の人々の力を引き出す（平井・鈴木,2016）グローバルリーダーシップ能力の強化へとつながっていると考えられる。

6. 課題

本研究では、国内外の学校の子どもたちに対して、ファシリテーターを行う大学生が、どの

ようにファシリテーション能力とグローバルリーダーシップを学び、その能力を成長させていくのかを目的としたものである。

しかし、事後アンケートの結果だけではすべてを明らかにすることはできず、また、調査対象者も少ないため、一般化することはできない。今後も、引き続き調査を重ねていく必要がある。

また、ファシリテーターとしての実践経験数での比較やファシリテータートレーニング受講の有無などによって、どのように能力が高まっていくのかを見ていく必要もあるだろう。今後も、長期的な視点で調査を続けていくことが望まれる。

引用文献

- 奥本京子・前田美子・中西美和・船越多枝・関根聡・上野育子(2021).ファシリテーション研究とは何か：6 つの学問領域における先行文献レビューを比較して 大阪女学院大学紀要第 18 号 21-35.
- 武田政則(2017). 学生ファシリテーター育成のための研修システム開発とスキル評価に関する実践研究～階層分析法（AHP）からのアプローチ～教育情報研究, 33, (2), 3-16.
- 奈良岡英樹(2020).日本におけるファシリテーションの位置づけと大学教育への試み 筑波学院大学紀要第 15 集 79-88.
- 永井裕久・キャロライン F.ベントン・椿広計・木野泰伸(2016).グローバル・リーダーに求められる行動特性・育成方法・効果測定-海外文献研究から読み取る研究課題の推移と展望- 組織科学,50,(1),25-35.
- 平井達也・鈴木勘一郎(2016).日本人のグローバルリーダーシップの特徴に関する質的研究-中核コンピテンス、発達促進要因ならびに日本人らしさの活用- 多文化関係学 13: 33-46.
- 米谷淳(2017).グローバルリーダーシップトレーニングの研究-理論的基盤構築に向けて- 神戸大学 大学教育推進機構『大学教育研究』 25: 13-22.
- 八代京子（編）樋口容視子・日下啓・勝又恵理子(2019).アクティブラーニングで学ぶコミュニケーション 研究社

プロジェクト実践編

Machinto - Hiroshima/Nagasaki for Peace

～今、この時代に広島・長崎を語り、核兵器の恐怖を周知する～

Project Facilitator 高木洋子

新聞で核関連実験ニュースが流れ、現実にはウクライナ・ロシアなど戦争がこの私たちの地球上で繰り返されている現状にあって、地球の破滅へ導く核兵器の脅威を伝えられるのは広島・長崎である。

核兵器 ウクライナ 戦争と平和 オンライン会議

1. はじめに

2006年iEARNプロジェクトとして誕生した本プロジェクトは、16年目を迎えました。1945年終戦の夏、8月6日広島、8月9日長崎での原子爆弾投下は、その地に生まれ生活をしてきた30万という子供・市民に、史上初めての原子による残忍な死をもたらしました。その犠牲者の恐怖・苦痛・死を贖うために、2度とこの過ちを繰り返さないために、世界の生徒たちに広島・長崎をしかと伝える使命があり、また学んだ生徒たちが、更に他国の生徒たちへ伝えることが今、求められています。

2. 目的と方法

2-1 目的

どの国のどの学校で広島・長崎が取りあげられ、生徒たちが事実を学び、どう考えるか、その平和実現への歩みを作品やオンライン会議で共有する。教師によるオンライン上のColloaboration Center投稿の指導の下、本プロジェクトを通して生徒同士が学び合い、地球市民としてコミュニケーションを深め、互いに平和への道を歩むことを目的とする。

2-2 方法

- 1) 当プロジェクトに参加登録をし、次のサイトへ入る：<https://iearn.schoolology.com/course/6027828168/materials>
- 2) Teacher's Guideを読み、"Machinto books for your class"で「まちゃんと」と「My Hiroshima」の2冊の絵本を申し込む。
- 3) 日本語・英語・またはスペイン語で読み、感想をForumへ投稿する。
- 4) Teacher's GuideにあるTeaching resourcesで広島・長崎について、より理解を深める。
- 5) 個人・グループで平和の願い・活動をビデオ・本・ポスターなど形にしてForumへ投稿する。

6) ZOOM会議で時差を調整しMachinto会議を行う。

3. 活動内容

3-1 Machinto 2022年度 参加国紹介

USA、プエルトリコ、パラグアイ、アルゼンチン、コロンビア、日本

3-2 Student work II

坂本ひとみ先生指導による東洋学園大学生が、福島の小6年生と"Children's Comments for Machinto"を企画。日本語・英語で載せられた24編の小学生のコメントは戦争と平和を見つめて鋭い。

3-3 Machinto Student work III

仙台上杉山中学校の生徒たちによるNo.1～No.5のPDF、136枚のslideが投稿された。若生みゆき先生は" hopes for peace by rhyming Japanese haiku and English poetry"と解説された。生徒たちの平和への呼びかけ136編を観ていただきたい。

3-4 Machinto Latina

スペイン語によるMachinto参加である。プエルトリコ、パラグアイ、アルゼンチン、USの参加があり多くの生徒紹介ビデオがある。



写真1 パラグアイ実践報告/ Machinto Latina (活動3-4)

3-5 Vioce for Peace

- 1) Songs to cheer us up

高森高校（岩国）赤松先生のクラスでの企画。「気持ちの明るくなる歌」44編が選ばれ、各生徒が選んだ理由を述べている。

2) Peace Talk

仙台上杉山中学校生が5Parts、54枚のslideを投稿。多くの写真やイラストの上に、生徒たちのメッセージが響く。

3) Machinto Talk with Colombia students
Colombia, Colegio Los Caobos校の3名の教師の依頼により、高木が20名の生徒たちと英語で語る。Machintoの本をページ毎に英語で読み聞かせ、説明をし、彼らの質問に答え、こちらからも質問を投げかける。記憶に深く刻まれる交流であった。

4) What is Peace for you

東洋学園大学生によるビデオ作品。各シーンに、印象深い学生たちの肉声メッセージが被さる。

3-6 Faith Hope Love

聖ステパノ学園小学校松村はるか先生の企画で、5年生の皆さんが個々に描いたMachinto絵を示しながら、高木とのZOOM交流へ。最後は歌の演奏でした。また後日、皆さんからのカードも届き感激でした。

3-7 NPOs for Peace

高森高等学校赤松先生から、生徒たちが調査した平和に関する10件のNPOが投稿された。個々のNPO活動がスライドで紹介され、その生徒の感想やコメントで締めくくられている。

4. 成果と課題

○成果

日本の生徒たちの実に多くの平和を望むメッセージが投稿されました。iEARN-Latinaのスペイン語によるMachinto活動も継続されています。またファシリテーターとしての大学生の参加によって、新しいMachinto展開が期待されます。

○課題

海外参加校が少なく、従って生徒たちの投稿に対してCollaboration Center内での生徒同士のコミュニケーションが期待できず、今後の課題となっています。



写真2 福島小学6年生・東洋学園大学によるMachinto Work II（活動3-2）

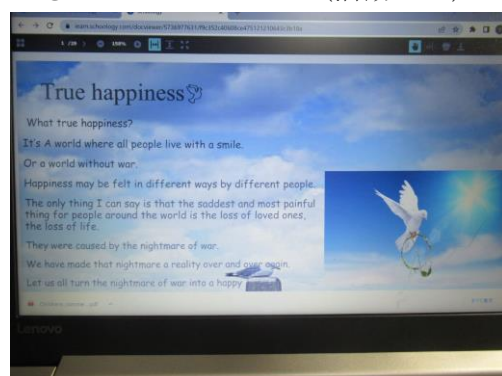


写真3 仙台上杉山中学校 Machinto Work III（活動3-3）

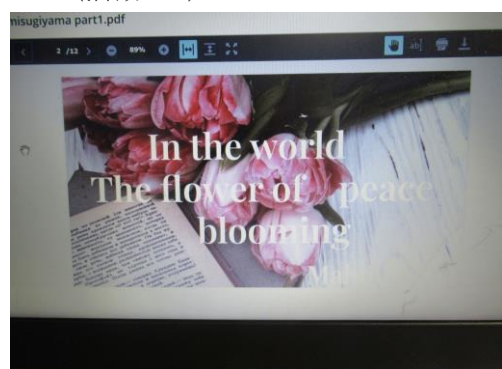


写真4 仙台上杉山中学校 Peace Talk（活動3-5）

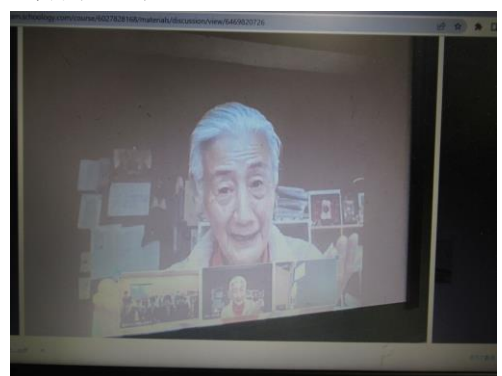


写真5 St.Stephen's ZOOM with YOKO（活動3-6）

Machinto プロジェクト デジタル・コミュニティにおける平和の学び

～Pray for Peace Together with Ukrainian Refugees の取り組み～

青山学院大学 栗田 智子

2022年2月、ロシアのウクライナ侵攻が始まり、大量のウクライナ難民が隣国や世界に溢れた。それを機に、平和を願うジェイアーン会員が集まり、これまでの平和教育の実践、Machinto-Hiroshima/Nagasaki for Peaceプロジェクトの中に、“Pray for Peace Together with Ukrainian Refugees”を立ち上げた。専用フォルダの中に、アイアーンに参加する世界中の生徒たちが投稿できる5つの交流フォーラムを作り、非同期型の国際協働学習に取り組んだ。ファシリテータの視点で、デジタル・コミュニティにおける平和の学びについて報告する。

国際協働学習 平和教育 ウクライナ難民支援 デジタル市民

1. はじめに

2022年2月、ロシアのウクライナ侵攻が始まり大量のウクライナ難民が隣国や世界に溢れた。「ジェイアーンで何か平和のためのプロジェクトができないか」という会員の声かけにより、既存の平和教育プロジェクトである Machinto-Hiroshima/Nagasaki for Peace の中に、専用フォルダを作り、ウクライナ難民と共に平和を祈り、世界中の生徒たちが投稿し、非同期で交流できる5つのフォーラムを作った。

2. 目的と方法

2-1 目的

アイアーンに参加する世界中の教員と生徒が、地球市民（デジタル市民を含む）の一人として、ウクライナ難民と共に平和を祈り、ウクライナ難民の状況を知り、ローカルとグローバルの両面から課題を解決する方法を考え、行動することを目的とする。

2-2 方法

1) 実施計画案

“Pray for Peace Together with Ukrainian Refugees”というタイトルの専用フォルダの中に、以下の5つのディスカッションフォーラムを作成し、生徒は該当するスレッド（1～5）に英語で投稿し、世界のアイアーンメンバーとフォーラム上でコミュニケーションをとることができ、グローバルとローカルの両面で課題に取り組むことができるようにした。

- 1, Your message and prayer for peace as a Global Citizen
(自己紹介と平和へのメッセージ)
- 2, Local report (refugees centers, support

activities in your local community)

(自分たちの地域で起こっていることの報告)

3. What we can do for Ukrainian refugees

(自分たちでできることは何かというディスカッション)

4. Take an action and share the outcome

(自分たちがとった行動とその成果の報告)

5. Share your media creation

(ポスターや写真、ビデオなどの投稿)

2) ガイダンスの作成

アイアーンは、当事国を含むグローバルなデジタル・コミュニティであり、文化背景は様々である。このプロジェクト参加者は、責任ある地球市民（デジタル市民を含む）として建設的で平和的な意見交換を行うことが重要であると考え、教員向けガイダンスを作成し、このプロジェクトが、世界平和とウクライナ難民支援をテーマとするものであり、生徒は、異なる背景や視点を持つ仲間とオンラインでコミュニケーションをとる方法を学ぶ必要があること、そして、オンライン交流フォーラムでは、適切な言語や情報を使用することを明示した。

3. 活動内容

3-1 Kick-off ミーティングの開催

4月17日（日）19:00～20:00（オンライン開催）

参加者：ジェイアーン会員 19名

3-2 交流フォーラムでの活動

参加校（順不同）：大田区立馬込小学校、聖ステパノ学園小学校、JOY CLASS、仙台市立上杉山中学校、啓明学園中学高等学校、栃木県立真岡北陵高校、山口県立高森高校、東洋学園大学、青山学院大学（日本）、Alexandru Papiu

Ilarian High School Dej (ルーマニア)、St. Mark' s Sr. Sec. Public School (インド)、Minster High School (アメリカ)、Sachkhere public school (ジョージア) St. Paul School (台湾)

1. Your message and prayer for peace as a Global Citizen (自己紹介と平和へのメッセージ)

2022年4月、日本のジェイアーン会員とその生徒たちから平和へのメッセージが数多く投稿された。インドからSt. Mark' s Sr. Sec. Public School の生徒たち、ルーマニアからAlexandru Papiu Ilarian High School Dej の生徒たちの平和へのメッセージも相次ぎ投稿された。

8月、ロシアの先生から「このプロジェクトで、世界の平和はグローバルな友情、理解、お互いを受け入れることだと理解させることができる」という深いメッセージが投稿された。

2023年1月には、高森高校の生徒による40通の平和のメッセージ、詩、ショートストーリーが投稿された。それに対し、アメリカのMinster High Schoolの生徒がコメントを入れ、平和に対する思いを共有し2校間で交流が行われた。

2. Local report (refugees centers, support activities in your local community) (自分達の地域で起こっていることの報告)

4月、ジョージアのSachkhere public school N2 の生徒達から、ウクライナ難民の実情と彼らが行なっている難民援助についての報告が、交流中の上杉山中学校を通じてフォーラムに共有された。ジョージアの人々が、ウクライナ難民のために、家のドアを開け、宿泊場所を提供していること、学校で寄付やオークションによってお金を集め、薬、救急医療の物資を難民に送っていることが書かれていた。

同4月、ルーマニアから、戦争が始まって以来、何十万人ものウクライナ難民がルーマニアに入国し、何百人ものルーマニア人が難民を温かく迎え入れた様子が伝えられた。

6月、スカウトとして活動するルーマニアの男子学生のレポートが投稿された。「私は学校もあるので、週末に国境に行くことが多いのですが、その日は、希望が失われた状態で、戦争が終わるまでの間、ただ荷物を置きたい、泊まる場所を探したいという人たちがたくさん来ているのを目にしました。私は、その人たちの通訳をしたり、動物の世話をしたり、食べ物や水をあげたり、道徳的な面でも手助けをしたりと、できる限りのことをしました。」

同6月、東洋学園大学の学生が、ウクライナ難民のためにファンドレイジングを行い国際NGOに寄付した様子が報告された。



写真1 支援活動をするルーマニアの生徒（左）と日本の大学生（右）

3. What we can do for Ukrainian refugees

(自分達でできることは何かというディスカッション)

4月から5月にかけて、啓明学園の高校生達が様々な視点で、自分たちができることについて意見を投稿した。情報を様々な視点で入手すべきであること、ウクライナ難民のために寄付をすること、何がウクライナで起こっていて、それが世界にどのような影響を与えるのかを人々に正しく伝えること、そして、伝えることで、さらにウクライナの人々への支援につながるという意見が投稿された。さらに、SNSの有効活用や、ウクライナだけでなく他国も含め広く難民について考えることの大切さも指摘された。ロシアの先生からも、難民はウクライナ難民だけではなく、ロシアで様々な難民の支援をおこなってきたことが投稿された。

4. Take an action and share the outcome (自分達が取った行動とその成果の報告)

9月、兵庫県の英語スクールの先生から、ウクライナ避難民の支援として、日本に避難しているウクライナ避難民の女性を招き、生徒と保護者がウクライナの話聞くオンライン交流会をしたことが報告された。台湾からも、ウクライナの学生を励ますためにフラッシュモブをやった動画が投稿された。

5. Share your media creation (ポスターや写真、ビデオなどを投稿)

世界中から、世界平和を願いたくさんのポスターやビデオ、授業風景の写真が投稿された。

4 成果と課題

5つの交流フォーラムに、日本、ジョージア、ルーマニア、インド、ロシア、アメリカ、台湾と世界中から参加があり、平和メッセージやポスター、自国の難民支援の状況や支援活動が共有された。まだ十分とは言えないが、グローバルな平和の学びの場が生まれたように思う。今後は、生徒が地球市民の一員として、グローバルなデジタル・コミュニティに積極的に参加できるよう工夫したい。

GOMI on EARTH

— ゴミの長い旅 —

Project Facilitator 高木洋子

わたしはGOMIである。近年の地球温暖化問題、プラスチック問題、そしてSDG14に関わるゴミに対して、iEARNを通して子ども達・生徒たちが身近なゴミへの意識に目覚め、未来の地球を守るためにゴミ活動へと展開する。

GOMI探検家 GOMI活動家 世界のGOMI現実

1. はじめに

2017年に発足した本プロジェクトは6年目に入り、世界のゴミ現実が人々の日常生活や健康に影響を与える現実を踏まえ、GOMI on EARTH活動を継続する。

2. 目的と方法

2-1 目的

まずGOMIへの意識を育てる。自分の手から離れた身近なGOMIから始まり、家庭・学校・地域・日本の、そして地球規模のGOMIへと興味・関心を広げ深める。参加国間のGOMI事情を共有し、GOMI活動を展開する。

2-2 方法

Schoologyを使ったiEARN Collaboration Center “GOMI on EARTH” への参加登録をし、次の各Folderに沿って進める：

<https://iearn.schoology.com/course/6033398089/materials>

- 1) 学校紹介・参加者自己紹介
- 2) Part 1: あなたはGOMI探検家
- 3) Part 2: 世界のGOMI現実を知ろう
- 4) Part 3: あなたはGOMI活動家
- 5) Plastic Waste Problems Arts Exhibition
- 6) Series MOTTAINAI
- 7) Reflections

3. 活動内容

3-1 学校紹介・参加者自己紹介

● Taipei Municipal Tianmu Elementary School from Taiwan, Cindy先生

● Alexander Dawson School, Bill 先生と、仙台上杉山中学校、若生先生の相互紹介により、2校の生徒たちの自己紹介と交流

● Sagami Women's University Elementary Schools, 吉田先生

● Sultan Mahomed shah Aga Khan School, Pakistan, Humaira Asif先生

3-2 Part 1: あなたはGOMI探検家

● Bill先生の生徒たちによる3編のマイクロプラスチックSlideshow.



● Report from Kamisugiyama JHS (Japan) students' GOMI Detectives by 若生先生—19枚のスライドと更に115枚のスライドが日本版として投稿された。

またBill先生の生徒たちと相互のコメント交流が活発化。

3-3 Part 2: 世界のGOMI現実を知ろう

従来の資料と新たに“A Plastic Story” by PSD Nepal”を加えた。

3-4 Part 3: あなたはGOMI活動家

皆さんからの活動家報告が来ていません。

3-5 Plastic Waste Problems Arts Exhibition

3-6 Series MOTTAINAI

上記3-5、3-6は、大学生ファシリテーターの青山学院大学の報告レポート参照。

3-7 Reflections

まだ投稿がありません。

4. 成果と課題

● 成果

今期の活動中心は、USA, Alexander Dawson School, Bill 先生と仙台上杉山中学校若生先生の生徒たちによるGOMI探検家としての成果発表と彼らの交流でした。

● 課題

力不足であったと認めざるを得ない。今後の継続を思案中です。

The Olympics & Paralympics in Action (TOPA) Project

～北京 2022 から、パリ 2024 へ向けて～

iEARN/JEARN 滝沢 麻由美

まだコロナ禍の中、東京 2020 直前の 6 月にオンライン発表会 TGE 2021 が、そしてそのわずか 7 ヶ月後の 2022 年 1 月には、北京 2022 のための TGE 2022 が続けて開催されたが、2 月の五輪後のウクライナ侵攻で、本来の「オリンピック休戦」の理念も及ばないまま 3 月のパラリンピックと続き、2 大会連続で国際的な有事に大きな影響を受けることになった。その後のプロジェクト活動は今度こそ無事に開催されることを願い、パリ 2024 に向け準備しているところである。

五輪・パラリンピック教育 多様性と調和 TGE 2022 北京 2022 パリ 2024

1. はじめに

共同プロジェクト・ファシリテーターの長谷川早百合さんとともに、東京 2020 に向けて活動を進めていた最中に全世界を襲ったコロナ禍は、その延期 1 年後にやっと開催された 2021 年の大会の際もまだまだ大きな影を落としていた。そしてそれがわずかながら薄らいできた 2022 年 1 月に、五輪開催前を恒例とする TOPA オンライン交流発表会 TOPA Global Exhibition (TGE) 2022 が、前回の TGE 2021 のわずか 7 ヶ月後におこなわれた。昨年度 2021 年度の報告書では、その TGE 2021 の参加者に実施したプロジェクト後アンケート（アイアーンの旧版に一部質問を追加したもの）の結果について詳細な考察をおこない、その成果と課題をまとめた論文としたため、今回はそのときに触れられなかった TGE 2022 の様子と、その後少しインターバル期間となった今年度の活動を次回のパリ 2024 への準備期間として報告し、最後に 2023 年度に向けての活動について簡単に述べたい。

2. 目的と方法

2-1 目的

TOPA プロジェクトは、オリンピック・パラリンピック競技大会、特にその価値 (Olympic & Paralympic Values) やフェアプレイについて学ぶことを通して、友情、励まし合い、「多様性と調和」を尊ぶ精神を育むことを目的とする。また、スポーツを通しての「ウェルビーイングと連帯」については「スポーツをする、見る、支える」だけでなく、子どもたちがより良く生きることを目指す中で、アート、音楽、持続可能性等と関連付けることによって、活動や成果物を発表し共有する。

2-2 方法

実施計画案と内容項目

1) TGE 2022 : 2022 年 1 月 29 日 (2 時間半)

・オンライン交流発表会の参加者は、プロジェクト参加の小中高の先生、当日発表をおこなう中高生、及び活動をサポートする JEARN Youth の大学生とその先生

・主に小学校の成果物のまとめビデオの観賞会と、中高生による口頭発表やワークショップ形式の協働成果物の制作をおこなう。

2) 北京 2022 後の 2022 年度

・参加者は小中高生とその先生、及び活動をサポートする JEARN Youth の大学生とその先生

・プロジェクト・スペースの構成は、①五輪・パラリンピック教育の資料：「オリパラの価値」「フェアプレイ」「オリンピック休戦」(Olympic Truce) 等 ②フランスのカントリー・コーディネーターからパリ 2024 についての最新情報を随時アップデート ③「自己紹介と最近の学校活動ニュース」(ウェルビーイングに通ずる全ての活動) ④五輪・パラリンピックについての学びの活動や成果物

3. 活動内容

3-1 TGE 2022 の様子

8 カ国から 18 の小中高大の参加のうち、TGE 2022 当日には、40 人の先生とその生徒たちが参加した。以下は当日のプログラム内容である。

<当日のプログラムと参加校>

1) Hello around the World! (各国語であいさつ)

2) Students' Presentations : Shenzhen Yadi Primary School, The Second Experimental Primary School of Songyuan City (China), Sidi Haj Said High School (Morocco), Kavaya School (Nepal), School 238 (Azerbaijan), Ostroshitsy

School (Belarus), Toyo Gakuen University (Japan)

- 3) Let's Make a Cheering Slogan! (応援スローガンの協働制作)
- 4) Teachers' Presentations : Kindergarten 13 of Vyborg (Russia), Eaton Primary School (Australia)

まず中国の先生と小6の児童が北京 2022 と自国の Covid-19 対策について、そして他国の中高生もコロナ禍での生活、冬のスポーツや北京 2022 への興味、アスリート等についてクイズもまじえて発表した。東洋学園大学の学生（坂本ひとみ教授「児童英語教育」ゼミ）は、JEARN Youth として、福島県須賀川市立白方小学校（鹿又悟教諭）と大田区立馬込小で、このプロジェクト活動をサポートした様子を発表し、中高生の発表では司会も務めた。続いて中国のカントリー・コーディネーターがリードしながら、参加者が考えたそれぞれの国の言語と英語での「応援スローガン」を共有し、今回のエキシビションの全体成果物として多言語による「応援スローガン・コラージュ」を協働制作し世界に向けて発信した（図1）。



図1 多言語での応援スローガン・コラージュ
3-2 北京 2022 後の 2022 年度参加校と内容

中高では、ベラルーシの Ostroshitsy School (Elena Razgulina 先生)が、東京 2020 パラリンピック・メダリストの地元の水泳選手にインタビューをして手作りのマスコットを手渡ししたり（図2）、「ウェルビーイング」につながるヘルシーな食をテーマに“A Delicious English Week”という英語の授業で作成したポスターと実際の料理の様子を紹介した。



図2 ベラルーシの地元パラ水泳メダリストと
小学校は、滝沢と長谷川さんの支援校が中心となり、台湾やオーストラリアの先生たちともやり取りしながらさまざまな学校活動（学校紹介、避難訓練、外遊びや体育、季節行事、アート等）や、この3国がWBCの出場国だったこ

とから、各国語で応援ビデオを送った。滝沢の大田区立馬込小では、東洋学園大学での担当授業「児童英語教育指導法」「児童英語教育実習」の学生が JEARN Youth として5回来校し外国や季節がテーマの活動をサポートしたり、児童がパラ競技の「ゴールボール」ミニ体験をして目の障害について考えたりした（図3）。



図3 パラ競技「ゴールボール」のミニ体験

長谷川さん支援の世田谷区立千歳小（島崎はるか教諭）は毎回参加人数が多く（6年生4クラス160人）、ダイナミックな活動の様子や成果物が共有される。今回は6年生が中心的役割の縦割りクラス（1～6年生）での全校あがての冬の体力作りの様子と、オリパラの価値、歴史、ヒーロー、デフリンピックについて学び、最後に成果物としてオリパラのシンボルマークのツリーに価値のことばや、葉や花に見立てたカードに自分の希望や夢を書いて学校の展覧会の作品とした様子が紹介された（図4）。

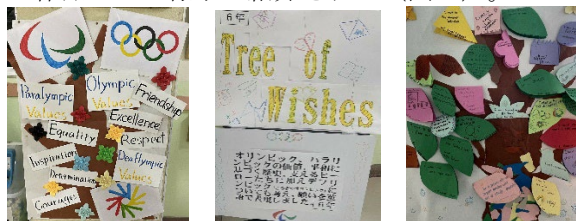


図4 オリパラの価値と Trees of Wishes の作品

4 成果と課題

○成果

- ・TGE 2022 は中国のカントリー・コーディネーターと熱心な参加校のおかげで北京 2022 について詳しく発表してくれたり、協働制作のコラージュもとても有意義な作品になった。
- ・2年弱で3度のTGE開催があり、参加校の先生方と良い関係を築くことができた。
- ・TGE 2022 後はインターバル期間で参加校は少なかったが、2023年度の協働活動に向けて良い関係作りができた。

○課題

- ・2023年度はパリ 2024 まで1年のカウントダウンの時期となるため、フランスからの学校参加を一層働きかけていく。
- ・以前の参加校に加えて新たに呼びかけたり、より生徒同士がつながるようにしていく。
- ・オリパラの精神や価値を学ぶことは世界の平和につながる、ということをより実感できるプロジェクト活動になるよう工夫していきたい。

GIGA スクール時代のデジタル・シティズンシップ教育

－ 防災世界子ども会議 NDYS プロジェクトの挑戦 －

防災世界子ども会議実行委員会 実行委員長 納谷 淑恵
プロジェクト創設者 岡本 和子

2022 年、防災世界子ども会議は「防災と平和」をテーマに、世界から 7 の国・地域の子どもたちが国際協働学習に挑戦した。日本の学校は GIGA スクールの進展で、1 人 1 台端末環境下、世界を視野に入れ、グローバルな視点を組み、地球市民としての協働的な学びを行った。成果はデジタル・ツールを使ってまとめ上げ、世界に向けて発信するという未来につながる学びのスタイルである。本稿では、2022 年 7 月 23 日に開催した「防災世界子ども会議 2022in 新潟」でのハイブリッド型成果発表会を中心に、その方法、成果、課題について紹介し、GIGA スクール時代のデジタル・シティズンシップ教育の可能性について述べる。

GIGA スクール時代 Society5.0 for SDGs デジタル・シティズンシップ教育 国際協働学習
地球市民

1. はじめに

「防災世界子ども会議 (NDYS Natural Disaster Youth Summit)」は、阪神・淡路大震災から 10 年、神戸での第 2 回国連防災世界会議 パブリックフォーラム (2005 年 1 月開催) を機に始まったグローバル・プロジェクトである。「大震災の教訓を世界の子どもたちに伝えよう、命の大切さを考えよう！」と「防災世界子ども会議 2005 in ひょうご」国際会議を目指して、ひょうごの子どもたちと 15 の国・地域、1000 人の子どもたちのオンライン交流学习からのスタートである。



写真 1 「防災世界子ども会議 2005in ひょうご」の発表の様子

2005 年 3 月、兵庫県立夢舞台国際会議場を舞台に第 1 回国際会議 (成果発表会) を開催。世界 11 の国・地域から子ども達の代表を迎え、子どもたちは、「防災について学び、感じ、共有しよう！」とする宣言文をまとめ、アイアーン (iEARN International Education and Resource Network) を通して防災教育ネットワークの基礎をつくり 21 世紀の教育モデル「国際協働学習」をスタートさせた。ICT を活用し、海外の学校と PBL (Project Based Learning) を通して、世界と共に学ぶ学習を日本語で「国際協働学習」と呼んでいる。

これまでに 62 の国・地域の学校がネットワークにつながりプロジェクトに参加している。

2022 年 2 月 24 日、ロシアによるウクライナ侵攻のニュースはマスメディアを駆け巡り、世界情勢が大きく揺れ動いた。本プロジェクトには、プロジェクトのスタート時より、ロシア・ウクライナ・ジョージアなどが継続して参加しており、新型コロナウイルス感染症が収束しない厳しい環境下でもあり、平和と防災を確保することが、SDGs の達成のための不可欠な前提条件であると身をもって実感した。

そこで、防災世界子ども会議 2022 は、「防災と平和」をテーマに「デジタル・シティズンシップ教育」の視点で、世界から 7 の国・地域の子どもたちが国際協働学習に挑戦した。

それは「世界標準」の協働型学習によって、地域の課題を世界の課題と結びつけて考える SDGs につながる「地球規模課題」について、対話をしながらデジタル技術・思考を身につけ、デジタル社会を生きる地球市民のあり方を目指す学びの実践であった。日本における GIGA スクール時代の学校における「デジタル・シティズンシップ教育」は、未来社会への達成目標への戦略である

「Society5.0」の世の中を、よりよく生きていくための学びといえる。

本稿では昨年 7 月 23 日に行った成果発表会について報告する。

2. 防災世界子ども会議 ロードマップ

2004 年より、ICT を活用し「世界と学ぶ！国際協働学習」をスローガンに教育実践を積み重ねて

きた。これまでの教育形態ではできなかった世界を視野に入れ、グローバルな視点を組み、地球市民としての協働的な学びを行っている。

2016年1月より、2030年を見据え、これまでの流れを深め広げていくためには、持続可能な開発の視点からの「防災教育」がさらに必要と考え、国際協働による「持続可能な開発目標 SDGs の達成に向けた取り組み」がスタートする。

2020年1月、アイアーンは世界経済フォーラムで、未来の教育モデルの一つとして報告書に掲載された。

2020年8月、「気候変動と私たちのすむまの防災・減災・復興」をテーマとする国際協働学習のまとめとして、新潟市に集まり、成果発表を行う予定だった。しかし新型コロナ感染拡大予防の観点から、集まる会議は全面中止になった。しかしそれを乗り越える手法を提供したのはデジタル・テクノロジーだった。



写真2 コロナ禍、Zoomによる成果発表会案内

2022年4月、「防災世界子ども会議2022in新潟」(成果発表会)ハイブリッド開催に向けて、「Society5.0 for SDGs」を題材としたGIGAスクール時代のデジタル・シティズンシップ教育を視点としたPBLがスタートする。



写真3 未来社会への達成目標と戦略「Society5.0 for SDGs」

背景として、日本政府と経団連は、Society5.0の実現とSDGsの達成をイコールとしており、Society5.0を世界規模で実現できた未来は、SDGsの達成に近づいているとしている。そのためにはこれまで不十分であった情報の共有や連携をより促進していこうというものである。

3. 目的と方法

3-1 目的

① 地域を創生する 主体的な市民の育成

それぞれの国・地域にあった持続可能な社会づくり(防災文化の醸成)を目指して、SDGs達成を担う、次世代の市民を育成する。

② イノベーティブな地球市民を育成する。

3-2 方法

SDGs達成のための国際協働学習プログラム

対象：世界の小学生・中学生・高校生

① メインプログラム

みんなでつくるグローバル災害安全マップ



写真4 世界のすべての地域の学校が災害安全マップをつくることによりグローバル災害安全マップが出来上がる！

② 小さな防災大使

③ こころを癒す「音楽」の力

3-3 国際協働学習の流れ



3-4 成果発表会の方法と参加校

プロジェクト参加校は、成果発表会に向けデジタル・ツールを使って、地域の災害安全マップやパワーポイントによる発表資料の作成を行っている。また、災害後の心の癒し、および各国・地域の文化紹介としての音楽発表の練習も同時に行っている。2022年度は、7の国・地域8グループの発表があった。成果発表会参加グループは以下である。

- ①日本（廣田元子、はづっ子カウボーイ四日市、三重県）Japan (Motoko Hirota, Hazukko Cowboy, Yokkaichi, Mie)
- ②インドネシア（ダイアン・ノヴリニ、SMP イスラム アルアズハー 9 -ベカシ）（都合により当日欠席）Indonesia (Dian Novrini, SMP Islam Al Azhar 9 - Bekasi)
- ③ウクライナ（リュボフ・シャモバ、ハリコフ特別学校 No.75、ハリコフ）Ukraine (Lubov Shamova, Kharkiv Specialized School No. 75, Kharkiv)
- ④マレーシア（コー・GH、セマンブセカンダリースクール、パハン）Malaysia (Khor GH, Semambu Secondary School, Pahang)
- ⑤インド（ジータ・ラジャン、セントマークス高校、ニューデリー）India (Geeta Rajan, St. Mark's Sr. Sec. Public School, Meera Bagh, New Delhi)
- ⑥インドネシア（サーラ・スアイブ、SMP イスラムアルアズハー 44校、ベカシ）Indonesia (Saara Suaib, SMP Islam Al Azhar 44 - Bekasi)
- ⑦アゼルバイジャン（イラダ・サマドバ、ザリファ アリエバ高校、バクー）Azerbaijan (Irada Samadova, lyceum named after academician Zarifa Aliyeva, Baku)
- ⑧ ジョージア（パブレ・トゥヴァリアシュヴィリ、アイアーンジョージア、トビリシ）Georgia (Pavle Tvaliashvili, iEARN Georgia, Tbilisi)

4. 活動内容

4-1 成果発表会概要

タイトル：防災世界子ども会議 2022in 新潟

日時：2022年7月23日（土）

テーマ：「Disaster Prevention and Peace」

プログラム：

基調講演 各国グループ発表 総評

NDYS2022 宣言文採択参加者：100名（見学者を含む）発表者：7の国・地域8グループ

4-2 具体的な実施内容

成果発表会は、コトリンピック実行委員会と協力し、新潟市の会場と世界の学校をZoomでつなぐハイブリッド型の成果発表会をおこなった。

基調講演のタイトルは、『私の初めての「防災世界子ども会議」体験』で、講演者は、ウィザー・プトゥリ・メララトゥナ（マリクサレ大学、アイアーン・インドネシア）であった。

彼女は、2005年に神戸で開催の第一回防災世界子ども会議に、2004年のインドネシアのアチェで発生した地震及び津波の被災地から参加した生徒であり、現在インドネシアの大学で皮膚科の医者をしている。基調講演の内容は、防災世界子ども会議への参加が、彼女に与えた影響を紹介し、若者が防災を学ぶ重要性を説いたものであった。

会議のまとめとして、アイアーン・ジョージア代表のパブレ・トゥヴァリアシュヴィリ(Mr. Pavle Tvaliashvili)氏によって総評が行われた。



写真5 Zoom参加者の様子



写真6 ジョージアの発表資料



写真7 インドネシアの音楽練習風景



写真8 新潟参加者による食の安全の学び

5. 成果と課題

世界が戦争や感染症などで不安定化する中、オンラインで新潟市の発表会場と世界の学校をつなぎ、「多様性」「市民性」を学び、互いが共存できる平和と安全を希求する場を設けることができたことが最大の成果である。

5-1-1 成果物1 「グローバル災害安全マップをみんなで作ろう！」プログラム

地域の災害安全マップの発信

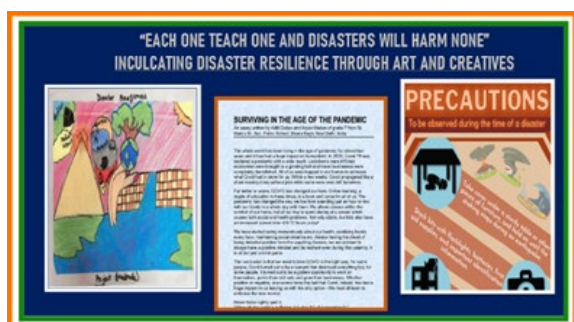


写真9 インドの高校の地域の災害安全マップ

5-1-2 成果物2 NDYS2022 宣言文

防災世界子ども会議では、毎年プロジェクトの締めとしてこれからなすべきことを集め、宣言文を発信している。2022年の宣言文は以下のとおりである。

When the power of love will overcome the love of power, the world will know peace!
(Azerbaijan)

Being United: Building Bridges rather than Walls.. (India)

Let's unite to save our Mother Earth, for the sake of humanity- (Malaysia)

Let's work together for more peaceful life on our earth- (Indonesia)

Let's think of preciousness of life and do what we can do now. (Japan)

Let's be united for living in peaceful society. (Georgia)

WE MUST CALL FOR LASTING PEACE, GENERATION AFTER GENERATION. (Ukraine)

5-1-3 成果物3 NDYS2022 実践 e-レポート 参加の学校は、NDYS 実践報告の書式でレポート (英語記載の PDF) を提出。公式 Web ページで公開



写真10 マレーシアの e-レポート

5-1-4 成果物4 NDYS2022 での防災教育の実践 記録ビデオを公開！



5-2 課題

GIGA スクールの進展、外国語教育改革、探究型学習の導入など、さまざまな改革が急ピッチにすすめられ、「国際協働学習」が、日本の小中高の教室から実体験できる時代を迎えている。新しい時代、この教育モデルを学校にどのようにアプローチしていけばいいのだろう。防災世界子ども会議2022に参加し、異なる文化をもつ子どもたちとの協働的な学びを体験した三重県の高校生が、6月11日開催のジェイアーン20周年記念「第1回国際協働学習シンポジウム」で感想と成果を発表する。

THE TEDDY BEAR PROJECT REPORT-2022

Puppala Rasagnya
TBP Coordinator

The Teddy Bear project is all about sharing cultures through a visiting soft toy. Through the exchange of a bear or other soft toy, students create journal entries to share with their partner class.

Teddy bear project this year focused on **“How will this project improve the quality of life on the planet ?”**

1. The TBPs vision and purpose is the glue that holds iEARN together, enabling participants to become global citizens who make a difference by collaborating with peers around the world.

Teddy Bear Project has had wonderful teachers and students sharing their learnings and this experience is great for the children and for us, who are giving them this opportunity.

As of April 2023, active Teddy Bear Participants number has risen to 81 educators on the iEARN Schoology. The number of group registrations from schools has also gone up. Students also get an opportunity to post on the schoology with their respective teachers' guidance.

The total registrations/applications for the

Age (5-7) has had 7 Educators,
Age (8-10) 11 Schools
Age (11-13) 13 Teachers and
Age (14- 18) 5 Educators participating actively in the TBP forum.

The highlight this year is we have had more registrations from Japan when compared to previous years. Participants are from Oita Niigata and Kanagawa prefectures. Since Japan homes Teddy Bear it is more encouraging for the project

However, this year we have also seen a

shortfall of registrations for Elementary School Ages (5-7).

2. The Teddy Bear Project is on full swing again. Here are a few vlogs for reference.

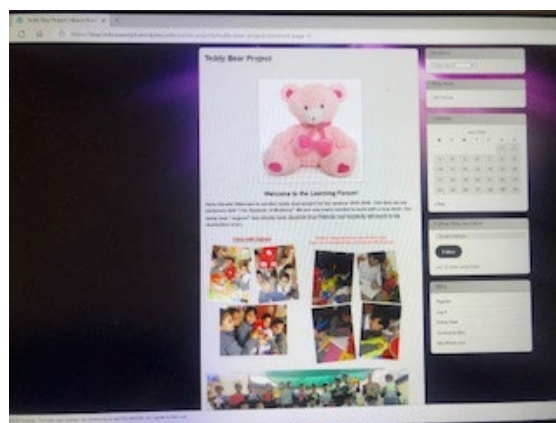


Fig 1: Completed Vlog Beaconhouse Group of schools

3. Teddy Bear Project has been focusing on global project-based learning, TBP youth acquire skills in critical thinking and cross-cultural awareness while connecting their learning to real world issues. This approach has many benefits for students, including:

- Deeper knowledge of subject matter;
- Increased motivation, creativity, and innovation.
- Improved research and problem-solving skills.
- Greater awareness and exploration of community issues and future careers.
- Engagement with peers, adults, and community members outside of the classroom.

TBP Forum has a positive flow message of teachers answering each other's clarifications and guiding each other irrespective of their partnerships. Schoology has helped them clear those boundaries. On the Teachers, guide to Global collaboration Schoology there is a detailed tutorial on TBP Project.

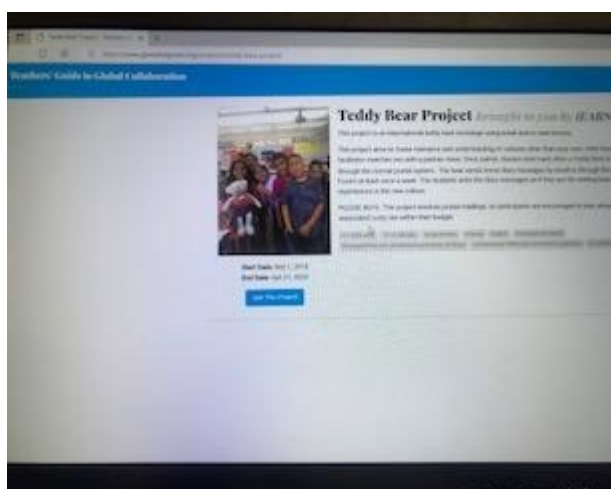


Fig 2: TDP Tutorial iEARN.

Table 1: Participant Data

TBP-Active Members Report 2022-2023		
Year	2021	2022
No of Registrations	17	36
No of ongoing active partnerships	8	9
Carry on Partnerships from 2021	-	3
Unsuccessful Partnerships	4	-

For a few teachers using Schoology is still a challenge. We have lost contacts with few teachers who were once very active on the old iEARN forum. It would be great if iEARN country coordinators can host a schoology understanding session for the teachers in their respective countries.

We at TBP are trying to refer to the archives and contact the teachers to encourage them participate in TBP again.

The completed partnerships have been submitting their collaborations in the form of Pad lets.

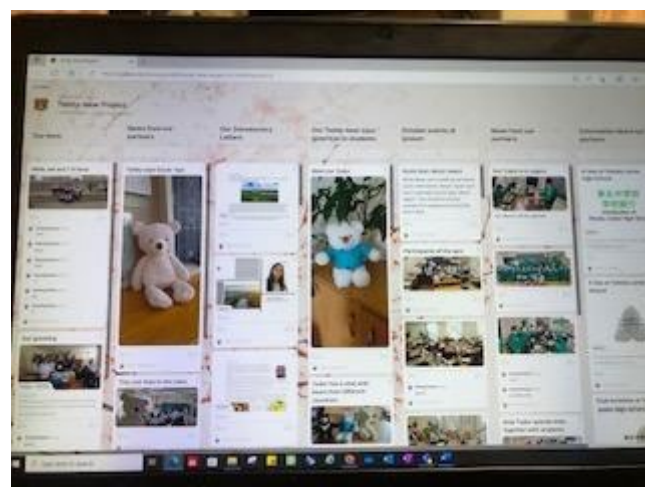
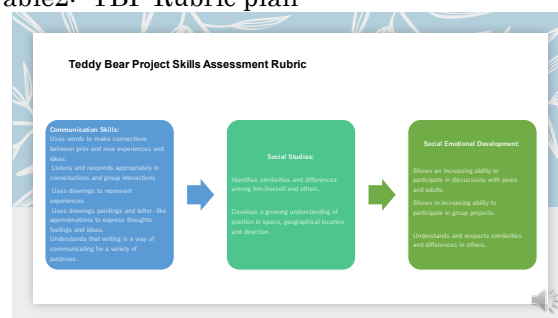


Fig 3: Completed Padlet

We are currently planning to create a simple and easy to access Project assessment Rubric.

Table2: TBP Rubric plan



Teddy Bear Project Skills Assessment Rubric

Assessing the Project: Students will be evaluated during their participation in lessons and activities. Their communication skills and new vocabulary will be monitored. **Evaluating the Experience:** Students will be asked what their favorite part of the project was? Their answers will be recorded on a tape, which will be sent to the partner class.

Benchmarks: A few teachers are planning to develop their class oriented rubrics that assess and evaluate aspects of the project, including collaboration or teamwork, presentation, etc.

Events Promoting the Teddy Bear Project :

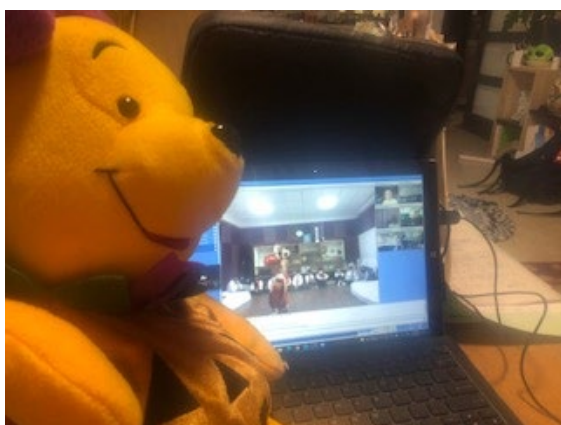


Fig 4: December 2022

At the Mikanodai Media Centre, Osaka Japan, the students from India, Japan, Taiwan, Malaysia, Australia and Philippines exchanged their views on how to keep us active using dance street theme and collaborating by using V2 Conference.



Fig 5:Q&A Session Christmas event 2022



Fig 6: Presentations

On November 3rd 2021 at the Suzurandai Jidoukan Kobe City, the students from India Japan, Taiwan, Indonesia and the participants from Australia met with their Teddy bears on zoom meeting.



Fig 7 Presentations



Fig 8 Project Plan



Fig 9 Zoom Presentations.

Teddy Bear Project is a key to success in building effective relationships with educators around the world.

Folk and Culture Project 実践報告

所属 神戸市立すずらんだい児童館

福井 良子

Folk and Culture Project は、海外とそれぞれの地域の伝承文化の歴史、価値、問題点、解決案を発表しあうことで自分たち地域・国の文化の再評価につながる。iEARN 交流フォーラムでは「伝統文化」を発表することも可能であるが、2022年度は、イベントとして“Food Bearer”を行った。参加者は、Food Bearer となり、自分たちの文化の中で、「食品ロスをしない」伝統的な食べ物や料理を紹介した。最初の2時間は学習と発表原稿作りと発表練習、その後、海外とつないで互いの国の文化を紹介しあった。このイベントの大きな特徴は「異世代交流」として幼児・小学生の参加者の学習・発表を中高大学生ボランティアがサポートすることである。

1. はじめに

児童館には幼児から高校生まで幅広い世代の子どもたちが集まってくる。ここで iEARN Folk and Culture Project を使った異世代国際交流を行っている。今年で6年目になるこの交流は、異なった年代が助け合いながら国際交流を行う形式をとる。幼児から大学生が共に国際交流を行うことは、児童館という場でこそできることがある。

2. 目的と方法

1. 異世代が共に国際交流を行う

異なる世代が共に国際交流するには、手立てが必要である。高校生を中心にとすると幼児・小学生がその内容についてゆけず傍観者になり、学習としての目的を果たさなくなる。そこで、交流の中心に幼児・小学生をおき、中学生・高校生・大学生ボランティアとして、幼児・小学生の学習・発表をサポートする形にする。

2. SDG s 12「作る責任使う責任」を知る。

食べ物（Food）に焦点を当てて、幼児・小学生を対象に、「君たちは食品ロスをなくす伝達者（Food Bearer）だよ」として、最初の2時間はボランティアの中高大学生たちのサポートを受けて、伝統的な食べ物で食品ロスをしないものを学習・それを英語で発表を作り、練習。その後、海外とつないで互いの国の文化に受け継がれた「食品ロスのない料理」を紹介しあった。

3. 異世代間交流をもたらす効果

この活動を通して、幼児・小学生は中高大学生の知識・英語力を尊敬して将来の自分の目標とし学習意欲を高める、中高大学生は幼児・小学生を導くことで人に尽くす・人を助ける行為か

ら自己肯定感を高め、社会への貢献の自覚を育てる社会教育になる。

3. 活動内容

日時：2022年11月3日

場所：神戸市立すずらんだい児童館

テーマ：Food Bearer

「作る責任使う責任」SDG s 12

参加者：幼児 4名、小学生 8名

ボランティア：

中学生 4名、高校生 12名、大学生 2名

当日参加の子どももいたが、参加者の多くは、すずらんだい児童館の英語クラスの幼児・小学生である。授業中に「食品ロスのない料理」を話し合っただけで料理を考えてもらった。それらを当日写真で表示して当日参加者もそれを選ぶことで彼ら発表できる形にした。

幼児・小学生に英語での発表原稿を一日で作成するには、課題がある。この日のテーマである「食べ物を無駄にしない」ことの大切さと自分の発表を作る動機づけ。また英語での発表経験がほとんどない彼らにどのように発表原稿を作成させて発表する勇気を持たせるか、であった。そのため、中高大学生ボランティアに「幼児・小学生たちにものを大切にする大事さと彼らの発表を英語で作成する楽しさと発表する勇気を与えてください」とお願いした。幸い参加した幼児・小学生よりボランティア学生の方が多かったため、1名の参加者に1、2名のボランティア学生がサポートすることができた。

4. 成果物作成

特大の紙皿に当日話し合って決めた「料理の写真」を張り、周りに自己紹介と何を選んだかをそこに書き込んで、それを発表原稿とした。なぜ、それを選んだかまで発表することを期待したが、時間的制約もあり、上記2点の発表がほとんどだった。

5. 国際交流

当日参加したのは、台湾の2校だった。
Kaohsiung Municipal Jhengsing Junior High School 生徒数30名
Kaohsiung Municipal Bao Lai Junior High School 20名
台湾では ZOOM は現在使用禁止なので、急遽 Google meeting に変更した。

台湾側の発表



6. 成果

参加者の幼児・小学生がこの日のテーマを理解して成果物を作成し、自ら手を挙げて発表する勇気を持てたのは、年長者である中高大学生の親しみのある指導の賜物である。大人指が導すると、教える側と受ける側の立場になり、彼らに緊張感を与えかねない。ある種の「心の垣根」が存在するが、中高大学生たちは、幼い子供たちの緊張をほぐし、軽やかに簡単に「心の垣根」を取り除いていた。年長の彼らも「今までいろんなボランティアをしたが、こんなに楽しかったことは初めてです。」と感想を述べてくれた。この異世代交流を始めた当初は、数名のボランティア学生しか集まらなかったが、毎年数が増えて今回は参加者の数を大きく上回ったのを見

ると彼らの中に「充足感」と「達成感」があったと感じる

課題：

中心に幼児・小学生をおいて、中高大学生がサポートする形は異世代交流の流れでは無理はないと思うが、中高大学生の発表の機会が少ないのが気になった。彼らも「活動の見守り」から「活動の仲間」に変えてゆく手立てを今後は持ちたい。

2023年度の予定：

今年の Folk and Culture Project は iEARN Forum に下記の2点の発表を募集する。

1. 自分たちの文化を紹介する。
2. 昨年同様“Do not waste food”をテーマに食べ物を無駄にしない伝承料理を紹介する。
3. 「文化の日に発表会」

11月3日、日本での文化の日に、1番と2番3を紹介する予定である。

当時に昨年同様に数校の海外の生徒たち日本の生徒たちが交流する機会も予定している。

日時：2023年11月3日午後1時～午後3時
場所：神戸市立すずらんだい児童館、および交流参加校各学校内

皆さまのご参加をお待ちしています。



小学校・中学校実践編

TeddyBearProject における個別最適化な学び

～教師間の打ち合わせと親和な関係と共に～

金沢市立大徳小学校 角納 裕信

大野町小に赴任してから、連続・継続して6年間、台湾の高雄市一新甲國民小の Sandy（淑媛）とペアを組み国際協働学習を行ってきた。無理せず、お互いのやりたいこと、子どもにつけたい力を確かめながら、尊重し合いながら、進めてきた。今年、学校を異動し、学級担任を外れ、続けていくことが困難になって、改めて、自分の置かれてきた環境が Sandy を含め、恵まれていたのかをしみじみと実感するに至った。

コミュニケーションツール 掲示板 GIGA 構想

1. はじめに

もとより教師になったのも、社会科を専門としているのも、全ては「国際理解教育」「国際協働学習」を進めていきたいからである。グローバル化の時代にあって、他を認め尊重することは、子ども達につけていきたい力であると考えからである。

2. 目的と方法

2-1 目的

TeddyBearProject で、異文化理解、異文化尊重、自国文化の良さの再認識をはかっていきたいと考えている。その過程で、英語やコミュニケーションツールの使い方等、技能を身に着けることになる。

2-2 方法

1) 実施計画

英語や総合や社会科の時間で、実施する。できるだけ、教科と関連させながら行うことにする。それができるのが、学級担任の強みである。が、最近では、しなければならないことが決められていて、教科担任制が入り、より計画的に進めなければならないようになってきている。

プロジェクトの活動時間：(45分×約15コマ)

2) プロジェクトの実際の内容

- ・相手国について知ろう (社1コマ)
- ・どんなテーマで交流しようか (国1コマ)
- ・自己紹介をしよう (英2コマ)
- ・発信したいことを考えよう (TV会議の練習をしよう) (国社6～8コマ)
- ・TV会議をしよう (国社2コマ)
- ・Card交換しよう (英1コマ)
- ・Bearが帰ってきた (総2コマ) (帰国報告会)

3) 評価方法

それぞれの教科の知識技能・思考判断表現・学びに向かう力(主体的)の3観点を中心に評価をす

る。特に TeddyBearProject の場合、主体的に学びに向かう力が試される。世界に向かって提案できる人間を育てていきたいからである。

3. 活動内容

3-1 具体的な実施内容

大きく分けて①出会い②深める③まとめると3段階で成り立っている。

- ① は Bear に性格を付けたり、自分たちの自己紹介文を書いたり録画したり、相手国の事を調べたり、知りたいことを書き出したり、どんなテーマで交流し合うか、決める段階である。交流相手国は、9月はじまりであるから、日本側は準備に余裕があることになる。9月までに上記の事を大体決めておくのである。
- ② の深めるで、実際に TV 会議を通して、交流するわけである。テーマとしては、段階として、学校紹介、地域紹介、そして、「環境」をテーマに話し合うことが多い。交互に発表し合って、質問を受け付け、それに対して答える、という事が多い。
- ③ のまとめ、では、Bear が帰ってきて、交流相手国では、ホームステイという形で、向こうの文化や生活の様子が分かる体験と一緒にしてきている、その写真や文章などをもとに、帰国報告会を開く。その際、大学生が現地に行った体験談を交えて話を聞いたりする活動をする。

3-2 特に大切にしてきた活動

GIGA 構想により、一人一台端末と大容量回線の普及によって、今まで機材の関係で敬遠されがちであった TV 会議、TV 交流 (zoom 会議) が推奨されるようになった。TV 会議ができることにより、リアルな交流が手軽にできるようになってきたのである。

TV 会議では、「表現力」が大切になる。どん

なものにもコツがある。この活動においても、コツがあるのである。そのコツについて、学生さんが、マニュアルを作ってくれた。ひとつのプロジェクトに多くの人が少しずつ関わることで、ここでも「協働」の意義が見いだせると思われる。英語で交流するのだが、英語の先生にも関わってもらえるし、時には ICT 担当の先生にも関わってもらえることが出来るのである。

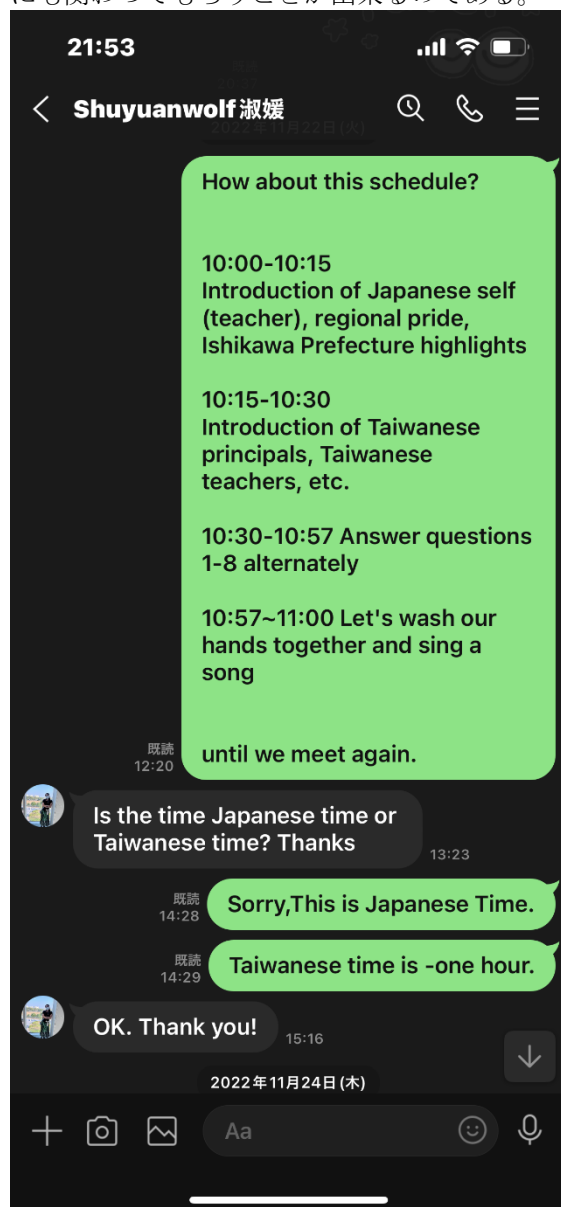


図1 Sandy とのメールツールを使っでの年密な打ち合わせ

4 成果と課題

○成果

- ・TV会議をすることにより、自分のペアの交流相手の顔が見えることで、身近に感じ、その相手から実際の手紙やちょっとしたプレゼントをもらったりすることで、相手の事を、相手の国の事について、関心を持ち、もっと知りたいと思い、主体的に活動するきっかけとなった。
- ・受け取るばかりではなく、発信していかねば

ならない、表現しなければならない、必要感から、「どうしたらより良い発表、表現ができるだろうか」という事を自分事として考え、やってみることが出来る、というのは、非常に良い経験だと考えられる。この経験をもとに、英語なり、異文化に対して興味を持ち、今後の学習への意欲となっていった。

・異文化を知ること、で、「比較」することが出来、今まで意識することのなかった自分たちの地域の良さを再認識するきっかけとなった。

○課題

・「個別最適化」が今後の課題である。どうしたらより個人の進歩や発展を感じることが出来るか、どうしたらより効率よく交流できるか、達成感を得ることが出来るか、考えている。TV会議を個人的にできることが一番いいと思うのだが、なかなかそのようなわけにもいかず、小グループでブレイクルームを作っていくことも考えられるが、英語で司会進行を行ったりするには、子どもだけでは、なかなかマンパワーが足りないと感じる。

そこでその穴埋めをするのが、掲示板でのやり取りである。教師一人が、簡単に管理できる掲示板を作り、お互いにその中で、話をしたり、写真をアップするのである。それにしても、これからますますコンピューターを使う際のリテラシー教育の重要性が増してくるであろう。



図2 TV会議の様子（日本側）



図3 TV会議の様子（台湾側）

アンネ・フランクから学ぶ人権

仙台市立上杉山中学校 若生深雪

実践校では、2023 年 2 月、全国を巡回し第 117 回目となるアンネ・フランクパネル展を開催した。このパネル展では、人権の尊重や平和を希求する心を育むことを目標とした。授業では、幸せなユダヤ人家族が、ホロコーストによって失われる悲惨さを、パネル展の他に『アンネの日記』の映画鑑賞によっても考えさせた。生徒たちからは、アンネの人生を自分と重ね、平和な世界に向けて自分にできることは何かと真剣に考える姿が見られた。

人権教育 平和教育 アンネ・フランクパネル展

1. はじめに

「人権」についての学習は、中学 3 年生の社会科の公民分野で、世界人権宣言や歴史上の人権侵害の事例とともに、その概念を知識として学習するのが一般的である。しかし、これだけでは実生活との結びつきは薄く、人権の重要性を深く考えさせるような授業内容とはならないであろう。そこで、人権尊重の心を涵養し実際の行動に結びつけることができるような授業を行うことにした。

2. 目的と方法

2-1 目的と目標

本実践は、人権教育を積み重ねた総括となる授業であり、アンネ・フランクパネル展を閲覧させ、人権の重要性を再認識させることが目的である。具体的な目標は、ホロコーストが与える心理的な衝撃を越えて、以下の点について考えさせることである。(1) なぜこのような人権侵害が起こってしまうのか、(2) それを防ぐには自分は何をすればよいのか。最終的には、生徒の日常生活のいじめ問題などとの関連性を明確にし、差別を絶対に許さない実践力に結びつくような授業を目指した。

2-2 方法

1) 実施計画

中学校 3 年生 5 クラスを対象に、英語の授業でアンネ・フランクパネル展を閲覧させ、同時に 1959 年作の映画『アンネの日記』を鑑賞させた。一連の授業は 45 分間×4 コマで実施した。

2) 方法

2-1 の目標を達成させるために、パネル展を開催する約半年前から、人権教育に関する授業を 10 回に渡って実施した(表 1 参照)。複数の題材を通して、様々な視点から人権を考えさせた。その中で、「A Mother's Lullaby (広島原爆)」 「A Legacy for Peace (ガンジーの伝記)」 「100 人の村の世界」は、英語の教科書の題材

であった。教科書の題材以外の授業を計画する際には、「JICA 地球ひろば」と文部科学省「人権教育の指導内容と指導方法」のウェブサイト、さらには研究社から出版された『多文化共生のためのシティズンシップ教育実践ハンドブック』を参考にして学習指導案を作成した。

表 1 実施した人権教育の一覧

コマ	題材	テーマ	教科
4	「A Mother's Lullaby」	平和	英語
4	「A Legacy for Peace」	差別	英語
1	不思議の国インド	異文化理解	英語
1	「オウ君の部屋探し」	差別	英語
1	ステレオタイプとは	偏見	英語
3	ウクライナの先生のオンライン授業	異文化理解	英語
1	世界人権宣言	人権	英語
1	違いから考える平和な社会	格差	英語
1	100 人の村の世界	人権	英語
1	「そのこ」谷川俊太郎	格差	道徳
1	子供人権宣言	人権	道徳

3) 評価の方法

目標の達成度合いは、生徒が書いた振り返りの内容を、ルーブリックに基づいて評価した(表 2 参照)。

表 2 人権教育のルーブリック

視点	A (高)	B (中)	C (低)
人権	「人権」を尊重する態度を日常生活で実践しようとする。	「人権」を尊重する意義を理解している。	「人権」とは何かを大まかに説明できる。
差別	「差別」は許されないことを日常生活で実践しようとする。	「差別」の問題点を理解している。	「差別」とは何かを大まかに説明できる。

3. 活動内容

3-1 実施内容

パネル展は2月13日から2月24日まで公開され、設置と解体作業は英語系の生徒が行った。また、PTA 会合に合わせて、保護者にもパネル展開催を案内した。授業では、パネル展の閲覧以外にも、Anne Frank House のウェブサイトの閲覧や『アンネの日記』の映画鑑賞をし、その後、振り返りの作文を実施した(表3 参照)。

表3 アンネ・フランクパネル展の授業実践

コマ	項目	授業内容の詳細
1	・オリエンテーション ・Anne Frank House のウェブサイトの閲覧 ・展覧会の閲覧	社会科での既習内容(ホロコースト)を確認させ、展覧会に必要な予備知識を与えた後に閲覧させる。
2 ・ 3	・『アンネの日記』(1959年)の映画鑑賞	字幕は日本語と英語の両方を画面に表示させ内容理解を支える。
4	・事後学習	振り返りの作文を日本と英語で書き、自分の生活とリンクさせる。



図1 パネル展の準備の様子

4. 成果と課題

4-1 目標について

2 つ掲げた目標、(1) なぜこのような人権侵害が起こってしまうのか、(2) それを防ぐには自分は何をすればよいのか、についてほとんどの生徒は、ルーブリックの A 段階の指標を示す意見や感想を書いていた。以下に作文の一部を紹介する。「差別の無い世界を目指して行動する」「辛い思いをする人がいないように、差別やいじめをなくしていきたい」「起きたことを本などで広めていくことが、あとから生まれてきた人に正しい情報を伝えていくことになる」「世界の人々が安全に暮らせる世界を作るためにも、私たちが協力して戦争や差別などがないようにしていきたい」「私自身も平和に対する意識を高めたい」「私は、私達は、彼女からもらったものを胸にどう生きていくべきなのか、じっくり考える」「将来の平和のために今できることを探したい」。しかし、中には、ホロコーストを心情的にまたは理論的に否定するだけで、ルーブリックの B 段階の指標の作文も見られた。

4-2 異文化理解について

本実践は、他校との交流は含まず、自校内で完結する活動となった。しかし、映画やパネルの中のアンネ・フランクは、生徒たちにとってある種の異文化交流の相手として、時空を超えて存在していた。特に、映画の中で、何気ない隠れ家でのアンネの日常を垣間見て、同世代としての共感する気持ちや親近感を抱いていた。例えば、「私も好きな人ともう一生会えなくなる気持ちや、家族に会えなくなる気持ちは痛いほどわかりました」「アンネ、私達は今幸せだよ。私達は今差別のない世界を目指して、SDGsに取り組んでいます」のような作文があった。

4-3 英語の学習として

生徒は、英語と日本語を使用する場面を臨機応変に使い分け、本実践を教科書の題材の「人権」を発展的に扱った授業と認識し、「人権」の概念を学んでいた。学びの過程では、新しい知識を伝えるために、英語がツールとしての重要な役割を担っていた。「人権」という極めて難しいテーマを英語で考えて表現することに挑戦できたのは、中学校 3 年間の他教科も含めて総合的な教育の成果だと考える。

4-4 課題

今回は、JEARN の要である、グローバル・ネットワークを使った「国際協働」という学習スタイルを採用しなかった。昨年度からは、国内の小中学校ではインターネット環境と一人一台のタブレット貸与が整備された。パネル展を閲覧した国内外の学生同士が、google meetなどを介して貴重な体験を共有してつながることができれば、学びはさらに深まるであろう。最後に、アンネへ向けた手紙を紹介する。

アンネへ

ドイツの当時の状況を考えると、そこには人間の愚かさがあったと思います。アンネの夢や自由など、今の私達に必要不可欠なものを奪ったこの事件は、言葉に表せられないほどに辛いものだったと思います。「アンネの日記」のおかげで、今の私達は多文化を理解し合うことの大切さ、差別の危険さなど、本当に多くの大切なことを学びました。これらを守らないと、また同じような事件が起こりうるような気がします。もう二度と犠牲者が出ないように気をつけて、アンネの生きるべきだった人生のぶんまで、大切に生きようと心に決めました。アンネ、あなたは今世界で活躍しています。夢であった小説家であることも、日記がその代わりになっています。 ありがとう

謝辞 本稿は、「中学校の英語の授業で国際共修の理論の確立を図る ―グローバルシチズンを目指して―」JSPS KAKENHI Grant Number JP23H05049の成果をまとめたものである。

オンライン国際共修からの学び

仙台市立上杉山中学校 若生深雪

中学校 3 年生の希望者 7 名を対象に、放課後の課外活動として、台湾の中学生とオンライン国際交流を実施した。その際、自分たちとは異なる文化背景を持つ人との出会いに焦点をあてた交流をするため、欧州評議会、異文化コミュニケーション能力を向上させるために開発された AIE という自己省察ツールを使用して交流を実施した。交流の成果を、AIE に記載した内容と参加者へのインタビューから報告する。

異文化との出会いの自己省察ツール(AIE) オンライン国際交流 異文化理解

1. はじめに

国際交流から得る学習者の学びは、その国の文化が持つ独自の文脈に影響を受けて異なり様ではない。例えば、UNESCO（2014）は、オーストラリアとインドネシアの大学生のオンラインによる課題解決学習の成果を比較している。オーストラリアの 88%の学生は、最も学んだ成果として、「グローバルな課題」、「相手国の文化」、「グローバルな世界でどのように他国の学生が暮らしているか」を挙げた。これに対して、インドネシアの 47%の学生は、授業の最大の成果として「英語の習得」を挙げた。日本の英語の学習者の教育環境は、英語以外を母国語とするインドネシアの学生の文脈に近い。よって、国際交流からの学びを、英語の習得と同時に異文化理解などにも目を向けさせるには、意図的に学習方略を使用する必要がある。実践は、交流を行った台湾の生徒にも必要性や意義があり、互恵的な教育的価値を持つ国際共修となったが、本稿は、日本側で実施した活動内容と成果を中心に報告する。

2. 目的と方法

2-1 目的

本実践の目的は、オンラインでの国際交流をととして、相手国の生徒との友情を育み仲間意識を高め、もっとお互いを理解したいという気持ちから、異文化間でのコミュニケーション能力を高めることが目標である。

2-2 方法

先述した、実践の目的を達成させるため、欧州評議会言語政策部門によって異文化間能力を育むために開発された、異文化との出会いの自己省察ツール: Autobiography of Intercultural Encounters 2nd edition (2022)の、書き込み形式の児童版を日本語に翻訳して使用した。AIE は、異文化体験に対する自分と相手の反応や態度を、様々な側面から考察させ、クリティカル

な能力を育成するための補完的なツールである。今回は、初めて国際交流をする生徒も多く、質問が明確なAIEの児童版を参考に作成した。質問項目は、以下の8つである。

(1) 出会いのタイトルの記入。(2) その人がどんな生徒だったか、どんな服を着ていたかなど、覚えていることをできるだけ書こう。(3) どのようにコミュニケーションをとりましたか。(4) 相手国の生徒と交流してどのように感じましたか。(5) 相手国の生徒は、どんな気持ちであなたと交流していたと思いますか。(6) 交流国の生徒とお互いに学べることはあると思いますか。(7) この出会いからあなたは何を学び、何を発見したと思いますか。(8) その人たちにもう一度会ったら、もっと聞きたいことや、自分について話したいことはありますか。

これら8つの質問項目の資質・能力の要素は、「文化の多様性の受容」、「聞く力」、「観察力」、「共感」、「分析的・批判的思考」、「曖昧さへの耐性」と捉え、本実践の国際交流の目標として生徒に示した。

また、生徒の保護者に、家庭で交流について話題にしてもらい、生徒の学びを深めることを依頼した。さらに、保護者には生徒との対話内容を簡単にまとめて書面での提出を依頼した。

3. 活動内容

2022 年度、仙台市内の公立中学校で、オンライン国際交流を希望した 3 年生 7 人の参加者に対して、台湾の桃園国立高級中学校と 2 年目の交流を行った。交流は、課外活動としての扱いで放課後に教室で実施した。google meet を使用し、実質の交流時間は約 40 分であった。

表 1 5 回の実践の主な交流内容

日時	トピック	日本側の活動内容
7/4	・自己紹介	・自己紹介を双方で聞き合う
7/15	・原爆	・教科書の原爆の内容を朗読

	・真珠湾攻撃 ・台湾大空襲	・真珠湾攻撃と原爆のプレゼン ・台湾大空襲のプレゼンを聞く
7/19		・自作の平和の詩の朗読 ・合唱「信じる」の録画を披露
9/14	・品物の到着	・プロフィールの絵、伝統菓子 台湾地図、合格祈願絵馬などが到着
10/15	・品物の発送	・日本から伝統玩具・菓子、手紙を送付
12/14	・日本の小説 ・文化交流	・台湾の生徒のお気に入りの日本の小説のプレゼンを聞く ・台湾食文化のクイズに答える
12/21	・震災と防災	・校内防災訓練について報告し合う ・9・21台湾地震のプレゼンを聞く ・震災と防災のプレゼンをし合う ・日本文化のクイズを出す

4. 成果と課題

4-1 成果の総括

筆者の観察を通しての、学習の成果を報告する。まず、交流の回数を重ねる度に、気付きや交流する際に必要なスキルが蓄積されて、相手とのコミュニケーションが円滑になり有意義な交流が実現した。当初は、3回の交流計画であったが、両校の生徒の希望から、その後予定外の2回の交流を追加した。合計5回の交流となったが、5、6回程度のオンライン交流をすることが、表面的な交流に終わらず深い学びにつながるのではないかという印象を持った。

また、生徒たちの交流に対しての意欲が高まったのは、3回目の交流後に実施した物々交換がきっかけであった。台湾の生徒から、日本の生徒それぞれに手書き絵のプロフィールの贈り物や、珍しい台湾の土産を受け取ったことが、非常に嬉しかったようで、相手国の生徒との間に友情が芽生えたと感じられた瞬間であった。

4-2 AIE の効果

生徒一人一人は、異なる生活体験と興味・関心を持つ。それらを土台に交流に臨んでいたのが、印象に残った場面は多岐にわたっていた。しかし、AIEの質問項目が異文化間の出会いを導き、異なる文化を持つ生徒との結びつきを深めることができると分かった。生徒のインタビューでは、交流中にAIEの「問い」を考えてコミュニケーションをし、交流の後にAIEのワークシートに書き込んだりすることで、大事な気づきを促し、それを記憶にも留めておくことができたと言っていた。特に、「次の交流で何を聞きたいか」というAIEの「問い」で、次の活動も楽しみになったという感想が多かった。交流の第一の目的を、英語力の向上としている生徒はいなかった。むしろ、相手の言っているこ

とを理解して自分の思いや考えを伝えたいために、もっと英語の力を向上させたいという意識を持つようになった。つまり、英語力の向上は相手との交流を円滑に進めるための重要な要素であった。そのため筆者は生徒たちに、AI翻訳を使用して交流する方法を提案した。しかし生徒は、AI翻訳を使用すると相手との会話の間や距離感が生じるため、その使用は補助的なもので、直接自分の言葉で伝える事が大切だと考えていた。そして、自分の英語が伝わったという達成感をAIEに記入していた。

次に、保護者と生徒の振り返りから見えてきたことをまとめたい。保護者は、子どもから聞く交流体験について、温かく受容する態度で感想を聞き、親子で体験を共有していた。生徒が台湾の習慣や文化について驚き疑問に思ったことに対して、日本の文化や教育制度などの特徴を根拠として、その疑問や驚きに対して説明をしていた。また、保護者は、次の交流に向けて、ポジティブな言葉を投げかけ、それが生徒の励みになっていた。

5. 終わりに

今回の試みは、中学3年生に対して行った国際交流だったので、これまでの英語の授業の蓄積から、台湾の生徒と意思疎通ができる状況であった。また、題材の選択に関しては、予備知識や理解力が備わっているのも、様々な題材にも挑戦できた。これが中学3年生で国際交流をする利点だろう。一方、中学3年生は受験生なので、放課後は通塾し時間の融通をつけることが難しい。そこで今回は、AIEの振り返りを保護者に依頼した。本来であれば、その場をファシリテートした教員と参加者を交えて、それぞれが交流から感じたことを共有すれば、学びはさらに深まったと思われる。

今回の交流をまとめる。生徒はAIEを活用して、自分自身の考えや感想を整理し、相手国の生徒との交流をより意味のあるものに進展させた。その結果、両校の生徒の異文化間能力が向上し、国際共修と言える有意義な授業を成立させることができた。

参考文献

Council of Europe. (2022). *Autobiography of Intercultural Encounters (2nd edition)*.
UNESCO. (2014). *Global Citizenship Preparing Learners for the Challenges of the 21st Century*.

謝辞 本稿は、「中学校の英語の授業で国際共修の理論の確立を図る グローバルシチズンを目指して」JSPS KAKENHI Grant Number JP23H05049の成果をまとめたものである。

ウクライナのリュウボブ先生とのオンライン授業

仙台市立上杉山中学校 若生深雪

実践校では、ウクライナの iEARN 会員の教員と、オンラインでつなぎ英語の遠隔授業を実施した。授業の目標は、ウクライナ文化と接することで、異文化を理解する態度を育み、さらに他文化の視点から自文化を意識させることでもあった。授業成果は、生徒の多様性を尊重する態度を育むと同時に、他国の教員による授業の有用性について再認識した。また、同じ授業目標の下で育まれる教育者同士の同僚性が、教育の質を向上することに貢献したことについても報告する。

異文化理解 同僚性 オンライン授業

1. はじめに

JEARN の最も重要な活動は、世界の若者がグローバル・ネットワークを活用したプロジェクトベースの「国際協働学習」を通して、グローバル・シティズンシップを獲得することである。その教育活動の結果、世界の若者と教員が国境を越えて友情を育み、世界平和の構築に貢献している。2022 年のロシアのウクライナへの侵攻では、被害を受けたウクライナの iEARN 会員の関係者への支援のため、JEARN での支援活動が即座に立ち上がった。今回の授業はその支援の一環として筆者が企画した。

2. 目標と方法

2-1 授業の目標

授業の目標は、異文化への受容態度を育むことと自文化に気づかせることであり、授業のトピックはウクライナ文化であった。

2-2 方法

2022 年度、仙台市内の公立中学校の約 470 名の全校生徒を対象にして、ウクライナのハルキウ第 75 学校の教員によるオンラインでの英語の授業を実施した。本来ならば、ハルキウの小学校に通う小学生との交流であるが、学校が閉鎖され避難をしていることから、今回はリュウボブ先生との交流となった。50 分の授業を合計 3 コマ割り当てた（表 1 を参照）。

表 1 オンライン授業の計画

授業内容
【1 時間目】 ・オリエンテーション ・ウクライナについて、班ごとにトピック（文化、建物、食べ物、自然、生活）を選択して協働的に事前調査し、その後「ロイロノート」で調査結果を学年全員で共有する。（全校生徒）
【2 時間目】 リュウボブ先生とのオンライン授業 【宿題】 授業の振り返りとリュウボブ先生に対しての質問を考える（全校生徒）

【3 時間目】代表生徒の手紙をリュウボブ先生へ送信。リュウボブ先生からの返信を読んで、返信の手紙を作成（3 学年の生徒）

3. 活動内容

3-1 実施内容

2022 年 10 月～12 月にかけて、中学 1 年生から 3 年生の合計 15 クラスの英語の授業を対象に行った。実践校は、生徒全員が日本語を母語としていたため、オンライン時は、適宜日本人教員が日本語で説明した。教材は、両国の教員が協力して作成した、ウクライナ文化の紹介に関するパワーポイントと、ハルキウ第 75 学校の子どもたちの踊りや合唱の動画であった。授業は Zoom を使用し、時差の違いから時間割の最後のコマで実施した。15 クラスの授業は、筆者が担当する 10 月 31 日の 3 年生の授業を皮切りに、2 年生、1 年生という順番に実施し、他の学年を担当する英語教員に授業を引き継いだ。外国語指導助手は全ての授業に参加し遠隔授業の設定等を行った。そして、ウクライナの電力供給が遮断された事情から授業が延期になるトラブルもあったが、12 月 12 日に無事に全授業を実施することができた。

3-2 両国の教員間のやりとり

ウクライナと日本の間で、授業の立案と毎授業後の振り返り等について、合計 118 通のメールのやりとりを行なった（表 2 を参照）。9 月 22 日に、筆者から英語版の自校紹介ビデオ（生徒作成）を送ることから始まり、10 月 31 日の実際の授業までの約 1 か月間、授業の内容の調整をした。双方の教員は、生徒同士の協働学習でのファシリテーターとしての経験はあったものの、海外の生徒に対して授業を行なうのは初めての経験であった。よって、日本側は、生徒の実態を把握していることから生徒情報を提供し、それを基にして試作した授業をウクライナ側から受け、さらに日本側がそれを検討し修正

を依頼するというやりとりを重ねた。



図1 オンライン授業の様子

表2 授業構築のやりとりを項目別に整理

【オンラインの設定と接続】 ・教室前方に設置した大型テレビ1台をモニターとして使用 ・非常時の通信手段として WhatsApp 電話を使用 ・パワーポイントを堅固な PDF に変換し、日本側でリュウボブ先生の進行に合わせページめくり ・生徒は個別のタブレット画面で PDF 資料を見る ・ネット回線遮断時は、日本側で回線が回復するまで授業を引き継いでそのまま継続する ・リュウボブ先生との会話は、教室前方に設置した教員のタブレットを使用
【コミュニケーション】 ・1年生への質問項目を平易（Yes, No 疑問文）な英文へ変更 ・英語を話すスピードの調整
【パワーポイントなど教材について】 ・語彙と文を平易なものへ修正 ・ウクライナ文化特有の単語はカタカナ表記追加 ・トピックは、歴史的建造物、伝統文化、食文化に加えて、産業、自然を追加し総合的内容へ ・リュウボブ先生自身の日本滞在の体験を追加 ・双方の国の結びつきを示す内容を追加（ウクライナの日本庭園） ・時間が不足した時は、残りの PDF 資料の大まかな内容のみを最後のページまで紹介 ・多数の動画から視聴させる動画を選択

4. 成果と課題

授業後のアンケート結果（表3参照）から、授業が効果的であったことが分かった。

表3 オンライン国際交流へのアンケート

質問項目	A	B	合計
ウクライナ文化に興味を持った	85.2	13.0	98.2
日本の文化と比較して考えた	78.8	17.8	96.6
また遠隔オンライン授業をしたい	84.0	13.4	97.4

※A 当てはまる B やや当てはまる

生徒の授業への参加様子と英作文から得られた成果をまとめる。約半数以上の生徒が、海外とのオンライン授業が初めての経験であった。英語で話すことに対し恥ずかしさを感じる生徒も見られたが、リュウボブ先生の明るい人柄から、どのクラスの生徒も楽しく授業に取り組ん

でいた。

次に、授業目標であった、異文化への受容態度と自文化への気付きについて述べたい。生徒の感想では、初めて触れるウクライナの、ヴァレニキ（餃子）、ボルシチなどの食文化、ヴィシヴァンカ（刺繍を施したシャツ）の祭り、民芸品のピサンカなどに強い関心が寄せられた。また、リュウボブ先生の日本旅行や日本文化への言及から、先生への親しみを感じ異文化への受容態度が高まった。ところが、自文化への気付きについて課題が残った。ウクライナ文化の紹介の後に、それに相当する日本の「国旗の色は?」「首都は?」などの一問一答の単純な質問に答えることができた。しかし、「日本で神聖な食べ物という?」「日本の伝統的な踊りは?」「日本では客人をもてなす時に何を?」など、自文化を相対化し多角的な視野で考えることを必要とする問いへの反応は鈍かった。このことは、日常生活での何気ない習慣や年中行事など、文化や慣習について授業で取り上げ、他文化の視点から自文化を考えさせる異文化交流の必要性を示している。

英語のリスニングについては、外国語指導助手以外の外国人教員が話す英語を聞きとることができ、英語学習への自信につながった生徒が多く見られた。また、アメリカ英語に慣れ親しんでいるため、英語が母語ではない人と、自分たちと同じ言語環境で話される英語に触れて、英語の国際共通語としての価値を見出していた。

手紙のやりとりの活動では、リュウボブ先生へ質問を考えることは、自分の関心にしたがって容易に英作文をすることができた。ところが、リュウボブ先生の返信に対して、さらに返信する活動は難易度が上がる。そこで、既知の内容をもとにして、目的・場面・状況を意識させて、リュウボブ先生に手紙を書く練習をさせた。

最後に、海外の教員を活用する有用性について述べる。最初のオンラインでの交流は、教員主導での交流を推奨したい。それは、双方の教員が、学生の英語力、英語の発音の聞きやすさ、興味や関心、顔と名前の一致など、次に生徒同士がオンラインで接触する際に必要な事前情報を得ることができるからである。事前にオンライン交流に不慣れで遠慮がちな日本の中学生の姿を理解してもらうことは、有効な策と言えるであろう。

最後に、今回の授業の直接のテーマではないが、ウクライナの社会情勢から平和の大切さを考えさせる副次的な効果もあった。

謝辞 本稿は、「中学校の英語の授業で国際共修の理論の確立を図る ―グローバルシチズンを目指して―」JSPS KAKENHI Grant Number JP23H05049の成果をまとめたものである。

知力と行動力を育む探究的な英語の授業

仙台市立上杉山中学校 若生深雪

中学校3年生に教科等横断でSDGsの授業を行なった。その中から今回は、iEARNの「Gomi on Earth」プロジェクトへの参加、映画『マイクロプラスチックストーリー ―ぼくらの2030年―』の視聴、1週間の家庭ごみの調査から環境をテーマに行なった探究的学習を取り上げる。授業の成果は、生徒に地球市民としての自覚を育むことができた。

マイクロプラスチック SDGs シティズンシップ 探究的学習

1. はじめに

知識習得に偏った日本の教育を改め、市民教育を行い、将来積極的に社会参画するような資質・能力を育成すべきという議論が数多くある。例えば、内閣府(2021)と国立青少年教育振興機構(2021)は、日本の若者は社会参加への意識が低い状況を報告している。Schulz et al., (2018)は、この課題の解決策の一つは教育にあり、学校教育が市民性の育成に大きな役割を果たすことを、24ヶ国の若者95,000人以上のデータの検証結果から述べている。そこで、生徒を社会へ積極的に参加する意識を高めるような授業実践を試みることにした。

2. 授業目標と方法

2-1 目的

社会参画への意識を高めるために、以下の3点を授業目標とした。

- (1) 世界に共通する深刻な環境問題に気付かせる。
- (2) 自分事として地球規模の問題を考えさせる。
- (3) 実際の社会参画を目指し行動化を促す。

2-2 方法

2-1の3つの目標を達成させるため、目標項目ごとに具体的な学習活動を考え(表1参照)、課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現の順に探究的学習を展開した。



図1 家庭プラスチックゴミ調査のまとめ

表1 目標を達成させるための学習活動

(1) 地球規模の課題への気付き ① 「マイクロプラスチックストーリー ―ぼくらの2030年―」を視聴し、一連のゴミ問題を包括的に知る
(2) 自分事としての課題への取組み ① 身近にあり見過ごされがちな環境問題(ゴミ問題)を題材として取り上げる ② iEARNの「Gomi on Earth」のプラットフォームで海外の生徒とつながる ③ 視聴した映画を制作した監督の思いを座談会で深く知る
(3) 実際に行動化できる社会参画の力 ① 1週間の家庭のプラスチックゴミ排出量の調査を基に解決策を考える ② 調査結果を学年内で共有し議論し合う

2-3 評価

振り返りシートへの記述内容、調査結果をまとめたスライドの内容、OECDが作成した2018年のPISA global competenceのアンケート(筆者が日本語に翻訳)を、授業の成果を測定し検証する材料とした。

3. 活動内容

2022年2月、仙台市内の公立中学校の3年生約150人を対象に、英語の授業で、SDGs学習の総まとめとして、ゴミ問題のマイクロプラスチックについて学習した。生徒はこれまでに、道徳、社会、理科、総合的な学習の時間で、SDGsの目標となる、(1)平和と公正、(2)住み続けられるまちづくり、(3)海や陸の豊かさをまもろう、(4)人や国の不平等をなくそう、について様々な教科で学習してきた。今回は、英語科で環境問題を扱った7時間の授業実践を報告する(表2参照)。

表 2 授業の実践経過

時間	活動項目	具体的内容
1	・筆者作成のパワーポイントで事前学習 ・「Gomi on Earth」への投稿の内容(アメリカのコロラド小学生が投稿)を詳しくネット検索する	・アメリカの生徒が投稿したプラゴミについて、インターネットで検索させる。プラゴミの内容から現地の生活を想像させ、以後の活動への意欲を高める
2	・英語『マイクロプラスティックーぼくらが作る 2030 年ー』を視聴(前半)	・字幕版(前半)と日本語吹き替え(後半)の両方を鑑賞させ、オーディションで吹き替え声優となった日本の子どもたちの活躍から、連帯感を育ませる
3	・同上の映画の(後半)の視聴 ・映画の感想文と佐竹敦子監督への質問作成	
4	・家庭のプラスチックごみの調査結果とその考察をスライドにまとめる	・調査結果のデータと写真、感想の3つを含めさせた課題を作成させ、ゴミ問題を自分事にさせる
5	・「Gomi on Earth」のプラットフォームで、アメリカのコロラドの小学生とのやりとりをする	・ゴミ問題に関心を持つ海外の生徒と意見を共有させる
6	・代表生徒による調査結果発表会	・学年発表会で、代表生徒による成果を聞き、意見交換させて視野を広げさせる
7	・「マイクロプラスティックーぼくらが作る 2030 年ー」を監督した、ニューヨーク在住の佐竹敦子さんとのオンライン座談会	・オンラインで、監督の作品に込めた思いを聞き、環境問題を一層自分事とさせる

4. 成果と課題

4-1 成果

次に成果をまとめる。まず、教科が連携して授業を行なったのは、教科の特性や特有の視点から、同じ目標を多角的に学習させたので、深い学びにつながったと感じる。

次に、アンケート等の結果から学習効果を述べる。学習前は、マイクロプラスティックについてそれが何であるかを、「知っている」生徒が約 2 割、「聞いたことはある」が約 6 割、「知らない」が約 2 割の認識状態であった。そして、授業の終了時点での状況を、PISA のアンケート(4 件法: 1 とてもそう思う、2 そう思う、3 そう思わない、4 全くそう思わない)で測った。結果は、「私は自分を世界市民だと思っている」の 1 と 2 に回答した割合は 91.5% (OECD 加盟国等の平均は 76.2%) で、「世界の問題に対して、私に何かできるはずだ」の 1 と 2 に回答した割合は、84.5% (OECD 加盟国等の平均は 57.5%) で、実践校の結果は、いずれも 66 ヶ国

の参加国の中で一番高いポイントを示し注目に値する。また、他国より高いポイントであったのは、他者との関係性を育む要素が含まれるアンケート項目という傾向がつかめた。

授業後、多くの生徒は自分の出すゴミや家庭ゴミに関心を持ち、作文では、「自分もできることからしようと思った」「自分でできる事が知らなかったのもあり勉強になった」「実際に活動することが大切だと思った」などと振り返り、何等かの行動化を目指す姿が見られた。

2-2 課題と今後の方向性

iEARN のプラットフォームで、アメリカのコロラド州の児童と、やりとりをすることができた。しかし双方のプロジェクトの調査結果を、オンライン等で共有し合う段階まで進展させることができなかった。今後は、日本の学年度が 4 月始まりであることと、交流相手の学年度の始まりの違いを考慮し、1 年先を見通した交流計画を立て、海外の生徒と互恵的な協働学習に発展させたい。

PISA のアンケート調査で大きな成果が見られた。しかし、事前のアンケートを実施しなかったことから、実際の効果の伸長度を測ることができなかった。さらにアンケートからの成果は、「自分のすることは社会を変えることにつながる」「自分は地球市民である」というような価値観や心情面での評価が主で、実際に社会で行動化できるかどうかは、この質問項目の結果からは推測できない。しかしながら、文科省(2023)は、日本の子どもたちは、利他性、協働性、社会貢献意識など、人とのつながり・関係性に基づく協調的要素によって幸せを感じ成長していくと述べている。今回の実践成果からは、日本の教育で社会参画を高める際に実施する政治教育と人権教育は、協調的要素を含んだ市民教育によって人材育成が求められることが示唆される。

参考文献

- 国立青少年教育振興機構(2021)「高校生の社会参加に関する意識調査報告書」.
内閣府(2021)「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」.
文科省(2023)「次期教育振興基本計画について(答申)」
Schulz et al., (2018). Becoming citizen in a changing world. *IEA International Civic and Citizenship Education Study 2016 International Report*.

謝辞 本稿は、「中学校の英語の授業で国際共修の理論の確立を図るーグローバルシチズンを目指してー」JSPS KAKENHI Grant Number JP23H05049の成果をまとめたものである。

高校実践編



“Girl Rising Project”の実践

— 「女性の人権」と「質の高い教育」を守るために—

啓明学園中学校高等学校 関根 真理

持続可能な開発目標（SDGs）には、「目標4 質の高い教育」と「目標5 ジェンダー平等」が含まれている。世界の全ての女子が質の高い教育を受けることが出来れば、女子の周りに良い変化が起こり、社会を変えていく原動力に繋がっていくことをこのプロジェクトを通して学ぶことが可能である。

質の高い教育 女性の人権 国際協働学習 課題発見 課題解決

1. はじめに

このプロジェクトを開始した理由は、筆者がマララ・ユスフザイさんの勇気ある行動に共感し、新しいプロジェクトとして女子教育の大切さについて協働学習をしたいと iEARN の Teachers Forum に投稿したのが始まりである。2014 年度より、iEARN の Ed Gragert 氏と共に、Girl Rising のファシリテーターとなり、「女子教育の大切さ」を学ぶための活動をしている。

2. 目的と方法

Girl Rising プロジェクトは、開発途上国で女子がどのような境遇にあり、その中で教育を受けた女子がどのように変化し、周りに影響を与えることが出来るかを学ぶ。さらに、他国の生徒と協働学習することにより、自国や他国に存在するジェンダー問題を発見し、課題を解決するために立ち上がり、アクションを起こすことを目的としている。

参加するには、9ヶ国（カンボジア、ハイチ、ネパール、エジプト、エチオピア、インド、ペルー、シエラレオネ、アフガニスタン）の少女たちのDVD(映像)またはYoutubeで視聴することから始める。DVDは、ファシリテーターのEd Gragert氏に連絡を取るによって入手可能である。どの国の映像をどのぐらいの期間費やして学習するかは、担当教員の判断による。ストーリーの内容と問題提起は、国によってそれぞれ内容が異なるので、教員は事前に全てのストーリーを視聴し、扱う生徒の年齢や内容によってテーマを

選択する必要がある。その後、生徒達はストーリーを視聴し、フォルダーの中に挙げられている質問に答える。

勤務校では、フォーラムに自分の意見や感想を投稿する前に、授業でストーリーで紹介されている各国の課題や情勢について事前に話し合う時間を設けている。さらに、問題解決する為にどうしたら良いかをまず自分たちで模索する。

フォーラムでは、他国の生徒とお互いに気づいたこと、学んだことを共有し、協働学習をすることによって、理解を深めていく。生徒同士はフォーラムへの投稿だけでなく、写真やビデオレターの交換などが可能である。互いの時間が合えばZoomなどのオンライン会議を実施することも可能である。

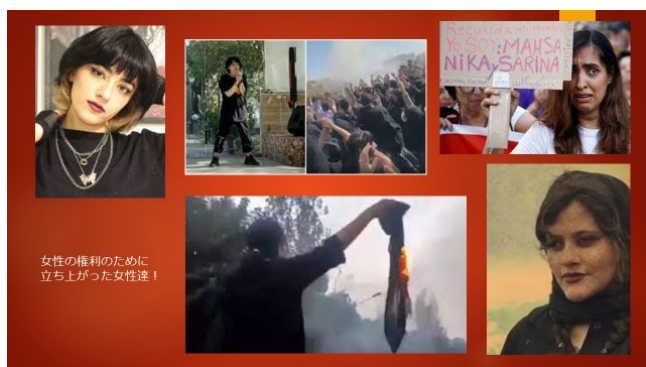
3. 活動内容

2022年度は、高校3年生選択授業「国際理解」に、21名の生徒がGirl Risingプロジェクトに参加した。勤務校は帰国子女受け入れ校であり、英語教育が盛んである。特に今年度は外国籍の生徒が半数近くいたため、国際色がとても豊かだった。そのため多くの生徒が海外在住歴があり、英語が堪能であるため、他国の生徒とのコミュニケーションはスムーズに行われた。

今年度はインドとイランの高校生と協働学習をした。Girl Risingのストーリーから、女性であるがために現在でも人権を侵害されるような文化や風習があることを知り、この問題を解決するために自国の人々や周りの国々がどのように接して

いくべきかを Collaboration Center で意見を交換し討議した。

7月には、協働学習をしているイランの女子生徒とオンラインで交流した。その時にイランでは、政府が女性に頭をカバーする「ヒジャブ」を強いている実情を知った。また、「ヒジャブ」を身につけることは、ただ頭をカバーするという目的ではなく、女性の発言や行動をも抑制する意図があることを知った。その後もイランの生徒や教員と連絡を取り続けたが、9月にはイランで、ヒジャブ着用が不適切だという理由で命を落としている女性がいること、またオンライン交流した生徒の中には危険をおかして抗議デモに参加していることも知った。



《イランで起きている人権問題》

以下にイランの生徒の思いと日本の生徒の感想の一部を紹介する。

○イランの生徒の思い

The worthiest thing which we can do, is rectifying the incorrect thoughts which we or our families have about girls and their education and their rights, because informing ourselves is the best and fastest way to acquire the human rights.

○生徒の感想

イランの同年齢の女性達が自分たちの人権を得るために闘っていることを知り、ショックだった。他国で起きていることを人ごとだと思わず、国境を越えて他者に寄り添うことの大切さを学んだ。

イランの生徒は、女性一人ひとりが人権を得るために闘うことが大切だと多くの生徒がはっきり語っていた。この問題を解決するには、諦めずに自分たちが出来ることからアクションを起こすこ

とが大切だと伝えた。このように、世界で起きていることを実際に現地の人々に聞き、意見交換できることは、とても意味のあることである。また、この状況を聞いた上で、他国ではどのようなアクションを起こしているか、そして自分たちには何が出来るかを模索し始めた。

2 学期は、学んだことをアウトプットするツールとして「グループポエム」を昨年と同様行った。この活動は 5, 6 人がグループとなり、英語と日本語を用いて、協力して一つのポエムを創作する活動である。以下は、作品の一部である。

**I don't want to be alive
A chance will never come to me.
I'm like a bird in a cage.
I cannot fly with these chains
Give me freedom
Send me freedom**

**I want to be alive.
A Chance will always come to me.
I'm like a bird in nature, because
I have a bright future ahead of me.
I have freedom
I am freedom**

死にたい
チャンスは私の元には訪れない
私はかごの中の鳥
くさがりが重くて飛べない
自由になりたい

生きたい
チャンスは私がつかみに行く
私はカゴから飛び出せる。
だって
自由には明るい未来がまっているから。
自由になれる

これらの生徒の作品は、Collaboration Center に投稿して、協働学習をしている他国の教員と生徒に共有した。

このプロジェクトの最後の成果として、2 年から動画を作成している。授業を通して学んだ事と自分たちに出来ることは何かを表現活動に盛り込んだ。生徒達は、Girl Rising の少女達の住んでいる場所である「カンボジア」、「ネパール」、

「アフガニスタン」および「難民キャンプ Dadaab」と今年度は「ミャンマー」もテーマに加え、授業を通して学んだこと、そして他者に伝えたいメッセージを入れて、それぞれ約4分の動画を作成した。生徒たちは、それぞれのグループが創意工夫して動画作りに専念していた。以下はそれぞれの動画のワンシーンである。



“Because we are the world citizens”



“Do not forget about Myanmar”
《生徒が作成した動画のシーン》

これらの動画は、3学期に勤務校の英語・外国語スピーチコンテストで紹介し、高校3年生から大切なメッセージとして全校生に伝えることが出来た。また、iEARNのCollaboration Centerに投稿し、協働学習をしている他国の教員と生徒にも共有することが出来た。

Girl Risingプロジェクトを通して、生徒達は、国は異なっても共通して大切にしなければいけない人権と質の高い教育がいかに大切であるかを確認することが出来た。また、世界の現状を広い視点で学び、生の声を聞くことの大切さも知った。さらに、学んだことを自分の内に留めておく

だけでなく、周りの人々にも知らせることの大切さにも気づくことができた。

5 成果と課題

○成果

Girl Risingのムーブメントは、プロジェクトに参加する生徒たちが力強い地球市民になるように、共に学び合い、励まし合う仲間を生み出すきっかけとなっている。遠隔授業を通して、各国の生徒は同年齢で同じ地球に生きる者として、SDGs「持続可能な開発目標」の「質の高い教育」と「ジェンダー平等の実現」に対して積極的に関わっていく意識を再確認することが出来た。

○課題

プロジェクトをスムーズに行うためにはいくつかの課題がある。始めに、iEARN Collaboration Centerの使い方が昨年度から変更したために、多くの教員がまだ使い方が理解できず生徒を登録し、協働学習を進めることが出来なくなっている現状がある。以前は、もっと多くの国々の教員と生徒がプロジェクトに参加して意見を交換することができた。今年度は、もう一人のファシリテーターであるEd氏と以前このプロジェクトに参加した教師にメールを送り、新しいプラットフォームに加わるように促したが、まだその効果があまり現れていない。今後は、他のプロジェクトのファシリテーターとも連絡をとり、連携をとることも必要だと考えている。

次に、他のプロジェクトでも同様な問題だが、他国の生徒との協働学習を充実させるためには、相手校とのスケジュール調整が要となる。相手校の教員とはプロジェクトを開始する時期や内容について打ち合わせをしておく必要がある。

iEARNだけでなく、WhatsAppやMessengerなどのSNSを利用して、担当教諭とコミュニケーションを密にとる必要がある。

さらに、生徒同士の学びを深めるためには、フォーラム上でお互いの感想を述べるだけでなく、自国の授業で学んだこと、他の生徒の意見に対しての批判的思考、見えてきた課題、そしてそれらの課題に対する解決策の提案などが出来る力を生徒が養うことができるように、教師は日々の授業で工夫をすることが求められる。

2022 年 Machinto のプロジェクトに参加して

～異なる文化に暮らす人々と平和への願いを共有する～

山口県立高森高等学校 赤松敦子

国際理解教育、平和教育の一環としてこのプロジェクトに長年参加してきたが、これまでは英語表現での活動が多かった。2022 年度は、英語コミュニケーションの1年生のクラスで、教科書の戦争体験を読んで、発展学習として戦争体験の証言、戦争以外での被曝被害についての証言を読み、平和メッセージを書く活動に取り組んだ。

国際理解教育 平和教育 空襲体験 世界のヒバクシャ タブレット

1. はじめに

タブレットを日常的に使う機会が増え、生徒も使い方に慣れてきたこともあり、以前よりも生徒たちが、学んだことを使って、異文化の中で暮らしているさまざまな人々と手軽に交流できるようになった。手紙に写真や音楽のリンクを貼ったり、自分で音読した音声を付けてたりして、様々な情報を含めて交流できるようになった。世界は戦争やパンデミック等で残酷さと悲しみに溢れているが、生徒たちが世界中の様々な人々と日常的に交流することで、心を通わせることができる機会は昔よりも増えてきている。希望を持って、世界中の人々が草の根の交流を続けることが、少しずつでも平和に近づく道だと信じたい。

2. 目的と方法

2-1 目的実践で明らかにしたいこと

異なる文化に暮らす人々と平和への願いを共有し、戦争など悲惨な状況にある生徒を励ます活動に参加する。

2-2 方法

1) 実施計画案

教科名；英語コミュニケーションⅠ プロジェクトの活動時間は Google Classroom で課題として取り組んだ活動が主体なので、授業中はその活動内容紹介と作品を作り始める導入の10分から15分程度。

2) 内容項目

①自己紹介②教科書に載っているシリア内戦の現状についてのニュース動画を見て質問に答える。③世界の紛争地域を調べて地図に書き込む（他の生徒と英語で情報交換）④地元の空襲の資料を読んだ感想⑤原爆の被爆者の証言を読んだ感想⑥平和のためのメッセージ⑦外国の生徒の平和のメッセージを読んだ感想

3) 評価方法

教科書：Landmark English Communication

I (啓林館)

Lesson 7 Dear World: Bana's War (シリア内戦の現地の状況を発信した少女)

Lesson 8 The Best Education to Everyone, Everywhere (教育 NPO を立ち上げた大学生)

3 観点：知識・技能；戦争や教育の不平等の現状について学ぶ/思考・判断・表現；困難を克服するために様々なメッセージを発信して多くの人と協力する例に習って自分のメッセージを発信する/主体的に学習に取り組む態度；課題として、資料を読み自分で内容をまとめ、自分の考えを表現する 5 領域：書く（メッセージ・調べ学習スライド）

3. 活動内容

3-1 具体的な実施内容 1

①交流校 アメリカ合衆国オハイオ州ミンスター高校 担当：Karen Clarke 先生

②資料紹介 地元の空襲の資料（岩国原爆と戦争展 岩国空襲のウェブサイト）、原爆の被爆者の証言（中国新聞平和教育特別号「まなぼうヒロシマ」）、「世界のヒバクシャ」（中国新聞の記事で Peace Media Center のサイトに公開されている）を読んで感想を書く。

③課題説明 （Google Classroom に掲載した記述の一部）

戦争や平和についていろいろな資料を読んだと思います。それらを読んでみてどう思いましたか？平和についての詩・童話・短歌・歌など形式は自由でよいので、平和について世界のいろいろな国の同世代の生徒の皆さんに伝えたいことを表現しましょう。

参考資料としてインドの生徒さんが書いた平和についての詩と、「まちゃんと」という原爆で亡くなった女の子の童話を読んでみてください。

（「まちゃんと」は広島の方言で「もう少し」を意味する「もうちと」を若い女の子の言葉で

表現したものです) 短いお話でも平和の大事さがよくわかることで有名な絵本です。

④本校生徒作品例： ブラジルのゴイアニアで起きたセシウム汚染についての中国新聞の記事を読んで、その状況をもとにして A4 で 12 ページの短編小説"Shelley"を書いた生徒の作品の抜粋。Shelley という女性が病院の跡地から盗まれて廃品回収に出されたセシウムの粉を触ってしまい、放射能汚染の被害に遭って、夫に疎まれて孤独に亡くなる様子を描いている。放射能汚染の身体だけでなく心に与える悲惨な被害を訴えている。

In her husband's eyes, his beloved's porcelain-like skin was red and black, her pretty cheeks were gone, her hair, which he liked more than any treasure, had lost its luster and fell out so much that there was no shadow of her previous self on her face wherever he looked. A swollen, bone-visible hand loomed over him. Her colorless lips opened.

Then he shouted,

"You betrayed me. Well, well! I don't need you anymore if you no longer have that beautiful face! You are worthless without that beauty."

"I thought you would look at me the same way... You were my last hope..."

The TV played breaking news. The screen changed and a list of cesium-exposed people with their faces were shown.

The husband realized. His wife could no longer live in this society. His wife no longer has friends. Even if they leave this city, there is nowhere to belong.

She will never have a family. What a strange thing. Tears were pouring down the face of something that was his wife, but they had nothing to do with Claude.

My boast will now be the biggest stain in my life.

中略

Shelley slept again today. Her physical condition and energy to live have decreased, and she began to dream more often. It's a warm dream. Parents who she can't even remember their faces anymore. Her cheerful puppy. Darling. Everyone in the Miller family. Everyone she loved. And when she woke up to reality, it was a festival outside.

"Oh, today is the carnival."

Suddenly, she saw the lace of the window that should not have been opened waving with a breeze. White light poured in. Everyone she loved was waving to her.

"Shelley, let's play over here!"

I regret that day. I should have stopped touching the powder that day. Everyone, I have wanted to see you all so much.

One day, Shelley fell asleep dreaming of a happy dream that never faded. It was a beautiful day on a winter's dawn.

⑤交流相手校からの返事

・本校の生徒の平和メッセージに対するミンスター高校の生徒の感想：

A. Hello - Thank you for sharing your prayers for peace. All the nations of the world need to come together for peace and forgiveness. We must share messages of peace to remain hopeful for the future of our world. Best regards, Megan S, Spanish 2 student at Minster High School, Ohio, USA

B. Hello students from Japan, How are you? Thank you for your messages of peace. Your messages are emotional and powerful. They inspire us to promote peace. We appreciate your enthusiasm, the deep significance of your messages, the use of English vocabulary, the different perspectives of peace, the ideas of what we can do, and the opportunity to learn about the history of your country. Happy New Year! From your Machinto Project learning partners at Minster High School, Ohio, United States

・ミンスター高校の担当の Karen Clarke 先生からの感想

I have posted two short letters that my older students wrote together after discussing all the messages shared by your students. They were impressed by the seriousness of some of the messages and by many students' heartfelt desire for children to know joy and happiness rather than war. My students had not thought about how differently they might view war and peace if they had grown up in a nation that had suffered bombings such as Japan did. This intercultural exchange is a learning opportunity that no textbook could ever offer.

⑥本校の生徒のこの交流についての感想

A. 日本が負った戦争の傷は知っているけれど、外国で今でも起きている紛争などについては知らないことが多かったから知れてよかったです。また、世界のことを知ったり考えたり、詩を作ったりすることが世界をよりよくする一歩になったらいいと思います。

B. ・戦争が起きている今、出来ることは無いと思っていたけれど自分の作った詩で自分も外国の人も平和について何ができるか考えられたと思いました。

・学生だからこそその視点で戦争をどう受け止

めて自分がどうしたいのかを書けたと思います。

4. 成果と課題

○成果

- ・外国の生徒の平和メッセージを読んで、平和への思いに共感することができた。
 - ・校内でも、Google Classroom を通して、平和メッセージを共有することができた。
- 今年度の国際交流で学んだことをスピーチにまとめた生徒の原稿の抜粋：

Things that Can Be Acquired through International Exchange

I’ ll explain the merits by classifying them into five categories.

First, we can learn about different cultures other than Japanese.

Second, we can learn common thoughts or ways of thinking among people in many countries. I learned that American students have thoughts that peace is important and Taiwanese students think that they have to solve the environmental issues, the same as us. I’m impressed that students around the world have same thoughts even if we cross borders. This will strengthen the world’s unity.

Third, we can further develop the ability to express our opinions.

Fourth, we can develop our English composition skills.

Finally, we can rediscover the good points of Japan.

There are a lot of merits of international exchange like these. I think we can discover the attractions of our own countries as well as foreign countries. In addition, we can develop various skills by doing it. That will “kill two birds with one stone,” won’t it? The international exchange acts as a bridge to improve Japan’s relations with other countries. It is essential to taking steps toward peace. I hope that you feel that it was good to interact with foreign students just a little bit after listening to my speech.

○課題

- ・交流校を見つけるのに時間がかかった。参加する予定だった学校が参加できなくなったこともあった。

大学実践編

(含 Youth Project)

Holiday Card Exchange プロジェクト

～ジェイアーン Youth プロジェクトにおける学生の学び～

実践女子大学短期大学部 栗田 智子

世界の子ども達がホリデーカードを交換し合うことにより、自国と他国の文化を相互に学び、国際的視野を養い、世界の人々の多様性を学ぶことを目的とした Holiday Card Exchange プロジェクトを、Youth プロジェクトとして、実践女子大学短期大学部「オープン講座③」の受講生13名が、渋谷区立常磐松小学校放課後クラブで、3年ぶりの対面形式でワークショップを行った。学生対象のルーブリック調査により、国際的視野、協働力、行動力の項目で学生に成長が見られた。学生たちは、能動的な姿勢、情報共有、自分の意見を積極的に発言することの大切さを学んだという声が寄せられた。

国際的視野

協働力

行動力

異文化理解

1. はじめに

2016年度から、実践女子大学短期大学部は、Holiday Card Exchange Project (HCEP)のワークショップを学生が企画し開催してきた。2022年度は、短期大学部「オープン講座③」の受講生13名（短大生7名、大学生6名）が、教育プロジェクト「グローバルPBLファシリテーター養成の取り組み」の一環として大学から補助を受け、対面によるワークショップを渋谷区立常磐松小学校放課後クラブで行った。2022年度に常磐松小学校放課後クラブが本学との関係を「地域連携事業」として渋谷区教育委員会に届け出たことで連携が深まった。

2. 目的と方法

2-1 目的

ジェイアーン Youth プロジェクトに参加した短大生・大学生が、この国際協働学習のワークショップの企画運営を通じて、国際的視野を養い、協働する力、行動する力の向上を図ることができたのか、また、学生にどのような成長と学びが見られたかを明らかにし、次年度の活動に活かしたい。

2-2 方法

1) 実施計画案

オープン講座③グローバル&プロジェクトスタディ（1、2年後期1単位）

【プロジェクトの活動時間：100分×14コマ】
世界の子どもたちがホリデーカードの交換を通して互いの文化を学び合い、国際的視野と世界の人々の多様性を学ぶことを目的として、

Holiday Card Exchange Project のワークショップを企画し、渋谷区立常磐松小学校放課後クラブの子供たちを対象に、Holiday Card Exchange プロジェクトのワークショップ「世界のお友達とホリデーカードを交換しよう！～Holiday Card Exchange Project 2020」を学生が行う。交流国は、スロベニア、台湾、ベラルーシ、日本。

2) 内容項目

国際協働学習に必要な知識を学び、それを活かしながら、プロジェクト活動を行なうシラバスを作成した。

第1週 オリエンテーション 異文化理解 1:文化とは

第2週 異文化理解 2:違いに気づく・差別を考える

第3週 グローバルプロジェクト 1 アイアーンについて

第4週 グローバルプロジェクト 2 交流国について

第5週 異文化理解 3:世界の価値観・異文化受容

第6週 グローバルプロジェクト 3 異文化理解教材作成

第7週 グローバルプロジェクト 4 小学生向けワークショップ 1

第8週 SDGs の基本

第9週 SDGs 日本の課題^[1]

第10週 SDGs と世界^[1]

第11週 デジタル・シティズンシップと国際協働

第12週 グローバルプロジェクト 5 海外から学ぶ

第13週 グローバルプロジェクト6 小学生向けワークショップ2

第14週 まとめと成長報告

3) 評価方法

ループリック（実践女子大学短期大学部大塚みさ教授作成）により、短大生・大学生を対象に、以下の6項目について事前、中間、事後の3回に渡り、1～5のレベルで自己評価をしてもらった。

【国際的視野-1】SDGsを通してグローバルな課題について考える

【国際的視野-2】異文化理解を深めるプロジェクト(HCEP)の企画運営を通して、国際的な視野を広げる

【協働力-1】他者と協働する

【協働力-2】プロジェクト(HCEP)のワークショップ参加者（児童）と円滑なコミュニケーションをとる

【行動力-1】目標を設定し、計画及び企画を立案・実行する

【行動力-2】課題を発見し、問題解決につなげる

さらに、ワークショップ後の振り返りのレポートも評価の対象とした。

3. 活動内容

3-1 ワークショップ実施内容

学生が、常磐松小学校放課後クラブへ行き、ワークショップを3回実施した。

- 第1回ワークショップ（2022年10月28日）では、カードの交換国の紹介を目的とし、クイズや手遊びを入れたワークショップを実施した。
- 第2回ワークショップ（2022年11月25日）では、子どもたちがカードを作るために必要な折り紙などの材料、英語や外国語の例文などの情報を準備し、子どもたちに寄り添いながらカード作成をサポートした。
- 第3回ワークショップ（2023年1月6日）では海外からのカード鑑賞と獅子舞鑑賞を行なった。事前に獅子舞の演者さんと学生たちがzoomで打ち合わせをして企画した。海外から届いたカードを鑑賞しやすくするために、国別のポスターを作った。



図1 第1回ワークショップの様子

3-2 授業の実施内容

授業では、3グループに分かれ、グループワーク中心で、教員は必要な情報を与えることと議論が深まるようファシリテーターに徹した。学生が、情報をもとに考え、判断し、必要なことは教員にリクエストするという形をとった。ManabaというLMSを使い、学生と教員は、報告、連絡、相談を行い、クラス全体で情報共有した。

4 成果と課題

○成果

ループリックでは、表1の通り、6項目で、学生が大きな成長があった。

項 目	事前	中間	事後
【国際的視野-1】	2.17	2.15	3.31
【国際的視野-2】	1.75	3.92	4.31
【協働力-1】	2.50	3.77	4.38
【協働力-2】	2.17	3.92	4.15
【行動力-1】	2.83	3.77	4.00
【行動力-2】	2.75	3.92	4.23

表1 ループリック結果（大塚みさ教授作成）

学生の振り返りから、能動的な姿勢、情報共有、自分の意見を積極的に発言することの大切さを学んだことが伺えた。

「私はチームで物事に取り組む時、沢山情報共有して能動的に動く事がとても大事だという事を学びました。」「オープン講座3は自由度が高い授業で、私たち学生自らが情報を発信し合い、話し合いをしていくという能動的な姿勢が出来たと思われます。」「協力・連携することの大切さを学ぶことができた。自分の役割のみでなく、全員が自分以外のこともこなせるようにしておく必要があると実感した。」「このワークショップで思いついたアイデアや考えは積極的に提案することを心がけた。これは私にとっては大きな成長で、以前までは反対されたらどうしようとネガティブになってできなかったことなので成長できた点だと思う。」

○課題

国際的視野の項目も成長が見られたものの、カードのやりとりだけの交流のため、深い海外との交流体験ができると良いと思う。また、多様な他者と協働するプロジェクトにおいて、学生のセルフ・アドボカシーを育成する重要性を感じた。自分にとって大切なこと、必要なこと、欲しいものをしっかり声に出して主張し、自分の考えや気持ちを相手に伝えられる能力が必要であり、時に助けが必要な場合は、助けてくれる人を自分から見つけられることが必要である。

GOMI on EARTH Project Youth Facilitator 実践

-Mottainai Contest の経験を通して-

青山学院大学 岡田 麻唯

青山学院大学国際政治経済学部が、GOMI on EARTH プロジェクトの一環として、もったいないコンテストを企画した。2020年に活動をスタートしてから、これまで、海外の3つの学校とワークショップを行い、プラスチックごみの現状や削減のアイデアについて、共に考えてきた。今回は、海外の子どもたち同士の協働学習や主体性を促進することを目的とし、Mottainai Contestを実施した。

ユースプロジェクト 国際協働学習 Mottainai Contest ユースファシリテーター

1. はじめに

本学では、2020年から、GOMI on EARTH プロジェクトにて、大学生がユースファシリテーターとなり、子どもたちの国際協働学習を促進する活動を続けてきた。

具体的なこれまでの活動として、プラスチックごみ問題に関するビデオ発信やビデオ内で紹介した新聞紙エコボックスを作るワークショップなどを行った。ワークショップでは、台湾の中学生、インドの中高生、エジプトの小中学生と交流を行い、ユースファシリテーターである大学生は、それぞれの国によって、子どもたちの様子が異なることに気づきを得ていた。交流国への理解を深め、進め方や声かけの工夫が必要であることを学び、予測できないハプニングにも臨機応変に対応を行う力を身につけてきた。これらの経験は、大学生の異文化コミュニケーション能力の成長につながったと考える。

次の活動の目標として、GOMI 問題に興味関心を持ち、プロジェクトに参加している学校同士をつなげて、協働学習を行う機会を作ることであった。目標達成のための企画として、子どもたちが発表を行える場を設けるコンテストを実施した。

2. 目的と方法

2-1 目的

以下の4点を目的とする。

- ①ごみ問題に関心を持ち、専門知識を深める。
- ②複数の学校をつなげるグローバルリーダーとなり、ファシリテーターとしての経験を積む。
- ③異文化コミュニケーション力を高める。
- ④大学生同士の交流を深め、チームで協力することを学ぶ。

2-2 方法

1) 実施計画案

大学生のプロジェクトチームは、前回のワー

クショップ終了後、大学4年生が就職活動でチームから抜けたため、チームリーダーの交代と新しく大学1年生のメンバーが加わり、新たなチームとして進めていくことになった。活動は、週一回程度、2〜3時間、ZOOMにて話し合いを行った。

2) 内容項目

ワークショップ名を、“Mottainai Contest”とし、2日間（各回1時間程度）のZOOMでの交流を考案した。

参加募集は、コラボレーションセンターを通して行ったのと、前回のワークショップに参加した学校の先生に直接声をかけた。

内容は、①ユースファシリテーターの自己紹介や日本の紹介、参加者同士の交流を促すクイズやゲーム、②プラスチックごみ問題についての現状と解決策について発表を行うことであった。発表は、1グループ5分で行った。発表の参考となるよう、事前には、ユースファシリテーターが、5分間の発表を録画して、コラボレーションセンターに投稿を行った。プラスチックごみ削減のアイデアとして風呂敷を紹介する発表であった。本番では、各国の代表グループ（2〜3グループ）が順番に、スライドを用いて5分間の発表をした。発表後には、ユースファシリテーターからの感想や参加者同士がチャットを使ってコメントしあえるような時間も設けた。

3. 活動内容

3-1 具体的な実施内容（スケジュール）

2022年

11月 企画の話し合い①

（目的、企画候補出し）

12月 企画決定と具体的内容の詰め

2023 年

- 1 月 参加者募集のチラシ作り
- 2 月 参加者募集開始
コラボレーションセンターに投稿
- 4 月 コンテストの日程調整、コンテストで使用する資料作り
- 5 月 発表のための見本ビデオを作成
iEARN Virtual Project Exhibition にて発表
- 6 月 台本完成、リハーサル実施
エジプト、台湾、パキスタンとの
Mottainai Contest 実施

3-2 Mottainai Contest

エジプトの AlBashaer School、台湾の Jhengsing Junior High School、パキスタンの BVS Parsi High School が、合同で参加した。日本を含め、4 カ国での日程調整の結果、1 日のみの実施で ZOOM を行った。台湾の学校は、当日の ZOOM は先生のみが参加し、子どもたちの発表は、録画のビデオをみんなで見た。ZOOM では、はじめに、交流を目的としたゲームやクイズを行い、チャットを使用したやり取りが活発に行われた。その後、コンテストの流れや発表が終わったあとのコメントタイムなどの説明をし、各国の代表グループが順番に発表を行った。ユースファシリテーターも、子どもたちと同様に発表を行い、プラスチックごみ削減の取り組みとして、風呂敷文化の紹介と風呂敷の利用方法について提案した。

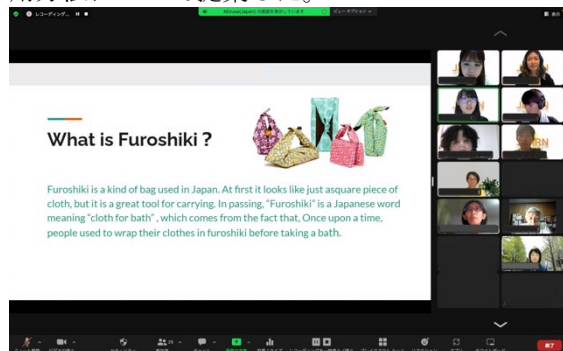


写真1 コンテストの発表の様子

4 成果と課題

○成果

前回行ったもったいないワークショップから、チームメンバーの入れ替わりが行われたが、経験メンバーと新しいメンバーが共に協力しながら、準備から運営まで、すべて学生たちで乗り切っていた。前回の課題としていた2カ国、3カ国間の交流の実現を達成できたことは、成果である。

今回の大学生チームの話し合いで、一番時間をかけていた部分は、自分たちの企画を通して、

子どもたちにどんなふうになってもらいたいか、何を伝えたいのかといった目的の部分であった。これまでの活動では、ワークショップで何を行うのかといった企画内容の話が中心であった。しかし、新たな企画を立案する上で、企画の内容は、目的を達成するためにあり、そもそも自分たちがなぜその企画をするのかといったことに着目するようになった。これは、過去に行った3カ国とのワークショップを経験し、ユースファシリテーターの役割を理解してきたことによる変化だと考える。ユースファシリテーターとして、子どもたちの主体性を引き出し、異なる国の子どもたち同士の交流を実現させたいという思いが芽生えていた。

このような背景から、これまでの一方的な発信や提案によるワークショップスタイルではなく、子どもたちが自ら発信できるよう、コンテスト形式での企画内容となった。また、複数の学校が参加することを前提に、チャット機能を使ったコメントのやり取りやスタンプの提案など、交流を深めてもらおうと工夫していた。

日本を含め、4カ国間の交流は、初めての試みであったため、想像ができなかった部分も多く、やってみてわかった課題も多く残ったが、これらの経験が、異文化を学ぶことに繋がり、ユースファシリテーターとしての次の課題が明確になっていた。

○課題

日時の調整が難しいこともあり、2日間で予定していた企画を、1日のみへと内容を調整した。そのため、相手校の生徒の様子がわからないまま本番を迎え、臨機応変に対応しなければならなかった場面があった。例えば、パキスタンからの参加者は全員カメラをOFFにしていたため、身振り手振りを使っただけのゲームは機能しなくなってしまった。事前に、発表のルールなどは伝えていたが、当日まで相手校の準備状況がわからず、不確定要素を多く残したまま、コンテスト当日となった。相手校の先生とZOOMミーティングを行うなどして、十分な事前確認を行う必要があることを学んだ。

2022 年度 Machinto Hiroshima/Nagasaki for Peace Project

～平和教育の実践「What is HEIWA?」ワークショップ～

青山学院大学 勝又恵理子

青山学院大学国際政治経済学部は、Machinto Hiroshima/Nagasaki for Peace プロジェクトに参加し、戦争と平和に関する資料と動画を英語で制作し、若い世代が平和を守ることの重要性と意義を国内外の生徒と共に考えるためのワークショップを開催した。参加者は相互に戦争と平和についての思いを語り合い、コミュニケーションを通じて戦争、原爆、平和について学ぶことができた。

異文化コミュニケーション 国際協働学習 ファシリテーション ワークショップ 平和教育

1. はじめに

青山学院大学国際政治経済学部のユース・ファシリテーターたちは、ジェイアーン Youth Project の活動として、2022 年から Machinto Hiroshima/Nagasaki for Peace プロジェクトに参加し、「What is HEIWA?」ワークショップを開始した。

この 1 年間は、大きく分けて二つの活動を行った。本プロジェクトの活動内容と iEARN の紹介、そしてワークショップの開催である。

まず、本校主催の「Aoyama Gakuin Global Week」と新入生オリエンテーションに参加し、本プロジェクトと iEARN の活動を紹介した。また、2 日間のオンラインワークショップ、「What is HEIWA?」を開催し、本学生がユース・ファシリテーターを務め国内と海外の生徒と交流を図った。

2. 目的と方法

2-1 目的

本プロジェクトは学生たちがユース・ファシリテーターとなり、ICT とネットワークを活用して、日本を含めた世界の生徒たちと協働して、戦争と平和について共に学び、平和の大切さを考えることである。

具体的な活動内容としては、「What is HEIWA?」というワークショップを開催し、戦争・原爆についての絵本「まちんと」を通して、戦争や原爆、そして平和とは何かを考え、生徒同士の相互的なディスカッションを行う。最後には、参加者がポスターを作成し、視覚的なアウトプットを行い、交流を図る。

3. 活動内容

3-1 全体活動の内容

【2022 年】

6 月 ・新メンバー参加、活動内容の策定

- 7 月 ・ワークショップの準備と資料作成
- 8 月 ・Aoyama Gakuin Global Week の準備
- 9 月 ・Aoyama Gakuin Global Week イベントに参加
- 10 月 ・ワークショップの準備と資料作成
- 11 月 ・パレスチナの高校生を対象にワークショップ一回目を開催
 - ・第 37 回異文化コミュニケーション学会年次大会でポスター発表をした
- 12 月 ・パレスチナの高校生を対象にワークショップ二回目を開催
 - ・栃木県立真岡北稜高等学校福祉科の生徒を対象にワークショップを開催

【2023 年】

- 1 月 ・ワークショップの準備と資料作成
- 2 月 ・ワークショップの準備と資料作成
- 3 月 ・本学部の新一年生のオリエンテーションに参加し、活動を紹介

3-2 Aoyama Gakuin Global Week に参加

「Aoyama Gakuin Global Week」とは、2022 年 9 月 23 日から 10 月 2 日まで開催され、本校の国際精神を表す SDGs 関連の活動、教育、研究の取組みを推進し、可視化するイベントである。

同イベントの中で、2022 年 9 月 23 日（金）にオンラインで『「まちんと」から平和を考えるーMachinto -What is HEIWA (PEACE)?-』というタイトルで、活動を紹介した。

https://www.aoyamagakuin.jp/aggw/calender/2022/agu_3

このイベントでは、iEARN と Machinto プロジェクトについて紹介し、学生たちが作成した SDGs クイズが披露され、参加者と戦争と平和に関するディスカッションが行われた。このイベントによって、本校の学生たちは活動内容を知

ることができ、興味を持ってもらえる機会となった。

3-3 パレスチナの高校生とのオンライン交流

2022年11月18日（金）、パレスチナの高校生たちと一回目のオンライン交流が行われ、「What is HEIWA?」ワークショップを開催した。約20名が参加し、自己紹介の後に、原爆に関する説明が行われ、その後はポスター作成の仕方の説明がされた。最後には、生徒たちからの質問に答えた。

2022年12月3日（土）の二回目のワークショップには約20名が参加し、ポスターコンテストが開催された。事前に提出されたポスターが紹介され、各賞が発表された。

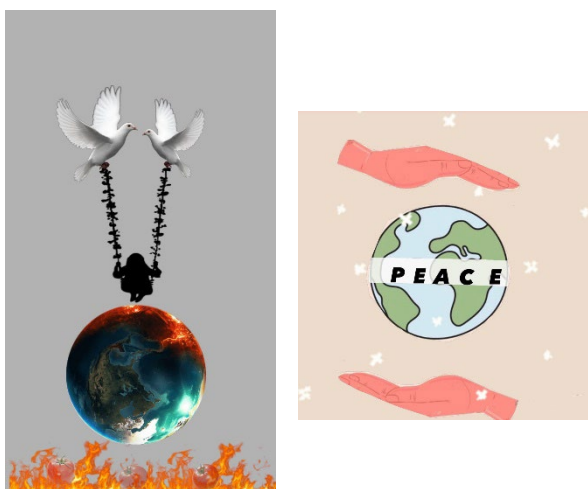


写真1 ポスターコンテストの作品2点

3-4 日本の高校生とのオンライン交流

2022年12月21日、栃木県立真岡北陵高校介護福祉科の1年生約30名が、Machintoプロジェクト「What is HEIWA?」ワークショップに参加し、平和についての学びを深めた。

ワークショップで、高校生たちは「平和のために自分たちができること」をグループで考え、英語の文章を作成し、発表した。ユース・ファシリテーターたちは、チャットを使ったやり取りや、文章例のスライドなどを通して、英語の文章作成をサポートした。

ユース・ファシリテーターたちは、生徒たちが戦争と平和について話し合えるように、ワークショップの準備をした。アイスブレイクのアクティビティーや、英語の資料作成などを行い、相手校の先生のサポート得ながら、生徒たちが学びたいことを考えて資料を作り、ワークショップを楽しんでもらえるように工夫をした。

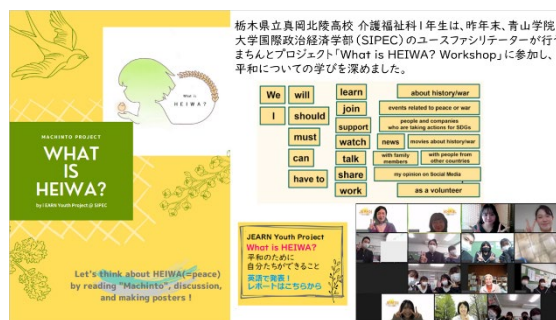


写真2 ワークショップの様子：
日本の高校生

4 成果と課題

本ワークショップを通して、参加者が戦争・原爆について、平和の定義、平和を維持するための方法について学ぶ機会を提供することができた。参加者はこのワークショップに参加した結果、以下のような成果が得られた。

1. 参加者の意識の向上：ワークショップに参加した生徒は、戦争・原爆についてより深く理解することができた。また、平和について考えることばできた。
2. 協働とコミュニケーションの向上：参加者は、グループワークやディスカッションを通じて、協働することの重要性を学んだ。また、コミュニケーションスキルを向上させ、お互いの意見を尊重することが重要であることを学んだ。
3. 平和への貢献：ワークショップに参加した生徒は、平和を維持するための具体的な方法について学び、地域や国際的なレベルで平和を促進するための方法を考えることができた。

このようなワークショップは、個人やコミュニティの平和への貢献につながる可能性があり、参加者は、学んだことを実践し、平和への取り組みを始めることができる。

ワークショップを通して、本学生たちがユース・ファシリテーターとして、主体性が高まり、積極的に取り組む姿勢が見られた。そして、国内外の生徒たちと交流することによって平和教育の重要性を実感することができた。

今後はさらに多くの生徒にワークショップを開催し、本学生がファシリテーターとなり、日本と海外の小中高校生と一緒に学べるようなワークショップを開始することである。そして、国際協働学習を通して、ファシリテーション・スキルとグローバルリーダシップの育成に力を入れたい。

Future Teachers プロジェクト KOSKO

～未来の教員たちによる国際チームの挑戦と課題～

明治学院大学 長谷川早百合

ICT を使って世界と共に学ぶ国際協働学習を小学校現場で実践できる機会が整う一方で、それを実現させる教育者が必要になる。未来の教員たちが集まる iEARN Future Teachers に参加した今年度の日米学生たちは小学生に紹介する HERO を選び、日米交流を含めたローカル授業の概要を考えた。この体験を通して相互文化的教育の価値と世界市民として必要なコンピテンス、そして日本の小学校に海外交流を導入することについて考えることができた。

国際協働学習・Global PBL GIGA スクール 小学校教員

1. はじめに

iEARN の Future Teachers フォーラム（以下、FT）は、教育を専門とする大学教授と教え子の“未来の教員”たちが集まる場所である。教員の養成方法を変えることから教室や学校を変えるというビジョンを 1999 年に掲げ、教員を目指す学生たちが 21 世紀の教育について他国の「仲間」と対話するというグローバルな学習ネットワークの直接的体験をファシリテーターたちは支えている（iEARN, 2022, p. 57）。

日本では GIGA スクールの進展もあり、ICT を使って世界と共に学ぶ SDGs に沿った国際協働学習を小学校現場で実践できる機会が整う一方で、それを実現させる教育者が必要になる。英語講師である筆者の授業は、未来の小学校教員もいる教育発達学科の学生を対象としている。彼らが英語を活用し、FT で国際協働学習を体験することに大きな意義があると考え、2020 年度よりグローバル教育に関わる米国の教授と毎年 FT に参加している。3 回目の今年度は（1・2 回目は本レポート 2020・2021 年度に報告済み）米国の学生たちの小学校実習と重なり、よりオーセンティックな課題を日米チームとして成し遂げることを考案した。その実践を報告する。

2. 目的と方法

2-1 目的

今回のプロジェクトは以下を目的とした。

- ①相互文化的教育の価値を考えさせる
- ②世界市民として必要なグローバルコンピテンスや相互文化的出会いを意識させる。
- ③日本の小学校にバーチャル交流・国際協働学習を導入することについて考える機会を与える

2-2 方法

1) 実施計画案

実践英語コミュニケーション課程の中で実施（90 分 x 15 コマ。交流期間は 11 コマ）。

2) 内容項目

米国の小学校教員養成課程の学生 10 名と日本の教育発達学科の学生 8 名を、3 つの日米国際チーム、1 つの米国チーム、1 つの日本チームの 5 グループに分けた。国際チームは、日米小学生に紹介する同じ HERO を選び、日米交流を含めたローカル授業の概要を考える。国内チームは違うヒーローを選ぶものの、相手の小学生（仮想）との交流を盛り込むこととした。国際協働学習は 5 つの段階（表 1 参照）に沿って実施した。

表 1 HERO プロジェクトの段階

段階	実施項目（タスク）
Phase 1	自己紹介・課題共有 (バーチャル会議①+FT Forum 上)
Phase 2	HERO 調べ学習・iEARN My HERO Learning Circle 参加 (バーチャル会議②+FT Forum 上)
Phase 3	HERO 成果物の作成 (グループ内・グループ間交流)
Phase 4	HERO 成果物の共有 プレゼン+コメント (バーチャル会議③・図 1)
Phase 5	プロジェクト振り返り+コメント (FT Forum 上)



図 1 バーチャル会議③（Phase 4 成果物の共有）

3. 活動内容

3-1 Phase 1 自己紹介・課題共有

第 1 回目のバーチャル会議では、初顔合わせ

のために準備した FT の “I am from…” の詩を紹介し、プロジェクト課題、今後のスケジュールやチームメンバーを確認した。FT フォーラムでも詩を掲載し、自分の「ヒーロー」を紹介し、互いにコメントしあった。

3-2 Phase 2 調べ学習・iEARN My HERO 参加

日米の学校で学ぶ HERO を調べ、選んだ人物が授業で紹介される理由とともにまとめ、FT フォーラムで共有した。国際協働学習の参考事例として iEARN My Hero Learning Circle にも参加させてもらい見学した。第 2 回バーチャル会議では、学校で取り上げられる HERO について話し合い、HERO の特性を考えた。最後に、環境汚染について訴え続けた女子生徒のビデオを全員で視聴し HERO について考えをさらに深めた。

3-3 Phase 3 HERO 成果物の作成

課題をまとめる作業に入り発表する最終成果物を作成した。各チームは選んだ HERO (図 2 参照) をもとに以下内容を準備した。

I. Biography of your hero

II. Why teach your hero?

III. How will you teach your hero?

a) Foreign language class (Japan) / LLs* & Social Studies class (US) *Language Learners

b) Virtual Exchange (VE) -Why & How

c) Lesson flow

d) Key material (introducing the hero)

IV. Final words

V. References/Resources

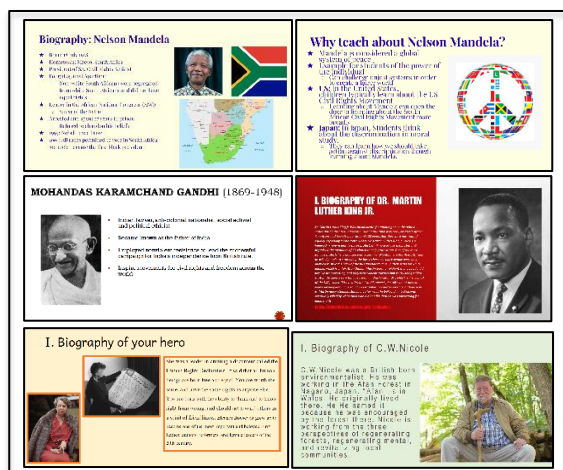


図 2 国際・国内チームの HERO 資料 (左上時計回り N. マンデラ、M. L. キング、C. W. ニコル、E. ルースベルト、M. K. ガンジ)

国際チームの学生たちは、連絡を取り合い、内容を決め、プレゼン資料をどのように誰が仕上げるかなどを 13 時間の時差を考慮しながら挑戦した。また米国・日本の国内チームも、上記 III. b) の打ち合わせに挑んだ。ZOOM 会議を設定したのは 1 チーム。残りは SNS やメールで打ち

合わせをしていた。

3-4 Phase 4 HERO 成果物の共有

第 3 回バーチャル会議では、各グループが選んだ HERO をもとに上記内容に沿って発表した。聞き手は jamboard を使って考えや疑問を共有した。

3-5 Phase 5 プロジェクト振り返り

同じ問いに沿った振り返りを全員 FT フォーラムに掲載し、それに対するコメントや感謝の気持ちを書き込み、米国との国際協働学習を終えた。

4 成果と課題

○成果

最終成果物のチーム発表はスムーズに行われ、良くまとまっていた。振り返りではより多くの時間を国際チーム内で過ごせばよかったと悔しさが滲んでいた。

- ・学生たちにとって相互文化的教育の価値は、英語を使ったコミュニケーションに対する精神的バリアが下がり、英語への自信が付くことであった。外国人と話したことはあっても協働した経験はなく、それが可能である発見、違いや同じ点への気づきを得ていた。

- ・世界市民として必要なグローバルコンピテンスは本プロジェクトを通じて初めてピンときたようだった。複眼的視点や相互文化的コミュニケーションの意味や重要性を体感していた。一方で、さらなる実践に移す側面は欠けていると自己評価していた。

- ・日本の小学校にとって、バーチャルエクステンジによる国際協働学習は主体性を育み異文化への興味と偏見なく繋がりを作る重要な機会だと学生たちは理解していた。

○課題

FT ではプロジェクト内容をパートナーの先生と一緒に作り上げるため、相手の先生とのパートナーシップが重要である。継続する場合も新たに相手を探す場合も鍵となるのがファシリテーターのサポートと参加目的の明確化だと考える。いずれにせよ、iEARN Teachers は学生たちの異文化間交流を求めているため双方にとってメリットある国際協働学習が設計できると思う。学生たちも未来の教員だけあって相手との交流における困難を乗り越えようとする意志と能力が高く FT を通じてポテンシャルがさらに開花すると思う。同じ教員を目指す者同士の国際協働学習は貴重な体験であり、日本の子供たちの為に教員養成課程で FT を導入する価値があると感じる。

参考文献

iEARN. (2022). Project Book.

<https://iearn.org/assets/resources/2022-2023-Project-Book-Digital.pdf>

大学生による国際協働学習支援

～ティビピアプロジェクト支援～

金沢星稜大学 清水和久

2022 年度は、大学性が交流支援を行ってきた台湾の小学校への訪問が3年ぶりに可能となった。ここ2年間は covid19 のために台湾に訪問できず、大学生が現地を見て小学生に報告することがやっと可能となった。また、今回は交流支援としてのこれまでの「導入授業としての100人村ワークショップ」「交流先を題材としたプログラミング教育の活用」に加え、児童のオンラインコミュニケーションスキルのための教材の開発と zoom における小グループ会議」に新たに取り組むことができた。

キーワード 国際協働学習 プログラミング教育 オンラインコミュニケーションスキル

1. はじめに

筆者は小学校教員養成系の大学に在籍し、小学校教員を目指す学生に対して、国際協働学習の有益性を伝えたいと願っている。そこで、大学のゼミの学生と国際協働学習に参加する小学校の先生方とをつなぐ研究会を定期的に開催し、学生がプロジェクトの進行を把握し、プログラミング教育の活用や、オンライン会議の教材と実践等を、新たな支援事項として行うこととした。

2. 目的と方法

2-1 目的

小中学校の国際協働学習にかかわり、支援する取り組みを通して、学生がかかわる有効な支援方法を明らかにする。

2-2 方法

1) 研究会の参加体制と日程の決定

表1 年間の活動日程

月	小学校児童の意識	教師の動き	研究会
4月	学習の見通しを持つ	国際協働学習の動機づけ	
5月	交流相手の台湾について知る	国際協働学習の動機づけ	第1回目 顔合わせ
6月	100人村ワーク体験で交流の意義を知る	交流校とLINEグループの作成	発信情報の蓄積方法の共有
7月	発信内容の調査	地域情報の蓄積	
9月	ベアの性格付けをして送付準備	台湾の交流児童との組み合わせ決定	第2回目：送り方見直し
10月	台湾からベアの到着	ベアとの活動の話し合い	第3回目：ベアの活用方法
11月	TV会議①自己紹介	TV会議練習 大学生を練習相手に	第4回目：課題と解決方法
12月	X'masカード交換 学生へのミッション	英語でカード作成 ミッション決定	第5回目 SDGs のテーマ
1月	TV会議②発表会 学生の台湾報告	SDGs 関係の内容について	
2月	ベアの返却と帰国	振り返り	第6回目：振り返り

- 2) 大学生が支援できる内容の検討と実施（ワークショップ、LINEでの支援等）
- 3) 台湾を題材とするプログラミング教育
- 4) コミュニケーション用教材の開発と実践
- 5) 台湾の小学校訪問と帰国後の報告

3. 活動内容

大学生が行った支援内容

- ① 国際協働学習の導入ワークショップの授業
- ② 台湾の担当校とのLINEグループでの支援
- ③ 台湾探検プログラミング教育の実施
- ④ TV会議の教材の開発と実施
- ⑤ 学生の台湾交流校訪問と報告会

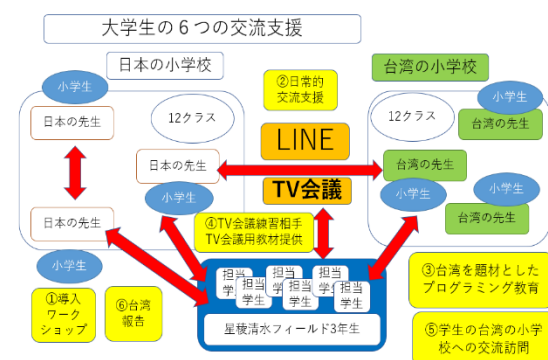


図1 JEARN ユースの関わりの構図

交流相手は台湾の小学校4校12クラス、日本側は石川県内の小学校6校12クラス。学担と大学生は合同研究会を年間6回 zoom で実施。

3-1 大学生の導入ワークショップの授業

小学生に外国について興味を持ってもらう契機として「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを大学生がアレンジして実施。世界の人口比、識字率、富の偏在、世界の挨拶（英語の重要性）などを小学生1人1人が世界

の住人となって体験するワークショップ。ここで世界の事を知る重要性に気づくことになる。



図2 100人村のスライド表紙

3-2 日常的な交流支援

交流クラスごとにLINEグループを作成し、日本と台湾の先生の各グループの中に大学生も参加、コミュニケーションがスムーズにいくように潤滑油的な役割を果たした。翻訳アプリの活用で、かなりの意思疎通ができた。

3-3 台湾探検のプログラミング教育

小学校ではプログラミング教育を年間10時間程度行うようになっている、そこで台湾を題材としてドローンで台湾の地を飛行するコースを作成、プログラミングを学びながら、台湾のことを学べるカリキュラムを実施した。

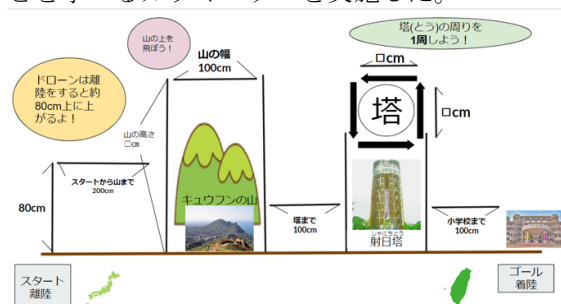


図3 台湾嘉義市のプログラミングコース

出発が日本。台湾の有名な観光地「九份」の山を越え、嘉義市の射日塔を周回して交流相手の小学校に着陸するコースである。ドローンをプログラミングしながら交流先の台湾を意識したコースとなっている。

3-4 TV会議の教材の開発と実施

台湾の小学生と小グループでWEB会議をする場合には、オンライン上のコミュニケーションスキルが必要となってくる。過去には大学生が小学生の練習相手となっていたが、対応しなければならない学校が増えてくるとマンパワーが足りない。そこで、スキルを高める教材を作成。しかもその教材はスキルを教え込むものではなく、道德のTV番組のように、答えを自分たちで考えさせる形をとった。

教材の内容は、小学生に扮した大学生がWEB会議をするのであるがうまくいかない場面でおわるビデオ作成。なぜうまくいかないかを小学生自身が考える教材とした。項目は、「話し方」「聞き方」「話の内容」「聞いている内容」「話のつなぎ方」の5つのスキルであ

る。日本側はこの教材を学習した上で行ったが、台湾側にこのスキルの事を十分伝えてなかったもので、バランスの良いやり取りにならなかった。次年度は英語版の教材作成し事前学習をしたうえで取り組む予定である。

3-5 大学生の台湾訪問と報告会

12月の末に台湾の交流校4校へ訪問した。訪問前に日本の小学生から台湾について知りたいことを事前に聞いておき、台湾でその答えを確かめくるというミッション形式で実施した。

台湾に訪問する時には、日本の交流ペアが作成したNew Yearカードを持参し、直接渡し、その様子を録画した。また学校の外観やクラスで様子、日本から送ったテディベアがクラスで大事にされている様子を撮影してきた。

大学生は帰国後、担当の日本の学校で台湾の様子をビデオにまとめ報告をおこなった。小学生は自分たちが見てきてほしいものを大学生が代わりに見てきて報告してくれたので自分が行ったような気持ちになり、より台湾を身近に感じていたようである。

4. 成果と課題

○成果

- ・大学生が日本と台湾の先生との交流の間に入ることで、初めて国際交流を行う日本の先生ともノウハウを共有でき、支援することができた。
- ・これから必要とされるオンラインコミュニケーションスキルをつける必然的な活動を設定することができた。また作成した教材は、児童の主体性を大切にするために、話題提供の形のものにし、どうすればよいかは児童自身に考えてもらう形にしたので、児童の主体性を育むものとなった。
- ・大学生にとっては国際交流を作る一連のプロセスを体験でき、現場の先生の動きを逐一知ることができた。また台湾の先生とのつながりを作ることができたので、自分が教師になった時の有益な経験となった。

- ・Covid19後、台湾に学生が実際に訪問できたことで、小学生の思いを大学生に託して相手に伝えるとともに、より細やかな台湾の情報を知ることにつながった。

○課題

- ・オンラインコミュニケーションスキルアップを日本だけが取り組んでもうまくいかない。交流相手にもその意図を事前に伝え、共通の目標をもってzoomでの小グループ会議をすることで、スキルの必要性を感じることができる。
- ・この国際協働学習で、英語でコミュニケーションが取れる面白さと、ICTの有効性を感じることができる機会とバージョンアップしていきたい。

国際協働学習 iEARN レポート

2023 年 6 月 1 日発行

出版元 NPO 法人 JEARN

<https://jearn.jp/iearn-report/index.html>

ISSN 2434-0049